

# 初年次教育学会 第 14 回大会発表要旨集



主催：初年次教育学会

リアルタイムプログラム

2021 年 9 月 11 日(土)～12 日(日)

オンデマンドプログラム(自由研究発表)

2021 年 9 月 11 日(土)～17 日(金)

## 目 次

|                     |                  |    |    |
|---------------------|------------------|----|----|
| ご挨拶                 | ・・・・・・・・・・・・・・・・ | p. | 2  |
| 大会日程                | ・・・・・・・・・・・・・・・・ | p. | 3  |
| 大会プログラム             |                  |    |    |
| 課題研究活動委員会企画シンポジウム 1 | ・・・・・・・・・・・・・・・・ | p. | 5  |
| 課題研究活動委員会企画シンポジウム 2 | ・・・・・・・・・・・・・・・・ | p. | 10 |
| 企画セッション I           | ・・・・・・・・・・・・・・・・ | p. | 18 |
| 企画セッション II          | ・・・・・・・・・・・・・・・・ | p. | 19 |
| 自由研究発表              | ・・・・・・・・・・・・・・・・ | p. | 21 |
| 発表要旨                |                  |    |    |
| ワークショップ             | ・・・・・・・・・・・・・・・・ | p. | 25 |
| ラウンドテーブル            | ・・・・・・・・・・・・・・・・ | p. | 28 |
| 自由研究発表              | ・・・・・・・・・・・・・・・・ | p. | 36 |
| 賛助会員                |                  |    |    |
| 広告一覧                | ・・・・・・・・・・・・・・・・ | p. | 90 |
| 広告                  | ・・・・・・・・・・・・・・・・ | p. | 91 |

## ご 挨 拶

初年次教育学会第14回大会を2021年9月11日～12日の2日間（自由研究発表のオンデマンド配信は9月11日～17日の7日間）、オンラインにて開催するにあたり、一言ご挨拶を申し上げます。

皆様もご存じのとおり新型コロナウイルスの感染拡大に鑑み、2020年度の第13回大会は当初の対面での開催を見送り、大会要旨集の発行による誌上開催のみとなりました。やむを得ない状況であったとはいえ、「会員による研究成果の発表の機会を確保する」という最低限の責任を果たただけで、本学会の特色ともいえる、参加した会員相互の交流の機会をまったく持つことができず、大会運営委員会としても残念な形での大会開催でありました。

その後も、コロナウィルスの猛威は収まることはなく、2021年度もオンラインでの開催とすることになりましたが、昨年度の反省を踏まえまして、できる限り対面での開催に近い形で研究成果の発信および会員の相互交流を図りたいと考え、準備して参りました。本学会は他の学会に比べれば規模も小さく、マンパワーに限りがありますので、十分な形での開催にはならないかもしれませんが、その分、参加される皆様からの積極的な関与をいただくことで、より充実した大会になるのではないかと期待している次第です。

課題研究活動委員会からはシンポジウムを二つ企画していただきました。一日目が「初年次教育における多様性にどう向き合うか」、二日目が「新型コロナウイルス禍が1年生に与えた影響と今後の初年次教育——大学としての取組と会員調査からの知見——」と、いずれも今現在の大学が抱えているホットなテーマでのシンポジウム開催となります。参加される皆様からも、ぜひ活発な質疑応答をいただければと思います。昨年は中止せざるを得なかった、ワークショップやラウンドテーブルも、今大会ではZoom等を用いたオンラインで開催することにいたしました。これらの企画セッションも、企画者側からの一方通行的な情報提供ではなく、参加される皆様のアクティビティによって成立するものであることはいまでもありません。ぜひ一緒に盛り上げていただければと期待しています。

自由研究発表は、予め投稿していただいた動画を配信し、質疑応答を行えるようにしています。対面では一つの時間帯に一つの分科会にしか参加できませんが、今回は7日間の期間、オンデマンド配信を行いますので、その気があればすべての発表を聴くことも可能になっていますし、同じ発表を繰り返し視聴することもできます。対面での発表にはないメリットの一つですので、ぜひ積極的にこの機会をご活用ください。

例年の初年次教育学会の年次大会では、大会に参加した方の約半数が情報交換会にも参加していただいています。それだけ、参加される方が会員相互の交流を楽しみにされているのだと受け止めています。今大会ではGather.Townというシステムを用いて、対面での立ち話に近い形で自由かつ個別に交流できるような場を設定しています。使ったことがないという方も多かろうとは思いますが、直感的に使えるシステムですし、すぐに慣れると思いますから、ぜひ使ってみてください。Gather.Townは情報交換会の時間帯以外にも、参加者相互が自由に交流できる場として、大会開催期間中は開放しておりますので自由に使っていただければと思います。

来年度こそは、皆様と直接お会いできることを祈りつつ、今大会でも精一杯運営に努めて参りますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

初年次教育学会会長・大会運営委員会委員長  
藤田 哲也（法政大学）

# 初年次教育学会第 14 回大会日程

すべてのプログラムは、大会開催日前日から公開される、大会プラットフォーム内からアクセス可能になります（総会は初年次教育学会の会員のみが参加いただけます）。  
別途、参加者向けのメールでもお知らせいたします。

## <リアルタイム>

9 月 11 日（土）

|               |                                              |
|---------------|----------------------------------------------|
| 10:00 ～ 12:00 | 企画セッション I（WS1-1～WS1-3, RT1-1）                |
|               | 休憩                                           |
| 13:00 ～ 13:30 | 総会（会員のみ参加可能）                                 |
|               | 休憩および URL 切り替え                               |
| 13:55 ～ 14:00 | 開会式                                          |
| 14:00 ～ 16:00 | 課題研究活動委員会企画シンポジウム 1：<br>初年次教育における多様性にどう向き合うか |
|               | 休憩および URL 切り替え                               |
| 16:30 ～ 18:00 | 情報交換会（Gather.Town）                           |

9 月 12 日（日）

|               |                                                                                   |
|---------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| 10:00 ～ 12:00 | 企画セッション II（WS2-1～WS2-3, RT2-1）                                                    |
|               | 休憩                                                                                |
| 13:30 ～ 16:00 | 課題研究活動委員会企画シンポジウム 2：<br>新型コロナウイルス禍が 1 年生に与えた影響と今後の初年次教育<br>——大学としての取組と会員調査からの知見—— |
| 16:00 ～ 16:10 | 閉会式                                                                               |

\*第 14 回大会の情報交換会は Gather.Town というシステムを使います。無料で参加いただけます。  
また、情報交換会会場は、リアルタイム開催期間中は随時開放していますので、参加者相互のコミュニケーションの場としてご活用ください。

\*賛助会員の出展には、大会プラットフォーム上からアクセス可能になります。

## <オンデマンド>

9 月 11 日（土）10:00 ～ 9 月 17 日（金）15:00

自由研究発表（動画による発表，上記期間中は質疑応答可能）

\*各発表には、大会プラットフォーム上からアクセス可能になります。



# 大会プログラム

|                               |      |
|-------------------------------|------|
| 課題研究活動委員会企画シンポジウム 1 . . . . . | p.5  |
| 課題研究活動委員会企画シンポジウム 2 . . . . . | p.10 |
| 企画セッション I ・ II . . . . .      | p.18 |
| 自由研究発表 . . . . .              | p.21 |

---

# 課題研究活動委員会企画シンポジウム 1

## 初年次教育における多様性にどう向き合うか

---

【日 時】 2021 年 9 月 11 日（土）14:00～16:00 終了予定

【会 場】 Zoom によるオンライン開催（大会参加者には別途案内を差し上げます）

【タイム・スケジュール】

14:00～14:10 趣旨説明

14:10～14:35 話題提供 1 初年次教育における多様なニーズのある学生の理解と支援

—With コロナ時代の発達障害学生支援とは—

片岡 美華（鹿児島大学）

14:35～15:00 話題提供 2 グループワークの苦手な学生へのキャリア支援

—個人作業主体にワークシートを活用したキャリア教育の取組み—

山本 美奈子（山形大学）

15:00～15:25 話題提供 3 教員の多様性を活かした初年次教育のあり方

—思考を深めるアクティブラーニングに向けて—

井下 千以子（桜美林大学）

15:25～15:55 パネルディスカッション

15:55～16:00 まとめ

司会・趣旨説明・パネルディスカッション進行： 山田 剛史（関西大学）

## 【企画趣旨】

少子化に端を発する人口動態の変化やAIに代表される産業構造の変化が急速に進み、予測困難な時代を生きるこれからの大学生には、在学中に様々な力を身につけておくことが求められています。こうした社会変化を受け、大学教育改革においても3つのポリシーを軸に据えた教学マネジメントの実現、教育・学習方法としてのアクティブラーニング（AL）の推進が強く求められています。実際、様々な調査からもALの実施率は上昇しています。初年次教育においても、少人数のクラス編成でALを取り入れた形で授業がデザイン・実施されているケースが多くみられます。その中で、高校から大学への移行を円滑にするべく、アカデミック・スキルやソーシャル・スキルといった力の涵養が目標に据えられています。また、組織的な質保証を担保するための戦略・方略として、共通シラバスの策定や共通教材の利用なども展開されてきました。

初年次教育は、2000年代以降急速に拡大し、既に日本の大学教育のスタンダードとして定着するに至っています。一方で、この急速に進む社会変化に、今の初年次教育は十分に対応出来ているでしょうか（出口から見た初年次教育）。また、近年、初等・中等教育においても大学入学者選抜改革や学習指導要領の大幅な改定の中で、「主体的・対話的で深い学び」（大学で言うところのAL）や「社会に開かれた教育課程」の実現、「総合的な『探究』の時間」や「GIGAスクール構想（一人一台端末の実現）」など、大学入学前の学習者の経験やスキルが大きく変わってきています。この入学者の変化を適切に把握した上で、初年次教育が展開されているでしょうか（入口から見た初年次教育）。このような問題意識を背景としながら、初年次教育を次の段階に進めるための課題研究として「多様性」の問題に着眼し、ここに焦点化したシンポジウムを企画しました。

多様性はこれからの時代に不可欠かつ極めて重要なテーマです。これまでの初年次教育がどちらかと言うと標準化に軸を置くものだったように思いますが、今後はこの「標準性」と「多様性」の両軸から考えていくこと（どう調停するか）が重要になってくると考えます。とは言え、一言に多様性といっても様々なトピックが存在します。ここが焦点化されず多様性という言葉だけが独り歩きしているようにも感じます。そこで、本シンポジウムでは、発達障害を中心とした多様なニーズを有する学生（片岡氏）、グループワークが苦手な学生（山本氏）、さらに初年次教育に関わる多様な教員（井下氏）といった3つの観点から多様性を捉え、アクティブラーニングをキーとしながら初年次教育の現状や課題に迫りたいと考えます。

導入から一定期間が経ち、良い意味でも悪い意味でも「落ち着いて」きている段階にある初年次教育が、学生・教員の個性や多様性を大切にしながらより良いプログラムへと発展していくためにどんな視点や方法が考えられるのか。本シンポジウムを通じて参加者のみなさまと共有する機会を提供することができれば幸いです。

課題研究委員会委員 山田剛史（関西大学）

## 初年次教育における多様なニーズのある学生の理解と支援

### ——With コロナ時代の発達障害学生支援とは——

片岡 美華（鹿児島大学）

近年、発達障害児者への法整備や支援体制は目覚ましく発展しており、大学における発達障害学生支援もこれに漏れず、広く浸透してきた。多くは、修学支援センター（障害学生支援室等）を中心に心理的支援、学習・生活支援、環境整備などが行われている。とりわけ2016年に施行した「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（差別解消法）」は、障害者の権利条約に基づき不当な差別的取り扱いの禁止と合理的配慮の提供を大学も含めて国民に求めている。この合理的配慮の提供については、各大学でガイドラインを定め、配慮提供過程の整備や合理性の検討など含め事例の蓄積ができてきているであろう。初年次教育においても、入学時に要請し合理的配慮を含めた適切な支援を得ている学生もいれば、様々な理由から円滑に進んでいない学生もいる。例えば前者は、自分で特性を理解し、要支援を自覚、あるいは保護者や教職員との合議を経て配慮を得ている学生と言えるが、後者は当該学生の支援ニーズへの自覚が薄かったり、そもそも支援対象になりうるという発想がなかったりして合理的配慮に必要な「当事者からの要請」がなく、支援のプロセスに載りにくい学生であると言える。さらに後者の学生は概して出席や課題提出がうまくできず何度も単位を落とす、グループワークをすれば他学生から苦情が出るなどにより、教員側が対応を検討せざるを得ない場合もある。このように発達障害と言っても多様な学生がいる中で大学教職員が個人として、組織として何ができるかについて、以下を柱に報告を行う。

1. 初年次教育に関連した発達障害学生の特徴と理解
2. 困難さの背景と発達障害学生支援の在り方

とりわけ2については、発達障害学生が昨年度より広まった遠隔授業の影響を多大に受けていることから成否事例を含めて報告し、with コロナ時代の初年次教育についての検討材料としたい。

#### 【プロフィール】

片岡 美華（かたおか みか）氏

鹿児島大学法文教育学域教育学系准教授。特別支援教育教員養成ならびに教職大学院を担当。2005年にオーストラリア、クィーンズランド大学でPh.D.取得。武庫川女子大学、佐佐短期大学の非常勤職を経て2007年より現職に就く。著書『事例で学ぶ発達障害者のセルフアドボカシー：「合理的配慮」の時代をたくましく生きるための理論と実践』（金子書房）、『発達障害・知的障害のある児童生徒の豊かな自己理解を育むキャリア教育：内面世界を大切にしたい授業プログラム45』（ジアース教育新社）ほか多数。幼保園の巡回相談や学校教員研修、就学支援など通じ当事者・保護者支援や特別支援教育の啓発など地域社会貢献も行う。

## グループワークが苦手な学生のキャリア支援

### ——個人作業主体にワークシートを活用したキャリア教育の取組み——

山本 美奈子（山形大学）

キャリア教育において、主体的・対話的で深い学びの授業形態としてアクティブラーニングが推奨され（厚生労働省，2015），グループワークやディスカッションを取り入れた授業が活発に取組まれている。しかし，グループワークが苦手な学生も一定数，存在する。こうした学生の課題に対して，グループワーク以外の方法を検討したキャリア教育の研究報告は，殆どない。

本学では，こうした多様な学生に配慮し，グループワークや個人ワークを取り入れた複数の授業形態のなかから学生が選択できるようにしている。本報告では，個人作業主体のワークシートを活用したキャリア教育が，学生の主体的・対話的で深い学びにつながっているかを検証した結果を報告する。ワークシートを活用し個人作業主体にしたのは，自分のキャリアを選択するプロセスには，自分と対話し，自分で決めていくことが重要だからである。

個人作業主体のワークシートを活用した授業運営は，①事例紹介，②キャリア理論の説明，③個人作業，④解説の4つで構成している。教員の解説は15分以内を目安にし，学生はキャリア理論を基に自分の経験を振り返り，事例を参考にワークシートを活用し考えて書く時間を授業全体の40～50%占めるように工夫している。

結果として，ワークシートを活用した個人作業主体のキャリア教育の授業は，自尊感情や進路選択自己効力が履修開始時に比べ，終了後は有意に向上していた。この結果は，筆者が報告<sup>注)</sup>したグループワークを主体にしたキャリア教育と同様の効果であることがわかった。当日は，これらの結果に加え，リフレクションシートの自由記述や課題の提出状況なども踏まえ，グループワークが苦手な学生のキャリア教育の在り方について考察したい。

注) 山本美奈子・松坂暢浩・小倉泰憲（2019）「大学生の自己理解を促すキャリア教育-ARCSモデルを活用した授業運営の効果と検討-」『キャリアデザイン研究』

#### 【プロフィール】

山本 美奈子（やまもと みなこ）氏

山形大学学術研究院（学士課程基盤教育機構）准教授。博士（ヒューマン・ケア科学）。園田学園女子大学，四條畷学園大学，独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構を経て，2017年より現職。主にキャリア教育やインターシップ教育を担当し，キャリアサポートセンターの進路・就職支援も兼任。

産学連携のキャリア教育支援，多様な学生への官学連携のキャリア就職支援など地域社会貢献に尽力。主な著書として『大学生のキャリアの可能性を広げる3つのワーク』（山形大学生協電子書籍）ほか。主な受賞歴として文部科学省「大学等におけるインターンシップ表彰」文部科学大臣表彰 最優秀賞受賞。

## 教員の多様性を活かした初年次教育のあり方 ——思考を深めるアクティブラーニングに向けて——

井下 千以子（桜美林大学）

平成 28 年に文部科学省が公表した「高大接続改革の全体像」では、初年次教育はアドミッションポリシー(AP)に対応した内容であること、またカリキュラムポリシー(CP)に沿って初年次教育を実施すべきであることが明示されており、初年次教育は AP と CP をつなげる要として、ディプロマポリシー(DP)も含めた 3 ポリシーに位置づけ捉えられている。

しかし、カリキュラムにおける初年次教育の位置づけを明瞭に理解したうえで授業を展開している教員はどれだけいるだろうか。初年次教育で培った力を学士課程カリキュラムに位置づけ、大学 4 年間の教育の一環としてどのように活かそうとしているかなど、初年次教育の成果が組織において十分に活用されているとは言い難い状況も見受けられる。

初年次教育は、本学会の貢献もあって、その重要性が認識され普及した。正課科目として教材も多数開発されてきている。一方で、ある程度のサイクルが出来上がると、あとは回していくだけというような形骸化も懸念され、理念と内実との乖離を踏まえ、新たな初年次教育のあり方を再考する段階に入ったと思われる。さらに、教授法としてのアクティブラーニングが急速に広まったことで、表層的な外的活動を煽る趨勢も散見される。

本報告では、こうした実情を俯瞰した上で、初年次教育担当者に限らず、担当外の教員も含め、教員の多様性を活かした初年次教育のあり方について、思考を深めるアクティブラーニングの観点から検討することを目的とする。

具体的には、事例として、桜美林大学における基礎教育の変遷を辿りつつ、開発した初年次教材の背景にある理念、専門科目との連関の試み、さらにはコロナ禍での学生の学びについて、アクティブラーニングを中核に据えて考察することとしたい。

### 【プロフィール】

井下 千以子（いのした ちいこ）氏

桜美林大学・リベラルアーツ学群・教授。慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科非常勤講師。京都大学大学院教育学研究科非常勤講師などを経て現職。主な著書『思考を鍛える大学の学び入門－論理的な考え方・書き方からキャリアデザインまで[第 2 版]』（慶應義塾大学出版会）、『思考を鍛えるレポート・論文作成法[第 3 版]』（慶應義塾大学出版会）、『大学における書く力考える力－認知心理学の知見をもとに』（東信堂）ほか。大学教育学会第 1 回奨励賞受賞。

---

## 課題研究活動委員会企画シンポジウム 2

### 新型コロナウイルス禍が1年生に与えた影響と今後の初年次教育 ——大学としての取組と会員調査からの知見——

---

【日 時】 2021 年 9 月 12 日（日）13:30～16:00 終了予定

【会 場】 Zoom によるオンライン開催（大会参加者には別途案内を差し上げます）

【タイム・スケジュール】

13:30～13:35 趣旨説明

13:35～13:55 話題提供 1 初年次生へのコロナ禍の影響と課題  
——学生調査からみた課題把握と必要な対応——

濱名 篤（関西国際大学）

13:55～14:15 話題提供 2 コロナ禍における初年次教育の組織的展開  
——「自立と体験 1」の経験から——

菊地 滋夫（明星大学）

14:15～14:35 話題提供 3 大阪大学におけるコロナ禍による1年生への影響と全学初年次教育  
——「学問への扉」の実践——

村上 正行（大阪大学）

14:35～14:55 会員調査報告 会員調査からみたコロナ禍における初年次教育

山田 剛史（関西大学）

14:55～15:00 休憩

15:00～15:15 指定討論

15:15～16:00 総括討論

司会：川嶋 太津夫（大阪大学）

コメンテーター：藤本 元啓（崇城大学）

## 【企画趣旨】

### 新型コロナウイルス禍が1年生に与えた影響と今後の初年次教育

新型コロナ感染症によって大学教育が影響を受け始めてすでに1年半余りが経過した。2020年においては多くの大学が前期授業を対面で行うことができず、これまで多くの大学等の教育機関が教育に広く活用してくることが多かったとはいえないリモート方式あるいは、対面とリモートを組み合わせたハイブリッド方式による教育を行うことを余儀なくされた。その結果、2020年度入学者が大学教育にどのように取り組み、どのような状況にあったのか、また、大学や教職員はどのようにしてこの事態に取り組んだのかということを検証しておくことは、初年次生の大学教育への適応を促進するための初年次教育学会としての責任であるといっていいたい。

コロナ禍は現在も継続しており、2021年入学生にとっても昨年と学習状況に大きな差はないといってもいい。このような状況が2年続いている中で、大学・短期大学等機関レベルだけでなく、現場の教職員はどのように教育や学生支援に取り組んできたのだろうか。コロナ禍でどのような問題や課題に直面し、どのように対応し、新たに取り入れたり変化したりしたことはどのようなことなのか、これから解決していくべき課題や新たな可能性はあるのだろうか。現状分析を行ったうえで、With コロナやポスト・コロナの大学教育、とりわけ初年次教育にとって、解決しなければならない課題認識の共有と解決に向けての対応を会員各位の参加を得て行いたい。

話題提供は、学生調査による分析を濱名会員より、実際の大学としての取組の事例を菊地、村上両会員からしてもらう。併せて、課題研究委員会から提案して7～8月に本学会として実施した「初年次教育におけるCOVID-19への対応実態についての調査」の集計・分析結果を山田会員から行ってもらう。学生、機関、教職員の3つの視点から、コロナ禍を受けた日本の初年次教育のこれからの在り方を考える契機としたい。

課題研究委員会委員長 濱名 篤（関西国際大学）



## 初年次生へのコロナ禍の影響と課題

### ——学生調査からみた課題把握と必要な対応——

濱名 篤（関西国際大学）

#### 1. 学生調査からとらえる

コロナ禍に直面した初年次生は大学生活をどのように捉えているのであろうか。そして初年次生の大学適応を促進するために、大学にはどのような工夫と配慮が求められるだろうか。本稿では3種類の調査データ(①本学学生を対象とする適応度調査の2019・20年度比較, ②本学を含むCCP6調査=6私立大学学生調査, ③本学学生を対象とするコロナ禍での学習についての調査の結果を用い, コロナ禍における1年生の現状を把握し, 大学が取り組むべき課題について明らかにし, With コロナ, ポストコロナの初年次教育に向けての対応について提案したい。

#### 2. 2020年1年生と例年の1年生の相違点

2020年の大学1年生は例年と比べ, 大学生活への適応等でどのように違うのだろうか(調査①)。学習, 自尊感情の項目について2020年1年生の平均は高いか差がないことを考えると, 大学生活全般における不適応感が2021年の特徴であるといえる。なお, 情緒不安定性については2020年1年生が高く, 心身の健康を問う項目について7月と12月を比較したところ, 12月の方が健康度は低かった。長引く行動の制限とコロナ感染への不安は学生の心身に負の影響を与えていると考えられる。

2020年1年生の7月の適応度調査と2019年1年生の6月の適応度調査を比較する。この調査では大学生活全般における適応感を測定する総合的な指標として「学習面」「対人関係」「生活全般」でうまくいっているかどうかを問う3項目を設定している。この指標をみると, すべての回答で2020年1年生のほうが2019年1年生よりも低い値を示している。学習, 自尊感情の項目について2020年1年生の平均は高いか差がないことを考えると, 大学生活全般における不適応感が2020年の特徴である。

#### 3. 授業形式の選択は学生にどのような違いをもたらしたか

体調面についての大きな差はないが, メンタル面については対面学生のほうが相対的に良い傾向である。学習面については対面と遠隔で大きな差はないものの, グループ活動については対面のほうが高い。対人関係については, うまくいっている, と感じているのは対面授業を選択した学生に多く, 同期生との関係も対面を選択した学生のほうが良いと答えている。

調査②は, 関西国際, 名桜, 宮崎国際, 富山国際, 共愛学園前橋国際, 淑徳の6大学の学生が, コロナ禍で社会がどう変化し, 今後どう変化していくかを研究する大学間連携プロジェクトの一環として, 6大学の学生を対象に「新型コロナウイルスによる学生生活への影響に関する調査」として実施したものである。

これらの中小規模校の学生での評価をみると, いずれの形式でも評価は分かれており, 一概にどの方式が最適とは言えないが, オンディマンド方式に対する評価がもっと低くなっている。どの授業方式についても不安を感じる学生が一定数は存在する。つまり, どのような

授業方式であっても不安を感じる一定層の学生は今後も存在する。「安全」というのは、主観的な事項であり、個人差が大きいということかもしれない。

こうした不安が伴う学習状況にあって、1年生にとって最も大きな不安となっているのが「知識やスキルが本当に身についているかどうか」ということである。どの学年でも6割以上がこの不安を抱いているが、とりわけ1年生でこの不安を抱くものが多い。遠隔授業での学習が多かったことによるものであると考えられるが、学生は友人たちとの授業中のグループワークや反応を目の当たりにすることにより、知識やスキルを「身についた」という実感を得ていると考えられる。

人間関係の構築と知識・スキルの修得実感をどのように持ってもらうかは、コロナ下における初年次教育にとっての大きな課題である。

【以下は、当日配布資料参照】

#### 【プロフィール】

濱名 篤（はまな あつし）氏

関西国際大学学長・基盤教育機構教授。上智大学大学院文学研究科社会学専攻博士後期課程単位取得。博士（社会学）。関西女学院短期大学を経て、関西国際大学教授。2005年より学長。『実務家教員の理論と実践』（共著）社会情報大学院大学出版部 2021年、『学修成果への挑戦-地方大学からの教育改革』東信堂 2018年、『進化する初年次教育』（共著）世界思想社 2018年他。大学教育学会（常任理事）、本学会理事。

## コロナ禍における初年次教育の組織的展開

### ——「自立と体験 1」の経験から——

菊地 滋夫（明星大学）

2000 年代以降の教育改革に見られる特徴の一つは、大学教育の組織的展開が本格的に開始したことではないでしょうか。話題提供者が所属する明星大学でも全学的な初年次教育科目の導入に向けた検討が 2008 年度よりスタートし、2010 年度には学部学科横断クラスを最大の特徴とする全学初年次教育科目「自立と体験 1」が開講しました。学部学科横断クラスを編成して初年次教育に取り組む大学はその後徐々に増えており、2020 年現在、明星大学のみならず、私立大学では、日本大学、京都産業大学、神戸常磐大学、東京家政大学などが、国立大学でも九州大学などが、それぞれ特色ある学部学科横断型初年次教育を実施しています。

コロナ禍によって初年次教育が受けた影響や、それを乗り越えるために試みた方策について報告し、そこから気づきや発見、教訓などを導き出そうとする際には、この大学教育の組織的展開という文脈に留意する必要があります。組織的な取り組みだからこそできることもあれば、組織的な取り組みゆえの困難もあるでしょう。明星大学の全学初年次教育は、まさに全学的な取り組みであるだけに、これらが顕著に表れていました。本報告では、コロナ禍により遠隔授業での実施となった 2020 年度の「自立と体験 1」の取り組みを中心に紹介し、気づきや発見、ポストコロナの初年次教育につながる可能性のある知見についても共有する機会にできればと思います。

なお、本報告は『初年次教育学会誌』第 13 巻第 1 号（2021 年 3 月 31 日発行）の【特集：コロナ禍における初年次教育】に掲載された同名の報告「コロナ禍における初年次教育の組織的展開——「自立と体験 1」の経験から——」（菊地滋夫・鈴木浩子）に基づきますが、コロナ禍 2 年目となる 2021 年度の初年次教育においては、当然ながら前年度とは異なる点も見られました。初回から最終回に至るまでの全 15 回の授業すべてが、70 余りの全クラスで Zoom を用いたアクティブラーニング形式で実施されたこともその一つです。報告では、これらについても言及する予定です。

#### 【プロフィール】

菊地 滋夫（きくち しげお）氏

明星大学人文学部教授。同大学人文学部専任講師、助教授を経て、2007 年 4 月より現職。専門は社会人類学とアフリカ研究。明星大学では、全学初年次教育科目「自立と体験 1」の設置と同科目を運営する明星大学明星教育センターの立ち上げに携わる。初年次教育に関する著書（分担執筆）としては、『進化する初年次教育』（世界思想社）など。初年次教育学会理事・事務局長、日本ナイル・エチオピア学会運営幹事、大学セミナーハウス新任教員研修セミナー運営委員長。

## 大阪大学におけるコロナ禍による1年生への影響と 全学初年次教育「学問への扉」の実践

村上 正行（大阪大学）

2020年、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響によって多くの大学においてオンライン授業が実施されることになり、大阪大学では、2020年3月に“COVID-19に関わる新学期授業支援対策チーム”を発足して、さまざまな支援を行ってきた（村上ら 2020a）。2020年度に実施した大阪大学におけるオンライン授業に関する質問紙調査の結果において、学生、教員ともに徐々にオンライン授業に慣れていったこと、学生は課題の量が多いと感じていたことに加え、1年生の評価が2年生以上に比べて全体的に低い結果となっていた（村上ら 2021a）。これは、大学生活において一度も対面授業を経験せずにオンライン授業を受講したことが原因だと考えられる。

大阪大学で2019年度から全学必修科目として開講している少人数セミナー型初年次導入科目「学問への扉」は、1年生約3,400名を対象として、定員17名、約250コマを開講している。大阪大学に所属するすべての教員が授業を担当するシステムであり、担当教員の専門分野や研究に基づいた、人文科学・社会科学・自然科学を網羅した多様な授業を提供できることが特徴である。授業の目的は、(1) 高校までの受動的で知識蓄積型の学びから、主体的で創造的な学びへの転換、(2) 異分野の学生らと興味ある内容を学ぶ中で、異なったものの見方や課題解決の道筋の意識、(3) アカデミック・スキルズ（レポートやプレゼンテーションなど）の学習を含む、大学における学びの基礎科目、としている（村上ら 2020b）。

「学問への扉」も2020年度はオンライン授業となったため、フィールドワークなどは不可能となったが、制限された中でもさまざまな工夫によって実施された。授業全体の満足度については、5件法で平均4.37であり、2019年度は4.09だったことから、かなり向上した結果となった（村上ら 2021b）。この理由として、1年生はキャンパスでの対面授業の経験がない状態でオンライン授業を受講することになり、6割がオンデマンド型授業であったこと、リアルタイムの授業でも学生同士のやり取りが多くあったわけでもなく、教員や学生同士の交流を求めていることが考えられる。

本報告では、2021年度のアンケート結果も含めて、コロナ禍による1年生への影響、「学問への扉」におけるオンライン授業、ハイフレックス授業の影響について紹介する。

### 引用文献

- 村上・佐藤・大山・権藤・浦田・根岸・浦西・竹村（2020a）「大阪大学におけるメディア授業実施に関する全学的な支援体制の整備と新入生支援の取り組み」教育システム情報学会誌 Vol.37, No.4, pp276-285
- 村上・安部・中・和嶋・杉山・宇野（2020b）「大阪大学における全学初年次教育「学問への扉」の実践と評価」第26回大学教育研究フォーラム発表論文集 p210
- 村上・進藤・田中（2021a）「大阪大学におけるオンライン授業に対する教員・学生の評価」日本教育工学会 2021年春季全国大会講演論文集 pp191-192

村上・安部・中・杉山・宇野（2021b）「大阪大学における全学初年次教育「学問への扉」のオンライン化とその影響」第 27 回大学教育研究フォーラム発表論文集 p149

【プロフィール】

村上 正行（むらかみ まさゆき）氏

大阪大学全学教育推進機構教育学習支援部 教授。京都大学大学院情報学研究科博士課程指導認定退学。京都外国語大学マルチメディア教育研究センター専任講師，准教授，教授などを経て，2019 年より現職。博士（情報学）。専門は教育工学，大学教育学。編著として『教育工学における大学教育研究（教育工学選書Ⅱ 6）』（ミネルヴァ書房）。日本教育工学会副会長，教育システム情報学会理事，日本教育メディア学会理事など。

## 会員調査からみたコロナ禍における初年次教育

山田 剛史（関西大学）

2020 年初頭より世界中で猛威を振るう新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は、大学教育にも大きな影響をもたらしました。特に、大学入学直後からキャンパスに来ることが出来ず、遠隔授業を余儀なくされた新入生（2020 年度・2021 年度入学生）にとっては、学習面や精神衛生面での影響が大きかったことが様々な学生調査からも読み取れます。各大学においても、緊急対応型遠隔授業の実施に伴う通信環境やデバイス等ハード面での整備やガイドライン等ソフト面での整備、FD 活動の推進など様々な対応を行ってきました。経済的支援やピア・サポート等の施策を盛り込んだ緊急学生支援パッケージの導入なども進められました。このように教育・学生支援双方で様々な課題に挑戦してきました。

このような中、初年次教育学会では、高校教育から大学教育への円滑な移行を促進するための初年次教育が、どのように取り組まれ、どのような課題に直面し、どのようにその課題に取り組んできたか、教職員からみた実態の把握とこれからの初年次教育のあり方について提言することを目的に、大学において様々な立場で今回の問題に対応されてきた会員の皆様を対象にアンケート調査を実施することとしました。実施の経緯に関して、理事会に置かれている課題研究活動委員会が中心となり、「初年次教育における COVID-19 への対応実態についての調査 WG」を設置し、そこで調査内容や実施方法等について協議しました。その後、理事会において倫理審査を行い、承認を得て、実施する運びとなりました。調査の実施期間は「7 月 22 日（木）～8 月 13 日（金）」となっており、現在も実施中のため、結果の詳細についてはシンポジウムにおいて報告させていただきます。

最後に、本調査にご協力いただいた会員の皆様に御礼申し上げます。

### 【プロフィール】

山田 剛史（やまだ つよし）氏

関西大学教育推進部教授。島根大学教育開発センター、愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室、京都大学高等教育研究開発推進センター・大学院教育学研究科を経て、2020 年 10 月より現職。専門は教育開発（教育学）と青年発達（心理学）。著書『大学生の主体的学びを促すカリキュラム・デザイン』（ナカニシヤ出版）、『シリーズ大学の教授法 4 学習評価』（玉川大学出版）など。初年次教育学会理事、日本青年心理学会常任理事、大学教育学会代議員、日本アカデミック・アドバイジング協会副会長、東山中学・高等学校土台力教育開発センター教育顧問。

## 企画セッションⅠ 9月11日(土) 10:00—12:00

| ワークショップ (WS1-1～WS1-3) |                      |                        |                                     |
|-----------------------|----------------------|------------------------|-------------------------------------|
|                       | 担当者                  | 所属                     | 題目                                  |
| WS1-1                 | 山田剛史                 | 関西大学                   | コロナ禍での初年次教育を振り返り，これからの初年次教育をリデザインする |
| WS1-2                 | 田中 岳<br>立石慎治<br>宮浦 崇 | 岡山大学<br>筑波大学<br>九州工業大学 | 初年次教育×オンライン×キャンパス                   |
| WS1-3                 | 蓮 行                  | 京都大学大学院                | オンライン授業で活用できる「演劇的手法」                |

\*WS1-1 は，2 日目の WS2-1 と同じ内容での開催となります。

| ラウンドテーブル (RT1-1) |                              |                                    |                                   |
|------------------|------------------------------|------------------------------------|-----------------------------------|
|                  | 担当者                          | 所属                                 | 題目                                |
| RT1-1            | 藤本元啓<br>西村秀雄<br>垣花 渉<br>大嶋康裕 | 崇城大学<br>金沢工業大学<br>石川県立看護大学<br>崇城大学 | コロナ禍におけるオンライン初年次教育の試みと失敗，そしてその再構築 |

## 企画セッション II 9月12日(日) 10:00—12:00

| ワークショップ (WS2-1～WS2-3) |                                      |                                            |                                          |
|-----------------------|--------------------------------------|--------------------------------------------|------------------------------------------|
|                       | 担当者                                  | 所属                                         | 題目                                       |
| WS2-1                 | 山田剛史                                 | 関西大学                                       | コロナ禍での初年次教育を振り返り，これからの初年次教育をリデザインする      |
| WS2-2                 | 成田秀夫<br>山本啓一<br>吉村充功<br>菊地滋夫<br>垣花 渉 | 大正大学<br>北陸大学<br>日本文理大学<br>明星大学<br>石川県立看護大学 | 2030年の初年次教育を構想する<br>—初年次教育のパラダイム転換を目指して— |
| WS2-3                 | 安永 悟                                 | 久留米大学                                      | LTD 話し合い学習法<br>—基礎と応用—                   |

\*WS2-1 は，1日目の WS1-1 と同じ内容での開催となります。

| ラウンドテーブル (RT2-1) |                               |                                           |                                                |
|------------------|-------------------------------|-------------------------------------------|------------------------------------------------|
|                  | 担当者                           | 所属                                        | 題目                                             |
| RT2-1            | 川崎弘也<br>本田直也<br>日置和人<br>光成研一郎 | (株)ラーニングバリュー<br>大手前大学<br>神戸学院大学<br>神戸常盤大学 | 学びのモチベーションを集团的に喚起する<br>—初年次教育での組織開発的アプローチ事例から— |



# ワークショップ（WS）とラウンドテーブル（RT）について

## 1. ワークショップ（120 分）

初年次教育に関連する重要なテーマを初年次教育学会理事会が設定し、それに合った担当者を理事会から依頼して成立するセッションです。個人ワークやグループ・ディスカッション、グループ別プレゼンテーションなどの活動から構成されるこのセッションへの参加によって、参加者の初年次教育に対する知識や実践的スキルを向上させることを目的としています。言い換えれば、各テーマに対する初学者を主たる対象としていますので、自らの「知識・スキルの向上」を期待したいテーマのワークショップを選ぶことをお勧めします。

## 2. ラウンドテーブル（120 分）

ワークショップとは異なり、会員が企画するセッションです。申込者が設定したテーマについてまず自ら話題を提供した後、参加者全員が円卓（ラウンドテーブル）を囲み、報告者とオーディエンスといった区別なく、テーマに沿って自由に意見を交換する場であり、このセッションを通じて参加者間の相互作用によって有意義な結論を導き出そうとするものです。

## 自由研究発表（オンデマンド）

9月11日（土）10:00 ～ 9月17日（金）15:00

| 学士課程教育（座長：藤本元啓） |              |                                                                 |
|-----------------|--------------|-----------------------------------------------------------------|
| 登壇者             | 所属           | 発表題目                                                            |
| 高松邦彦            | 神戸常盤大学       | 初年次教育科目が大学内の人的ネットワークに与える影響                                      |
| 稲垣太一            | 学校法人<br>金城学院 | 大学生の学習行動の変容プロセス<br>—大学初年次のリアリティショックに注目して—                       |
| 伊東幸子            | 東京工業大学       | コロナ禍の学士課程1年生と学生支援<br>—オンラインでかなわないことは何か？—                        |
| 野崎雅子            | 東京工業大学       | コロナ禍における学士課程新入生ガイダンスの対応と役割<br>—東京工業大学2021年度学士課程新入生ガイダンスの取り組みから— |
| 京極重智            | 神戸常盤大学       | コロナ禍における初年次教育と入学前教育の現状について                                      |

| 学習意欲・動機／学習成果・効果測定（座長：藤田哲也） |                       |                                                                 |
|----------------------------|-----------------------|-----------------------------------------------------------------|
| 登壇者                        | 所属                    | 発表題目                                                            |
| 川崎弘也                       | 株式会社<br>ラーニング<br>バリュー | 初年次生の学びのモチベーションをオンラインプログラムで喚起する<br>—オンラインチームビルディングプログラムの実践と成果—  |
| 本田直也                       | 大手前大学                 | オンライン新入生オリエンテーションの実施と初年次教育への影響<br>—ビデオ会議によるオンラインチームビルディング研修の実践— |
| 梶原健二                       | 福岡女子<br>短期大学          | 遠隔授業における学習意欲の課題<br>—初年次および2年次学生へのアンケート調査を手がかりに—                 |
| 鈴江秀一朗                      | 大阪青山大学                | 学生が主体的に参加する学修支援を目指して<br>—SAの活動を中心において—                          |
| 藤本元啓                       | 崇城大学                  | コロナ禍以前と渦中における初年次教育科目「SOJO基礎」の学修成績と到達度について                       |
| 久司一葉                       | 金沢医科大学                | 看護学生の初年次教育の成果<br>—アカデミック・スキルズ授業後レポートの分析より—                      |

| ジェネリックスキル／授業デザイン（座長：藤波 潔） |             |                                                                        |
|---------------------------|-------------|------------------------------------------------------------------------|
| 登壇者                       | 所属          | 発表題目                                                                   |
| 野間川内一樹                    | 岡山理科大学      | ジェネリックスキルの習得を目指した初年次教育の新たな実践―岡山理科大学「こころ豊かに生きる科目」の導入事例から―               |
| 高橋佳史                      | 法政大学<br>大学院 | 大学一年生における「わかったつもり」の心理学的検討 II<br>―レポートの作成時間と得点の予測の正確さは成績によって異なるか?―      |
| 福井英次郎                     | 明海大学        | コロナ禍における1年ゼミの対応と評価<br>―科目責任者の立場より―                                     |
| 寺島哲平                      | 常磐大学        | オンライン授業で培ったノウハウを用いた対面授業についての実践報告<br>― 一年生向け統計学の授業を題材に―                 |
| 笹金光徳                      | 高千穂大学       | 全学必修初年次科目「基礎コンピュータⅠ/Ⅱ」におけるコロナ禍の対応について<br>―知識・理解の確認としての全クラス共通試験の実施を中心に― |
| 佐藤枝里                      | 中部大学        | 学生相談室相談員によるアフターコロナの適応支援教育                                              |

| 協同学習・グループワーク（座長：清水栄子） |        |                                                            |
|-----------------------|--------|------------------------------------------------------------|
| 登壇者                   | 所属     | 発表題目                                                       |
| 中林律子                  | 愛知淑徳大学 | 「読み合う」ことで文章はどう変化するか<br>―非対面式ピア・レスポンスの試みから―                 |
| 和田重雄                  | 日本薬科大学 | 大学の第3の使命「社会貢献」を実感できる初年次教育<br>―地域連携商品開発グループワークの実践―          |
| 仙石昌也                  | 愛知医科大学 | リビジョンマップによる協働レポートの作成プロセスの検討<br>―フリーライダーのいるレポートに着目して―       |
| 関 智子                  | 玉川大学   | 短時間交流活動の普及（実践報告）<br>―知識・経験がなくてもできる，心理的に安全な場づくり―            |
| 吉村充功                  | 日本文理大学 | 大学間連携による地域課題解決型授業プログラムの構築と実践<br>―初年次協働開発科目「大分の地域ブランド創造体験」― |

| 文章表現／高大接続／キャリア教育（座長：西村秀雄） |                 |                                                                         |
|---------------------------|-----------------|-------------------------------------------------------------------------|
| 登壇者                       | 所属              | 発表題目                                                                    |
| 東寺祐亮                      | 日本文理大学          | 文章表現基礎講座のオンライン授業の実践                                                     |
| 近藤裕子                      | 山梨学院大学          | 初年次文章表現教育における意見文作成指導に関する一考察<br>—テーマ設定と論展開の関わりについて—                      |
| 九内悠水子                     | 比治山大学           | 主体性・多様性・協働性を有した学生育成のための高大接続プログラム開発 —カリフォルニア州立大学サンマルコス校との連携を通じたコロナ禍での試み— |
| 木原宏子                      | 立命館大学           | 学力補完型から目標設定型へシフトした入学前教育の効果<br>—文化芸術・スポーツ特別選抜入試合格者を対象として—                |
| 伊藤圭一                      | 豊橋創造大学<br>短期大学部 | 学内における統一的な公務員指導について<br>—全学に向けての公務員受験指導—                                 |

## 発 表 要 旨

|          |                          |      |
|----------|--------------------------|------|
| ワークショップ  | ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | p.25 |
| ラウンドテーブル | ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | p.28 |

### 自由研究発表

|                   |                          |      |
|-------------------|--------------------------|------|
| 学士課程教育            | ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | p.36 |
| 学習意欲・動機／学習成果・効果測定 | ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | p.46 |
| ジェネリックスキル／授業デザイン  | ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | p.58 |
| 協同学習・グループワーク      | ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | p.70 |
| 文章表現／高大接続／キャリア教育  | ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | p.80 |

## ワークショップ (WS1-1～WS1-3)

|       |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
|-------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| WS1-1 | コロナ禍での初年次教育を振り返り、これからの初年次教育をリデザインする                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
| 担当者   | 山田剛史（関西大学）                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
| 概要    | <p>初年次教育がほぼ全ての大学で取り組まれる教育プログラムとなってそれなりの年数が経っている。この間、高大接続改革が進み、入学者の学習履歴にも変化が生じている。SSH や SGH の指定を受けた学校の生徒以外にも、新学習指導要領において「主体的・対話的で深い学び」(≒AL)や「総合的な探究の時間」の実現が目指される中で、多くの生徒(大学入学者)が日常的に AL や中長期的な探究活動を経験している。このことは大学の初年次教育を見直す大きな変化の 1 つである。今ひとつの大きな変化は此度のコロナ禍である。コロナ禍において、緊急対応型遠隔授業が一斉導入され、全ての教員がリアルタイム型やオンデマンド型など多種多様な遠隔授業を経験し、その効果や可能性について考えさせられることとなった。同時に、特に初年次学生の孤独感やうつ症状などメンタルヘルスの問題も浮上し、新たな学生支援・学習支援の展開や対面授業の価値の再認識にも繋がった。</p> <p>本ワークショップでは、こうした状況に関する施策やデータも参照しつつ、それぞれの所属大学での初年次教育を振り返る。そして、初年次教育の文脈や特徴(実施規模や導入タイプなど)も踏まえつつ、これからの初年次教育のリデザインを試みる。</p> |
| キーワード | 高大接続、新学習指導要領、コロナ禍の遠隔授業、初年次教育のリデザイン                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |

|       |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
|-------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| WS1-2 | 初年次教育×オンライン×キャンパス                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
| 担当者   | 田中 岳（岡山大学）・立石慎治（筑波大学）・宮浦 崇（九州工業大学）                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
| 概要    | <p>コロナ禍の影響を受けた 2020 年以降、大学等の様相は一変しました。授業、入試、正課外活動など、地域による差はあったものの、オンラインを中心としたリモート化や、延期、代替措置など、対応に苦慮した各機関の状況は今も続いています。しかしながら、そうした困難によって、これまでにない高等教育へと前向きな変化が進んだというコメントも耳にします。</p> <p>本ワークショップでは、2020 年を振り返り、それらを踏まえて、これからの初年次教育について参加者の皆さんと考えてみたいと思います。「ハビトゥスによってすっかりコロナ禍以前に舞い戻る」「否、DX はじめ進歩的な未来へと進む」といった紋切り型でもなく、2020 年度に初年次だった学生のことを思いながら、この時期だからこそ考えられる初年次教育の先行きについて知恵を出し合ひましょう。</p> <p>当日は、デボノ博士の 6 色ハット発想法を用いながら、思考を拡大する機会づくりをオンライン上で工夫する予定です。</p> <p>〔目標〕ワークショップ終了後には、参加の皆さんが、それぞれ課題解決への道筋を自身の言葉で語ることができるようになる。〔役割〕担当者は参加者間の相互作用を活性化する進行に努めますので、御参加の皆さんには主体的な活動をお願いいたします。〔過程〕ミニレクチャーとダイアログという対話方法を織り交ぜながら、各参加者が省察する場を設け、最後に参加者全員での共有までを計画しています。</p> |
| キーワード | コロナ禍、オンライン、キャンパス、ハビトゥス、DX                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |

|       |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
|-------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| WS1-3 | オンライン授業で活用できる「演劇的手法」                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
| 担当者   | 蓮 行（京都大学大学院）                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |
| 概要    | <p>演劇は、複数分野の芸術の混交により創造される総合芸術であり、「場と情報と身体<br/>の芸術」と言うこともできる。そのエッセンスは、身体表現を伴うワークや、ロールプレイ、短時間<br/>の演劇創作等の形で学習環境に導入することができる。演劇的手法を授業に取り入れる<br/>ことで、学習者の活動性を高めるだけでなく、属性や専門性の異なる学習者同士がそ<br/>れらの差異を超えていかに集合知をつくるか、という合意形成のプロセスを学習者に体験<br/>させることができる。そのプロセスは、社会活動の縮図でもある。</p> <p>ただし、このような演劇的手法をオンライン授業で実現することは可能なのだろうか？</p> <p>企画者は 10 数年に渡り大学における演劇的手法を実践してきた経験をもつが、2020<br/>年までは「オンライン環境」に演劇的手法を持ち込んだことはなかった。COVID-19 を受け<br/>た授業環境の変化に伴い、この 2 年間で毎回の授業で実験しながらオンライン転換に取り<br/>組み、Zoom, Google Meets, Microsoft Teams での授業実施を経験した。</p> <p>この 2 年間の経験を経て、オンラインだけではやはり限界もあると実感する一方で、オン<br/>ラインでも有効に機能する部分はあること、また、オンラインならではのコミュニケーション<br/>の特徴も存在することがわかってきた。</p> <p>このワークショップ企画では、企画者がこの 2 年間で進めてきたオンライン授業を、実際<br/>に皆さんに体験していただく。企画者が実践を通じて考えてきた内容をお伝えするととも<br/>に、みなさん自身が「オンライン授業に演劇的手法を導入すること」にどのような価値を見<br/>出すか、実際にどのような初年次教育に応用できるか等について全体でディスカッション<br/>し、新たな集合知を生成したい。</p> |
| キーワード | 演劇的手法, ロールプレイ, オンライン授業, 表現活動                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |

## ワークショップ（WS2-1～WS2-3）

|       |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
|-------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| WS2-1 | コロナ禍での初年次教育を振り返り、これからの初年次教育をリデザインする                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
| 担当者   | 山田剛史（関西大学）                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
| 概要    | <p>初年次教育がほぼ全ての大学で取り組まれる教育プログラムとなってそれなりの年数が<br/>経っている。この間、高大接続改革が進み、入学者の学習履歴にも変化が生じている。<br/>SSH や SGH の指定を受けた学校の生徒以外にも、新学習指導要領において「主体的・<br/>対話的で深い学び」(≒AL)や「総合的な探究の時間」の実現が目指される中で、多くの<br/>生徒(大学入学者)が日常的に AL や中長期的な探究活動を経験している。このことは大<br/>学の初年次教育を見直す大きな変化の 1 つである。今ひとつの大きな変化は此度のコロ<br/>ナ禍である。コロナ禍において、緊急対応型遠隔授業が一斉導入され、全ての教員がリ<br/>アルタイム型やオンデマンド型など多種多様な遠隔授業を経験し、その効果や可能性に<br/>ついて考えさせられることとなった。同時に、特に初年次学生の孤独感やうつ症状などメ<br/>ンタルヘルスの問題も浮上し、新たな学生支援・学習支援の展開や対面授業の価値の再<br/>認識にも繋がった。</p> <p>本ワークショップでは、こうした状況に関する施策やデータも参照しつつ、それぞれの所<br/>属大学での初年次教育を振り返る。そして、初年次教育の文脈や特徴(実施規模や導入<br/>タイプなど)も踏まえつつ、これからの初年次教育のリデザインを試みる。</p> |
| キーワード | 高大接続, 新学習指導要領, コロナ禍の遠隔授業, 初年次教育のリデザイン                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |

|       |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
|-------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| WS2-2 | 2030 年の初年次教育を構想するー初年次教育のパラダイム転換を目指してー                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
| 担当者   | 成田秀夫（大正大学）・山本啓一（北陸大学）・吉村充功（日本文理大学）・菊地滋夫（明星大学）・垣花渉（石川県立看護大学）                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
| 概要    | <p>未だコロナ禍は収束を迎えていないが、アフター・コロナを見すえつつ、Society5.0 時代に向けて大学教育の転換が迫られている。その影響は、初年次教育にも及んでいる。令和 2 年 1 月 22 日に公表された「教学マネジメント指針」を踏まえると、今後の初年次教育については、大学のカリキュラム全体と有機的に連動して再構築することが求められている。今回のワークショップでは、初年次教育をめぐる 5 つのテーマについて企画者が概説し、参加者がワールドカフェの要領で 2 つのテーマについて意見交換した後、全体で 2030 年の初年次教育について討議する。テーマと担当者は次に示した通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. アフター・コロナと Society5.0(菊地滋夫)</li> <li>2. 自律的学修者と学生中心の授業(垣花渉)</li> <li>3. 初年次から始まる地域連携・社会接続(吉村充功)</li> <li>4. 初年次教育・教養教育・キャリア教育の統合(成田秀夫)</li> <li>5. カリキュラム・マネジメント(山本啓一)</li> </ol> <p>尚、当日は Jamboard を用いて意見交換するため、事前に Google アカウントを取得してください。また、定員を 50 名としますので、大会運営委員会から送られる「事前登録アンケート」にて登録をお願いします。定員になり次第締め切ります(先着順)。</p> |
| キーワード | 教学マネジメント，学修者中心，授業設計，地域連携，統合型教養教育，アフター・コロナ                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |

|       |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
|-------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| WS2-3 | LTD 話し合い学習法ー基礎と応用ー                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
| 担当者   | 安永 悟（久留米大学）                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
| 概要    | <p>本ワークショップの目的は LTD を理解し、その可能性を知ることである。ワークショップの構成は次の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 協同学習の基礎基本 (1)自己紹介 (2)基本技法 (3)協同の精神</li> <li>2. LTD 話し合い学習法 (1)LTD の概要(2)LTD 過程プラン</li> <li>3. LTD 授業モデル (1)モデル図 (2)学習効果 (3)実践例</li> </ol> <p>本ワークショップでは協同学習の技法を用いて展開するので、まず4・5 人グループを編成する。協同学習の技法である「ラウンドロビン」を用いた自己紹介を手がかりに、協同学習の基礎基本を確認する。そのうえで「ジグソー学習法」を用いて LTD 過程プランに参加者同士で学ぶ。最後に、LTD 授業モデルを紹介し、LTD を活用した授業づくりについて検討し、本モデルに沿った実践例を紹介する。</p> <p>本ワークショップを通して、参加者の授業実践力の向上を期待している。</p> <p>なお、本ワークショップは安永(2019)「授業を活性化する LTD」(医学書院)の内容に準拠している。</p> |
| キーワード | LTD 話し合い学習法，LTD 授業モデル，協同学習                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |



## コロナ禍におけるオンライン初年次教育の試みと失敗、そしてその再構築

【企画者】藤本元啓 (崇城大学)

【司会者】西村秀雄 (金沢工業大学)

【話題提供者】藤本元啓 (崇城大学)

垣花渉 (石川県立看護大学)

大嶋康裕 (崇城大学)

### 1. 話題提供① 藤本元啓「総論」

コロナ禍における初年次教育の手法や成果について、事例報告会、シンポジウム、学会誌において報告をおこなった。その主たる関心は、①メンタルヘルスを中心とした支援と②有効な授業形態とにあり、初年次学生と大学とをつなぐ工夫が凝らされた有益な修学生活支援と授業形態であった。

一方で、多くの制約のなかで初年次学生に向き合うことができなかった事例を検証し、共有することも肝要である。上記①については、学生の状況把握の問題がある。前学期に学生調査をおこなわなかった大学では、学生とくに新生が生活や授業についてどのような不安や不満をもっているか把握できず、後学期に生かす機会を逸した。感染拡大は直に収まるであろう、という甘い見通しと危機に即応できない組織体質がもたらした結果でもある。慌てて後期あるいはその終了間際で実施した大学もあるが、それは遠隔授業に慣れてきた時期のデータであり、学生の緊迫感が異なったものであることは否めない。

上記②については、遠隔授業の問題がある。オンライン授業はオンタイム、オンデマンド、ブレンド、ハイフレックスなどの方法がとられ、なかには授業資料を郵送して使用する大学もあった。それぞれ一長一短はあるが、大学と学生双方の通信環境の不備や ICT 操作活用の不慣れによって、授業中の疑問を即座に学生同士で教え合うことや教員に質問でき

ないことも多かった。とくに演習、実技、実験においては、授業の理解が進まなかった要因のひとつに挙げられ、報告者担当クラスの初年次教育科目に限っていえば、対面授業との教育効果の差異を痛感させられた。

早い段階から学生の目線で情報の提供と物心両面からの支援ができた大学もあれば、それらが遅れしかも小出しとなった大学もあった。「面倒見のよい大学」を標榜する大学は多いが、学生や保護者、そして受験生はどのように判断するであろうか。コロナ禍への対応によっては、大学の新たな二極化が進むように思えてならない。

そこで本ラウンドテーブルでは、初年次学生に対する大学の支援、対面授業と遜色のない学修成果を得ようとした教育手法などで、思うような成果が上がりなかったこと、失敗した事例の紹介を企画した。参加者の勤務先での事例も披露いただいたうえで原因の共有に努め、それらの経験が今年度に生かされているのかどうか、本音で語り合いたい。

### 2. 話題提供② 垣花渉「実技科目における遠隔授業の適合および限界」

著者は、看護学部 1・2 年生対象の教養科目を担当している。授業では体験を重視し、健康な生活のあり方を考えるための基礎となる運動・栄養・休養と健康との関連性を学ぶ。体験を重視する理由は、将来看護職者となる学生を、健康の維持・増進を「知る」「わかる」レ

ラウンドテーブル (RT1-1)

ベルから、「実践できる」レベルへ到達させた  
いからである。

著者の実技科目では、これまで学生同士が  
ボールまたはラケットを使うゲームの体験を  
とおして、スポーツに親しんできた。教室には  
学生の笑顔や会話が絶えず、主体的な行動が  
あふれていた。ところが、2020 年 4 月、新型コ  
ロナウィルスの感染拡大に伴い、このような  
実技の対面授業は現在 (2021 年 5 月) までは  
ほぼ不可能となっている。学生同士が「体験」  
という「座学」と異なる環境に身を置き、肉体  
と感情を使って自己の喜びや楽しさを表現し、  
そのなかで新しい自己を発見するという実技  
科目の魅力が置き去りにされようとしている。  
このような危機を乗り越え、新しい実技科目  
の授業のあり方を模索する試行錯誤の過程  
を、PDCA サイクルよりふり返ってみたい。

#### (1) Plan (計画)

教師と学生が授業に関する情報 (言語・非  
言語) を共有する双方向の授業を、遠隔でも実  
現したいと考えた。

スポーツの実技科目を遠隔で展開する手段  
として、①ビデオ会議システム (Zoom など)  
によるライブ型、②ビデオ撮影・編集を介する  
オンデマンド型、③YouTube による動画配信  
がある。それぞれ一長一短であるが、物理的に  
離れ離れであっても、互いの顔が見えるとい  
う一体感を演出するため、ライブ型を採用し  
た。教室に PC、ビデオカメラ、マイク、キャプ  
チャーデバイス (カメラの HDMI 出力を PC へ  
取り込む)、プロジェクターを取り付けたスタ  
ジオをつくった (図 1)。

Zoom のプライベート使用には時間制限が  
あり、授業時間 (90 分) を確保できなかった。  
そのために、学生へ 2 つの課題を課した。一つ  
は、授業外の日常生活でも運動する機会を持  
つとともに、その実践を記録し提出すること  
であった。もう一つは、授業のふり返り (感想  
や意見、または授業の問いへの回答) の提出を  
Google form より求めた。受講学生全員のふ

り返りを、それに対する教師のコメントを記  
したうえで、授業用の web ページへ公開した。



図 1. ライブ型の実技の授業を行う著者

#### (2) Do (実行)

実技の映像を学生へライブで配信すること  
により、教師と学生があたかも同じ空間にい  
るかのような環境を準備できた。しかし、こ  
のような環境を活かし、教師と学生が授業に関  
する情報を共有する双方向の授業を実現でき  
なかった。

教師が体操または体力トレーニングの見本  
を示し、動作の注意点を伝え、動作のやり方を  
比喩をまじえて表現する傍ら、ビデオカメラ  
の高さや視野を調整するカメラワークを兼ね  
ることは難しかった。そのために、教師が実技  
の指導に集中した時、実技の被写体がビデオ  
の映像から外れること、学生が出すチャット  
の意見に気づけないことが頻発し、授業を円  
滑に行うことはできなかった。学生はカメラ  
をオフにして授業へ参加するために、お互い  
の距離が見えなくなり、“一体感”の演出には  
ほど遠かった。併せて、学生の動作フォームを  
見るができず、正しく行えているのかフィ  
ードバックを与えることもできなかった。

#### (3) Check (結果検証)

今回の即興授業は、著者の力量と準備の不  
足が招いた“実技ごっこ”でしかなかったこ  
とは否めない。一方、今回明らかになった技術  
的な問題は比較的早期に解決されるものと思  
えられる。それでもなお、著者が実技科目を遠  
隔で行う適応および限界を感じる理由は、学  
生の発したふり返り (対面と遠隔の授業比較)  
にある。

「言葉のアドバイスにわかりやすい映像が加わると、理解しやすい」「遠隔は短時間の授業だから集中できた」という感想は、学生が見本の実技をまねる時、教師は実技の“見せ方”や時間配分に配慮すべきであることを暗示している。一方、「映像より、対面の方がまねしやすい」「画面越しより、対面の方が仲間との一体感がある」「一人でやるより、仲間と一緒にの方が楽しい」という意見は、講義科目と異なり、実技科目では教師と学生は実際に同じ空間にいることが望ましいことを示唆している。

実技をまねる時、我々は視覚の 3 次元情報を頭のなかで再構築し、あるいはまわりのうまい仲間が発するアドバイスやしぐさを吸収し、自己を相対化して動きを表出する。学生は、見本を Watch (注視) し、身体を使って教師や仲間と対話し、喜びや楽しさを表現する。肉体と感情をとおした「できる」という感覚や感動が、仲間との一体感を生み、学ぶ意欲をつくりだす。互いの顔が見えないために授業に関する情報 (言語・非言語) を共有できず一人孤独にパフォーマンスを試行錯誤することが、果たして実技の授業と言えるのだろうか。

#### (4) Action (対策実施)

実技科目を遠隔授業に適合させるために、実技の“見せ方”と時間配分を見直した。学生に注目してほしい身体の動きや筋肉の部位にはフォーカスを充て、配信する映像にメリハリをつけるよう TA を配置した。TA はチャットによる質問を教師が見逃さぬよう、伝達の役割も担ってくれた。実技の時間を 45 分に短縮し、10 分以内で完結する話題を複数設定するとともに、チャット機能を使って話題と話題の間に感想や質問など学生の反応を引き出すようにした。そのほか、参加者が 15 名ほどの比較的少人数のクラスへ編成を変えた。このような見直しの理由は、「対面であれ遠隔であれ、大学の授業の根本は、少人数の学生と教員が密にコミュニケーションする授業である」という考え方に基づくものである。

### 3. 話題提供③ 大嶋康裕「理数系科目での演習の代替手段の効果と限界」

著者は、理工系学部主体の勤務先大学において、1・2 年生対象の数学系科目を担当している。工学系 3 学部の初年次学生は、入学時点でのプレースメントテストにより到達度に応じて 4, 5 段階に分けられ、授業の中で講義と演習を繰り返しながら週 2 回 30 週を通して、それぞれの学生は 1 変数の微分積分から始まり多変数の微分積分及び微分方程式の初歩までを学ぶ。

学生たちに必ず伝える、大学で微分積分を学ぶ意義は、世の中のさまざまなものの変化について局所的性質及び大域的性質、状況に応じてそれぞれの立場から解析を行う視点を持つことである。履修者のその理解について、教員が図る、もしくは学生自身がそれを自覚するためによく用いられる活動が演習である。

演習は各学生が担当する問題について、黒板へ計算過程を含めて解の数値に辿り着くまでを書かせ、それを教員が講評する、という一連の流れで進める (図 2)。これを体験することで、ある学生にとっては適量な計算過程の記述であっても、別の学生には冗長と捉えることもあれば、逆に論理の飛躍を含むと感じることもある、といった差異の存在に皆が気づく。

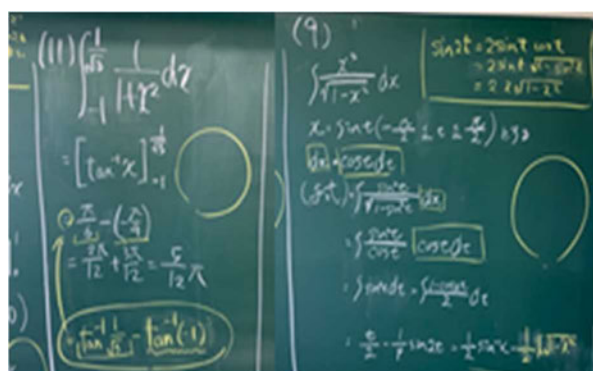


図 2. 2019 年度の演習の講評後の板書

この演習での経験があることで、大学数学の自学自習における理解の深化が図れると考え、これまでの対面授業を進めてきた。もちろん、直近でも 2019 年の香港の社会運動の

影響による複数の大学でのオンライン授業実施の動きも見ており、自身も例えば長期出張中の講義をオンラインで実施できないか、とは漠然と考えてはいたものの、上記の演習の代替手段の実現方法を具体的に考えることは無かった。

### (1) 演習の代替手段

さて、黒板での演習の代替手段が定まらないまま 2020 年度前期を迎えてしまった。勤務先大学での遠隔授業については、オンデマンド方式で実施する制約があり、同時双方向の学生間のやり取りは不可能であった。

演習問題の解答について教員対個別学生のやりとりを全履修者に対して行うことも検討したが、ここで授業が週 2 回であることによる進度の速さと扱う問題の多さにより、個別添削指導は現実的な時間内では実施できなかった。まずは、毎回の授業実施日までにコンテンツ作りを終えることを最優先にしていた。

これまでの対面授業で実施してきた演習の目的を細分化し、それぞれに応じた方法を用意することで、オンデマンド方式の遠隔授業における演習の代替手段を複数の方法の組み合わせで実現することとした (図 3)。

| 演習の目的          | 2019 年度の手段                            | 2020 年度の手段                            |
|----------------|---------------------------------------|---------------------------------------|
| 学生自身の理解度確認     | 講評とその後<br>の板書と<br>自身のノ<br>ート解答<br>の比較 | 單元ごとに基礎的な問題についてのオンラインテストの実施と自動採点結果の確認 |
| 論理の飛躍のない解答の作成  |                                       | LMS 上の教員が用意した問題解説と自身のノート解答との比較        |
| 他者との理解の差異への気づき |                                       | 過去の授業内演習の板書写真と自身のノート解答との比較            |

図 3. 遠隔授業での演習の代替手段

著者は以前から LMS 上に、自身で作成し

た問題解説や、過去数年間の全ての担当科目の板書写真を載せており、その資産も活用できた。

### (2) 代替手段の効果

2020 年度は前年度と比較して、課題としてオンラインテストが加わったことになるため、履修者が全体として多くの学習時間を費やすこととなった。結果、点数の全体的な底上げが起り、平均点の上昇に繋がった。

またオンデマンド方式のコンテンツを表示するための学生の表示端末が主にノート PC もしくはスマートフォンであることを活かし、オンライン上の数式処理システムや数学系のサービスを利用することを積極的に促した。これは特に到達度の高い学生たちに好評で、学期末の授業評価アンケートの自由記述コメントでも複数の学生が肯定的評価をしていた。

### (3) 代替手段の限界

学期を通して見てみると、課題の量が例年より多くなり、学習計画を自身で管理できない学生が課題を投げ出してしまうケースが予想よりも多く発生し、その対応に追われた。

教員の立場での課題は、課題が増えた上にオンデマンド方式で学生の学習タイミングに最大 2 週間近い差が標準的に存在したことで、進捗の全体像が週を重ねるごとに把握しにくくなり、フィードバックが遅れた点がある。

また定期試験の採点後に気づいた点として、前年度までと異なり、高得点獲得層にも答案の計算過程が整理されていない学生が多かったことや、3 割以上の学生が過去の授業内演習の板書写真を全く見ていなかった。

### (4) 次年度に向けて

演習の代替手段に全く活用されないものがあつたことを踏まえ、2021 年度の遠隔授業においては、各コンテンツの活用法や締切を丁寧に伝え、またフィードバックを適切に行える授業設計を工夫しており、発表当日にはその成果についてもご紹介できるものと考えている。

## 学びのモチベーションを集团的に喚起する

### —— 初年次教育での組織開発的アプローチ事例から ——

【企画者・司会者】 川崎弘也（株式会社ラーニングバリュー）

【話題提供者】 本田直也（大手前大学）

日置和人（神戸学院大学）

光成研一郎（神戸常盤大学）

#### 1. 企画趣旨

学生を「いかに学びへと動機づけるのか」。学習歴や入学動機が多様が高まる昨今，“学びの動機付け”が初年次教育の大きなテーマの一つとなっている。それはH30の文科省の調査<sup>1)</sup>でも明らかである。この調査によると、何らかの形で初年次教育を実施している大学は、既に721大学（97.4%）に上っており、初年次教育の具体的な内容の中では、「学問や大学教育全般に対する動機づけのためのプログラム」の実施が596校（80.5%）、「将来の職業生活や進路選択に対する動機付け・方向付けのためのプログラム」の実施は587校（79.3%）となっている。また初年次教育での“学びの動機づけ”は、その後に続く専門教育への重要な架け橋になるばかりでなく、学生の早期退学防止にも繋がると考えられる。

上記の調査結果を見てもわかる通り、多くの大学ではこの“学びの動機づけ”を主として二つの方法でとり行っているようである。すなわち一つは「学びのテーマ」での、もう一つは「将来の進路やキャリア」での動機づけである。例えば教員の研究テーマのオムニバス形式での紹介や、卒業生などの社会人講師による仕事の中身と大学での学びの関連づけ、などがその代表例といえるであろう。

しかし、ユニバーサル段階の昨今、当該大学への入学動機や当該学部での学びの動機の薄い学生が増えていることから、上記二大方法では、動機づけにくい学生が増えているの

ではないだろうか。

本ラウンドテーブルでは、組織開発（Organization Development）の考え方やチームビルディングの手法を取り入れ、新入生の初年次における学びの動機付けを実現している複数の大学の事例に着目する。

組織開発では、個人に着目する以上に個人と個人の関係性に着目して働きかけを行うことで、集団全体の活性化を図り、ひいては個々人の動機づけや成長を促すアプローチをとる。今回は、新入生に限らず、先輩学生（SA）や初年次担当教員など、さまざまな組織や集団を対象に、また対面に限らずオンラインの取り組みでも組織開発を適用した複数の大学の事例に焦点を当て、組織開発の多様な活用法について探求したい。参加者の皆さんと共に考える場となれば幸いである。

#### 2. 大手前大学

大手前大学は総合文化、建築&芸術、現代社会の文系3学部と、国家資格を目指す健康栄養、国際看護の2学部から構成される総合大学である。本学は2000年代前半より、初年次ゼミの開講や入学直後の新入生オリエンテーション期間に合宿型の研修を実施するなど、新入生に対する大学適応の取り組みをいち早く行ってきた。本学は2000年代後半から学部横断的な学びの構造を取り入れ、初年次ゼミクラスが異なる専門コースを志望する学生の混成となった。学生ごとに異なる興味に対し

## ラウンドテーブル (RT2-1)

て、共通する「学びのテーマ」による動機付けが難しくなってきたことから、本学では2010 年頃から組織開発やチームビルディングに基づく研修プログラムを約 10 年間実施してきた。

1 クラス 25 人程度の初年次ゼミクラス単位で組織開発研修プログラムを実施してきた。実技・実習などの研修授業のためにスケジュールが合わない国際看護学部を除いて、全学部、全クラスを対象に4月入学直後のオリエンテーション期間に本チームビルディングプログラムを実施している。実施規模は毎年入学してくる1年生約750人を対象に、約30クラスに対して、2班体制で15クラス×2回の大規模研修を実施している。本プログラムのねらいは、①自己理解を深め、②他者の自己理解に協力しながら、③チームビルディングの体験を行うこと、と定めている。研修の過程で、大学での学びの期待感を高める、必修初年次ゼミのクラスに馴染む、知り合いが少ない中での仲間作りが進む、といったことも期待している。

グループ単位でのコミュニケーションを中心とした研修プログラムであるため、2010年度より10年間にわたって教室内で対面方式にて実施してきた。2020年度より対面でのコミュニケーション演習ができない状況となり、2020年度は全学750人規模での入学時研修は中止となり、10年間の本取り組みは一時途切れることとなった。対面授業が十分に実施できず、自宅からのオンライン学習が中心である状況においては、仲間と共に学び合う関係性構築がモチベーションの維持には不可欠であると判断し、4クラス100人規模のオンラインチームビルディング研修を試行的に実施した。取り組みの概要は初年次教育学会第13回大会発表要旨集に掲載の通りである。

オンラインでチームビルディング研修が可能であることや、対面方式と比べても遜色のないコミュニケーションの活発さや、自己理

解度、相互理解度、関係性の構築度や総合的な充実感や満足度が得られていることが確かめられたため、翌年の2021年度は再び750人30クラス規模での新入生研修をオンラインで実施することに至った。

15クラス×2回を一斉に実施するためには、研修進行役のファシリテーターや、それを支えるアシスタントが40人規模で必要であり、本学では例年、上級生たちを育成し、その任務に割り当てている。オンライン研修もオンラインツールも不慣れな上級生を招集し、対面型でオンライン研修を進行するハイブリッド型のファシリテーター養成研修を2021年度に開催した。オンラインツールの適切な活用は上級生ファシリテーターのチームビルディングをより深める効果があり、例年以上の強い繋がりを構築することができた。そのことが2021年度の新入生向けオンライン型チームビルディング研修に良い影響を与えることに至った。アンケートデータなどから、対面方式で行ってきた例年の結果通りか、あるいは例年以上の研修成果が確かめられた。それらの実践と成果を本ラウンドテーブルにて報告する。

## 3. 神戸学院大学

神戸学院大学は10学部・8研究科を配置し、学生数1万1000人あまりを擁する私立総合大学である。医療・保健・福祉系学部では専門職としての将来への意欲を高め、志の高い人材を輩出するための学部横断的な取組みの一つとして1～3年次生を中心とした専門職連携教育（IPE）関連科目「多職種連携実践A～D（1年次生はAのみ）」を開講しており、自らが目指す職種の役割を学ぶだけでなく、チームとして保健医療福祉分野での連携を深めるプログラムを実施している。しかしながら関連学部のごく一部の学生しか受け入れることができず、初めから意識をもった学生が参加しているのが現状である。



## ラウンドテーブル (RT2-1)

話題提供者の所属する薬学部では、医療系学部の導入教育として実施される早期体験学習において、病院や薬局を中心とした現場体験も行われているが、見学的要素が高く、2年後には全く覚えていないという学生も少なくない。薬学部への進学を自身の強い意志で決める学生が減少していることも理由の一つではあろうが、薬剤師国家試験の受験資格が6年制学部の卒業を要することにも起因していると個人的には考えている。6年制が施行されてから久しいが、当初の雰囲気とは異なり、この修業年限を与えられた猶予期間のように考えている学生が多い様に感じられる。つまり、6年を要する内容を6年までに何とかすればよいと安易に考えているのである。確かに二十歳前後の学生にとって6年は長いと思うかもしれないが、ほとんどの6年次生は、「あっという間（1.5～2倍以上の速さ）に過ぎた」と口を揃える。このことを我々教員は1年次生に口酸っぱく繰り返しているが、実感を伴わないこともあり納得してもらえないのが歯痒い。教員に対する信頼度が低いとも考えられるが、一方で学生間においては我々が疑うような内容でも真しやかに伝搬し、それを素直に受け入れる学生が多く見受けられる。

本学薬学部では2018年度より、チームビルディングを活用した“自己の探求”プログラムを採用し、入学式直前に実施している。導入のきっかけは留年傾向の高い「友人の少ない（≒相談相手が少ない）学生」に対し友人関係構築を支援して、同輩間での情報交換を促すことで留年や退学を抑制するためである。これと共に薬学教育推進部門を新たに設置し、初年次からの担任制の導入ならびによろず相談室を設け、手厚い援助を行いながらこの3年間を見守ってきた。残念ながら2020年度は4月初めに予定していたチームビルディングプログラムを実施できず、授業もオンラインで行われたため、学生間の交流ができ

ないと頭を悩ませていたが、9月になってようやくオンラインでのプログラム実施を行うことができた。大学に来ることさえできない抑圧された環境では、ほとんどの学生は同輩との交流を強く望んでいたことがアンケート結果からも明らかであった。すべてを自身で判断しなければならない状況が続いたため、他者の同意を求め安心を得たいのだろうと思われる。また、この学年では入学前からSNSを通じた複数の小グループ（5～6名×4程度）が形成されていたらしく、これらを先導した有志らにより前期期間中に15～30人規模のオンライン懇談会が行われていたことを後に知った。チームビルディングはグループワークが中心のため、円滑な進行のためにもリーダーの誕生が望まれる。このリーダー役としても、その有志らは活躍してくれ、さらには対面にて実施することができた2021年度のチームビルディングにおいてもStudent Assistant (SA)として大活躍した。20年度までの薬学教育推進部門の活動としては、取り残されそうな学生のケアを中心としてきたが、引っ張ってくれる側の学生の教育も重要であり、効果も高いことを21年度のアンケート結果から再認識できた。今回のラウンドテーブルではそのSAの育成についてご意見を賜われるよう話題提供したい。

## 4. 神戸常盤大学

神戸常盤大学は、保健医療と教育を担う対人援助職である専門職業人を育成する学部・学科で構成されている。どの学科でも自律的に思考し、判断し、表現できることはもちろん、「チーム」として協調的に働くことが求められる人材育成を目指している。医療検査学科、看護学科、診療放射線学科、口腔保健学科においては「チーム医療」、こども教育学科においては「チーム学校」という概念がその重要性を示唆している。

それゆえ本学では、初年次教育として、学

## ラウンドテーブル (RT2-1)

科混合でチームとして取り組む科目を用意している。①チームとして協働し、そして「学ぶ喜び、知る愉しさ」を実感できる科目、②受動的な教育から能動的な学びへの転換を図ることができる科目③学びの型を修得することができる科目として、全学科共通初年次教育科目「まなぶる▶ときわびとⅠ」と「まなぶる▶ときわびとⅡ」を開講するに至った。

「まなぶる▶ときわびとⅠ」では、自律、協働できる能力、具体的には協調性・協働力、論理的思考力、表現力、省察力、継続力などの汎用的能力を育成することを授業目標とした。授業の内容・方法としては、学生が「思考する」能動的経験学習を主体とし、TBL (Team Based Learning) 型授業を実施している。「活動あって学びなし」にならないための工夫として、リフレクション(省察、振り返り)を重要視している。①個人としてのリフレクションと②チームとしての分かち合いの2パターンを授業ごとに実施している。評価方法もルーブリック評価やポートフォリオ評価を活用し、教員間で評価にばらつきが出ないように工夫している。

「まなぶる▶ときわびとⅠ」において、30名の教員が、5学科約420名の学生を担当している。教員1名につき、5名×3グループ計15名の学生を担当することになる。専門も教育歴も異なる教員が担当しているので、毎回授業開始前と開始後に約30分(計1時間)ほどの打ち合わせも実施している。教育方法や教育内容の共有はラーニング・マネジメント・システム(LMS)であるmanabaを活用している。自分の専門外の基盤教育の授業を担当することは、教員の負担になるのは当然である。そこで本学では、この授業を担当することで教員側のモチベーションアップにつながる方法を考えて。まずは教育方法、ファシリテーション能力の向上である。多くの教員は授業が上手になりたいと考えている。専門の異なる2名の教員がペアとなり、授業

をすすめるので互いの先生の授業の工夫を身近に感じることができる。本学は実務家教員も多いので、教育方法をしっかりと学んでいない教員も多い。この授業を経験することで、教育方法や多様な授業評価方法も学ぶことができる。これ以上ない教員のFD活動といえる。

数年前より、他大学と同様に本学でも入学前教育と初年次教育の接続が課題とされていた。そこで昨年度より、入学前教育と初年次教育の接続を可能とすべく「オンラインワークショップ」の取り組みを始めた。一昨年は、それまで入学前教育として実施していた対面式のワークショップをコロナ感染症の影響で実施することができなかった。そのため昨年度はオンライン形式で入学前ワークショップを実施することとした。このワークの目的は入学予定者の学びへのモチベーションアップである。こども教育学科を除くすべての学科は、国家試験受験が控えているため基礎学力向上をねらいとした課題も課している。しかしながら入学後基礎テストの結果から本学早期入学決定者は、基礎学力が低い傾向にあることが明らかとなっている。基礎学力に自信のない早期入学決定学生が、そのような課題に前向きに取り組むとは思えず、基礎学力向上を目的とした入学前課題の効果は疑問視されている。それゆえ先輩(スチューデントアシスタントSA)主導の取り組み、ワークショップを計画した。副次的な効果としてSAの成長も感じることもできた。

今回は、全学科共通初年次教育科目「まなぶる▶ときわびとⅠ」の取り組みと入学前オンラインワークショップの取り組みを通して、新入生・上級生(SA)・教員のモチベーションアップについて、話題提供させていただければと考えている。

【参考文献】 1) 大学における教育内容等の改革状況について(平成30年度・文部科学省)



## 初年次教育科目が大学内の人的ネットワークに与える影響

○高松邦彦（神戸常盤大学）・光成研一郎（神戸常盤大学）・川崎弘也（ラーニングバリュー）

### 1. 緒言

神戸常盤大学では、2015 年度から 2016 年度にかけて、第 1 次上田大学改革を行い、2017 年度より新カリキュラムをスタートさせた[1]。その中で、全学科共通科目の基盤教育科目を設置し[1]、さらに、初年次教育を基盤教育科目の中に設置した[2]。

設置した初年次教育科目は、「まなぶる ▶ と きわびと I」（前期）（以下、「まなぶる I」）と、「まなぶる ▶ と きわびと II」（後期）（以下、「まなぶる II」）である。この 2 科目は、神戸常盤大学において、全学必修科目として設置されている。前期に行われる「まなぶる I」は、毎週金曜日、13:00～14:30 と 14:40～16:10 の 2 コマ連続で実施され、15 週（30 コマ）で設定されている。後期に行われる「まなぶる II」は、毎週水曜日、13:00～14:30 と 14:40～16:10 の 2 コマ連続で実施され、8 週（15 コマ）で設定されている。

神戸常盤大学は、医療検査学科、診療放射線学科、看護学科、こども教育学科、口腔保健学科の 5 学科で構成され、新入生の合計は 430 名前後となっている。この 5 学科 430 名の学生を、全 5 学科の学生が入るような 5～6 名からなる（6 名から構成されるチームは、1 つ学科が重複する）85 チーム前後をランダムに作成する。

教員は、2 名で 1 組を構成して 1 つの教室を担当する。1 つの教室あたり、6 つのチームを担当する。教員 1 人あたり、3 チームとな

るので、約 15 名～18 名の学生を担当することになる。

初年次教育科目「まなぶる I」と、「まなぶる II」は、基盤教育科目をもとに基盤教育科目が設計・評価を行ったという特徴をもつ[3]。

2017 年～2021 年度前期における、授業に関わった教員について、本学内の人的ネットワーク解析を行ったので報告する。

### 2. 方法

2017 年度～2021 年度の「まなぶる I」の教員ペアおよび 2017 年度～2020 年度の「まなぶる II」の教員ペアを対象としてネットワーク解析を行った。

ネットワーク解析については、Cytoscape 3.8.2 を使用した[4]。

### 3. 結果と考察

2017～2021 年度の「まなぶる I」と「まなぶる II」のペア数を表に示す。

表 各年度における教員のペア数

| 年度   | 「まなぶる I」 | 「まなぶる II」 |
|------|----------|-----------|
| 2017 | 9 組※     | 9 組       |
| 2018 | 10 組     | 9 組       |
| 2019 | 10 組     | 8 組       |
| 2020 | 14 組     | 9 組※      |
| 2021 | 15 組     |           |

※3 人教員チームが 1 組存在した

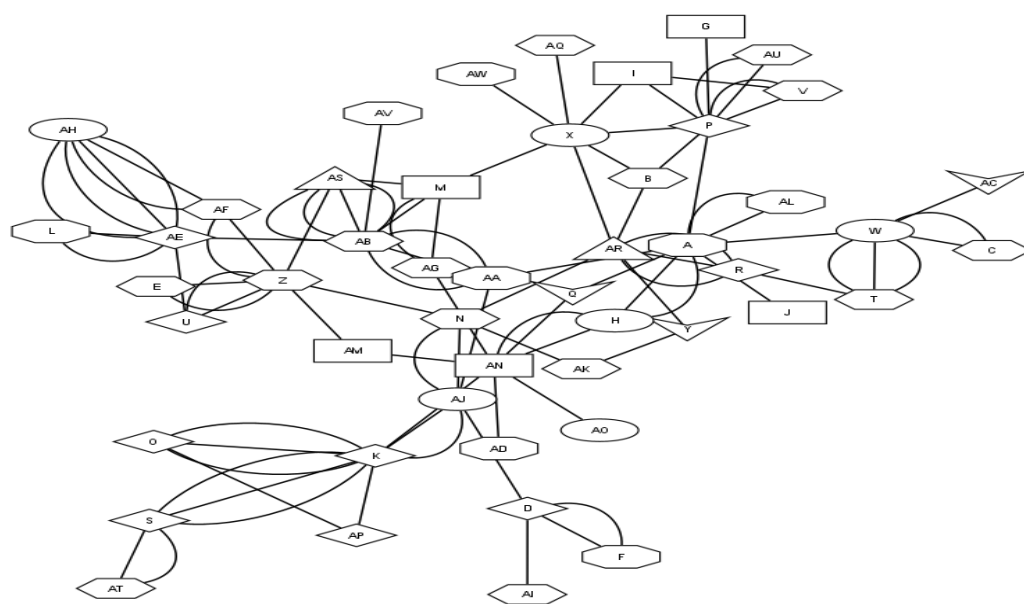


図 2017 年から 2021 年度（2021 年度は、「まなぶる II」を除く）までの「まなぶる I」と「まなぶる II」の重複を取り除いた 49 名のネットワークによる可視化

重複を除くと、49 名が関係していることが明らかとなった。本学の教員数が約 100 名程度であることを考えると、半数近くの教員が、2017 年度～2021 年度の初年次教育科目において、関係していることを明らかにした。ただし、この中には数名の非常勤教員も含まれていることを言及しておく。

次に、これらの重複を取り除いた 49 名について、「ペア」がある場合 2 項関係が存在するとして、ネットワーク解析を行った (図)。

図においては、重複を取り除いた 49 名を A ～AW によって表している。このようなネットワークは、ノード（丸）とエッジ（線）によって表現される。図においては、ノードが各教員であり、エッジがペアとなったことがあることを表している。

この場合、図の中のノードとして、6つの種類の形が存在している。各ノードの各種類は、担当者の所属学科（5つ）を示しており、また、非常勤教員も含まれるため、合計して6種類の形で区別している。

図から、所属学科に限定されることなく、初年次教育に携わる教員がネットワークを構

築していることがわかるだろう。

実際、筆者も 2017 年度から毎年兩科目に携わっている経験から、ペアとなった教員とは長い時間授業を一緒に行うためにコミュニケーションがとりやすい。

一般的には、異なる学科の教員とはそれほど親密にコンタクトをとることがないが、大学内において、これだけ大きな学科依存がない人的ネットワークを構築することは、一般的には難しい。この結果は、学内の人的ネットワークの構築に、初年次教育科目が貢献していることを示唆していると考えられる。

## 文献

- [1] 桐村豪文, 高松邦彦, 伴仲謙欣, 野田育宏, 光成研一郎, 中田康夫. 基盤教育の設計～教職協働による教学マネジメント改革の成果～. 神戸常盤大学紀要, 11, pp. 181-192, 2018.
- [2] 桐村豪文, ほか. 初年次教育科目「まなぶる▶ときわびと」で何を得たか～学生が捉える学修の〈意味〉～. 神戸常盤大学紀要, 11, pp. 193-208, 2018.
- [3] 高松邦彦, 光成研一郎, 中田康夫, 伴仲謙欣, 濱田道夫. 初年次教育科目をもとにした基盤教育科目の設計と評価. 第12回初年次教育学会発表要旨集, pp. 86-87, 2019.
- [4] P. Shannon *et al.*, “Cytoscape: A software Environment for integrated models of biomolecular interaction networks,” *Genome Res.*, vol. 13, no. 11, pp. 2498-2504, 2003.

## 大学生の学習行動の変容プロセス

### —大学初年次のリアリティショックに注目して—

○稲垣太一（学校法人金城学院）

#### 1. はじめに

現代の日本の大学生は学習意欲が高く、真面目になったと言われている（武内，2005）。その一方で、米国の学生に比べ勉強をしていないという指摘もされており（谷村・金子，2009），ここに一見矛盾した関係が見いだされる。近年、大学の教育効果は社会的な責任をますます帯びるようになった（文部科学省，2018）。大学教育に対する説明責任を果たすためにも、学生が在学中どのような学習を行い、4年間でどう変化し成長しているのかという学習行動の把握が要求されていると言える。

#### 2. 先行研究の整理

大学生の学習行動に関して、これまで多くの調査が行われてきた。例えばベネッセ教育総合研究所（2015）は、大学を卒業した人を対象に、23歳から34歳と40歳から55歳の2世代間比較を通じて、学生の変化を調査している。その結果、「学習意欲を持つ入学生の増加」、「大学での授業態度の真面目化」、「大学入学後における生活面と学習面での大学不適応の深刻化」が若い世代の学生の特徴として挙げられた。山田・葛城（2007）は大学入学後の不適応を学習面から言及し、大学生は真面目化したが無勉強熱心さゆえに大学を期待はずれだと感じ、授業に満足することができなくなっていると指摘している。この大学への期待について、半澤（2007）は“入学前に抱いていた大学における学業イメージや期待と、大学入学後に経験している学業との間の、現在におけるズレによって生じる否定的な違和感”を「学業におけるリアリティショック」

と定義した。

以上の先行研究からは現代大学生の学習行動には「真面目化」と「リアリティショック」という共通点が見いだされるが、これらは大学生の特徴を俯瞰した結果であり、学習行動の変容プロセスに関する研究事例は少ない。例えば、大西（2014）は教育系学部の学生に学業領域における不適応行動のプロセスを質的手法で調査分析を行った。その結果、「無気力と空虚感」、「選択と無頓着」、「葛藤と後悔」という3つの過程があることを明らかにし、適応・不適応行動の変容モデルを示した一方で、調査対象者の特性からリアリティショックの影響は少なかったとしている。水野（2018）は大学生活への適応について量的手法から縦断調査し、大学4年間で6つの適応プロセスがあることを明らかにした。また、「リアリティショック」という言葉こそ用いてないが、入学直後から1年生7月期に適応感が低下することや、高偏差値の学生ほど期待と現実のギャップを感じやすいことを指摘している。

これらの先行研究を整理すると、①大学生の学習行動の特徴として「真面目化」と「リアリティショック」が挙げられること、②一時点評価かつ量的な方法を用いた研究が多く、学習行動の変容プロセスにかかるディティールが十分明らかになっていないこと、③「リアリティショック」は学部等の特性によって表出しないことがあるが、高偏差値の大学生ほど入学前後のギャップを感じやすい可能性がある、ということになる。以上から本研究は、高偏差値の大学生を対象に継続的かつ質

的な方法で、大学生の学習面における変容プロセスを明らかにすることを目的とする。

### 3. 調査方法

研究対象者は 2013 年に名古屋大学の学生男女計 7 名が 1 年生であった頃に第一回目のインタビューを行った。以降、4 年生になる 2016 年度まで年に一度のペースで追跡調査を行った。年度によって実施できなかった調査対象者は、翌年に前年度分の内容を振り返ってもらい、データの補完を行った。(調査対象者の属性等詳細は発表時に提示することとする。)行動主体である学生の現実性を重視し変容プロセスの詳細を明らかにするため、半構造化面接により 1 回 1 時間前後のインタビューを実施した。分析はディティールの豊富な質的データの分析に適し、継続的比較分析によってデータに根ざした説明力の高い理論が生成されるとともに、分析手順が明確で具体的な修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(木下, 2003)を用いた。

### 4. 結果と考察

半澤(2007)や水野(2018)が指摘するように、大学 1 年次の前期でほとんどの学生が「学習面に対するリアリティショック」を感じていることがわかった。リアリティショック後の学習行動の変容にはいくつかの類型があることも示唆された。まず、授業に出なくなったり、学習意欲が低下するなど学習行動が消極化して「不真面目」になるほど、大学に「適応」していると感じやすくなることがわかった。また、周囲の「適応」に反して、授業を前の席で受講したりテスト勉強で過去問に頼らなかつたりと、「自律」した態度で学習に臨むモデルもあった。さらに、一緒に勉強する友人がいなかったため大学に「適応」もせず「自律」した学習もしない、周囲から「分離」したモデルもあった。それぞれのモデルは、その後学年が進むに連れて学習行動が変

自由研究発表：学士課程教育  
化していき、学習に対して消極的であった「適応」した学生は、徐々に積極的な学習を取るようになり、「自律」していた学生は意図的に欠席したり過去問を使用したりして「適応」していった。

以上のことから、リアリティショックを起点に「適応」、「自律」という 2 つの学習行動の特徴が、学年が進むにつれて「融和化」する変容プロセスのモデルが示唆された。

### 参考文献

- 武内清(2005)『大学とキャンパスライフ』上智大学出版
- 谷村英洋・金子元久(2009)「学習時間の日米比較」『IDE 現代の高等教育』515, 61-65
- 文部科学省中央教育審議会(2018)「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)」
- ベネッセ教育総合研究所(2015)「大学での学びと成長に関するふりかえり調査(速報版)」
- 山田浩之・葛城浩一編(2007)『現代大学生の学習行動』(高等教育研究叢書 90) 広島大学高等教育研究開発センター
- 半澤礼之(2007)「大学 1 年生における学業に対するリアリティショックとその対処—学業を重視して大学に入学した心理学先行の学生を対象とした面接調査から—」『青年心理学研究』21,31-51
- 大西恭子(2014)「大学生の学習領域における不適応プロセスの検討」『学校教育学研究論集』30, 61-72
- 水野邦夫(2018)「大学入学者の大学生活への適応プロセスの研究—入学から卒業までの変化および偏差値の影響について—」『帝塚山大学心理科学論集』1, 1-12
- 木下 康仁(2003)『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い—』弘文堂

## コロナ禍の学士課程 1 年生と学生支援

### —オンラインでかなわないことは何か?—

○伊東幸子（東京工業大学）

#### 1. コロナ禍の学士課程 1 年生と学生支援

2020 年 4 月の学士課程 1 年生は、通常の「初年次」の適応、コロナ禍による大学の激変への適応の 2 つの大きな適応を同時に求められた。筆者が勤務する大学は、2020 年 5 月日から、全面オンライン（Zoom によるリアルタイム配信）で新学期が開始することになった。学士課程 1 年生の不安・困難に対応するため、執行部主導で「新入生 welcome メール相談窓口」が設置された。学生が所属する学院、必修科目、学生支援、保健管理、教務、生活支援など 1 年生にかかわる教職員が部門を超えてこの窓口を運営し、2020 年 4 月～7 月中旬に約 2600 件のメール相談を受け付けた（1 年生は約 1100 名）。

8 月 17 日に一部の実験科目が抽選で対面開催されたことをはじめとして、対面実施の科目、試験が徐々に増えていった。2021 年 4 月は、学士課程低学年は、できる限り毎週登校する機会があるように（分野によってそうでないこともあるが）時間割が設定された。

ワクチン接種が急速に進んでいる 2021 年 6 月現在、アフターコロナ（with コロナ）の大学教育は如何にあるべきかの議論が行われている。筆者も 2020 年から Zoom による授業を担当し、オンライン授業に大きなメリットと将来の可能性があることを実感している。一方で、学生支援の領域に関しては、現状のオンライン技術では実現ができないことがあるという現場感覚がある。それが何なのかを以下に考察したい。

#### 2. オンライン化で影響を受けた学生の活動

##### 1) 正課外活動

活動の特性によってはオンラインで活発に活動が続けられたサークルが存在するなか、ものづくり、運動、演奏など、集まって実施するサークル活動は、活動が大幅に制限された。2020 年 4 月は対面の新歓活動ができなかったため、サークル活動に入る機会を逸してしまった学生も一定数存在する。

正課外活動のうち、Co-Curricular, Extra curricular に分類される教職員が関与する教室外の活動（各種のオリエンテーション、学修支援、学生自主活動支援、個別チュータリング、学内ワークスタディ、交流イベントなど）は、大学全体のコロナ対応ガイドラインに準拠して実施（オンライン、一部は対面、あるいは中止）された。この領域は、授業科目の円滑な実施が優先されたことも影響し、（一時的に）実施数が少なくなった。

全体として、2020 年度は、学生達の正課外活動の量は少なくなった。正課外活動は、正課とは違い、学生が個々の動機（興味、関心）のもとに自発的に参加する活動である。これが少なかったということは、活動を通じて学生同士・教職員との親しい交流やリーダーシップを経験することがなくなるとともに、なにより学生の自律的な選択の力が十分に育成されない心配があり得る。

##### 2) 偶発的な会話・交流

講義前後の教室・廊下、食堂、ラーニングコモンズでの学生同士の偶発的な会話（もともと話すつもりはなかった会話。教室で隣同志に座った人との雑談、あるいは通りがかり、授業前後の友人達との立ち話など）・交流は、完全オンライン授業の間は、完全になくなっ

てしまった。

初年次以外の学生は、「偶発」に頼らずとも、入学後に出来た友人達とオンラインでつながりを持ち続けることが可能だったと思われる。一方で、初年次学生がはじめて友達を作るためには、「偶発」が果たす役割は大きく、これが完全になくなったことは、彼らの学生生活への適応にとって大きな痛手となっていると思われる。

筆者らが運営した 2020 年度の新入生 welcome メール相談窓口には、通常の年の相談にはない特徴があった。履修申告、課題提出、学生生活に関する些細な内容の問い合わせが頻回に寄せられたのである。例えば、「PDF データでの提出」については、問い合わせが多く、授業の中で時間を取って教える科目もあった。

登校無し、全面オンライン授業という環境では、正課外活動の非活発化、深刻な孤立、友達ができないことによる不適応が起こることは容易に想定された。これらの想定された事態に加えて、多くの学士課程 1 年生が困ったのは、通常の年にはありえない「ちょっとしたことが、どうして良いかわからない」だったのではないかな。

経営学や社会学の組織内コミュニケーション研究では、インフォーマルコミュニケーション、職場交流の重要性が指摘されている。二瓶・田中 (2021) は、濱口・公文 (1982) の「企業体において、フォーマルな組織がいかに整備されていようとも、組織に有機的に結合しているインフォーマルな仕組みやコミュニケーション・システムを抜き取ったり、機能を停止させてしまえば、やはり、表の組織は動かなくなるだろう」という指摘に触れ、職場活動交流尺度を開発している。

大学のキャンパスにおいても、通常時には、フォーマルなコミュニケーション（教員や大学から学生への伝達）は、学生間のインフォーマルなコミュニケーション（交流）に支え

自由研究発表：学士課程教育  
られることで質・量ともに十分に情報伝達されていたのではないだろうか。

伝えるべき内容を規定できる授業の中身は、教員が十分に考え配慮することで、「伝わらない」事態は防げる。オンライン授業で録画が配信できることは、復習にも向いている。

一方で、情報伝達が難しくなったのは次のような領域だろう。「メールで伝えた（メールが多く見落とされることもある）」「ウェブ上には載っている（どこにあるか新人には探すのが難しい）」大学からの伝達。「通常の年はみんなが出来ていた」アカデミックスキルとまでいかない些細なノウハウ、tips 的なこと。さらに、高校までにはないことで、大学の中で、学生の中での明文化されない暗黙的なあれこれ。履修申告や時間割の基本的な考え方にはじまり、2 年次の進路振り分けについて。高校とは異なるちょっとそっけない教員からの連絡はふつうのことなのか？サークル活動がなかなか許されないのはなぜなのか？通常時には、学生同士のインフォーマルな交流の中で伝達・醸成されていたことは意外に多い。

2020 年から各所で実施されている学生へのアンケート調査では、オンライン授業への満足度は比較的高いことが指摘されている。インフォーマルコミュニケーションをオンライン上で可能にするツールの開発も進められていて (e.g. 小川 (2021))、すべての学生生活がオンラインで完結する日も来るのかもしれない。引き続き、オンラインでは何が叶わないのか観察を続け、足りていないことを補完する仕組みを作ること、2020 年学士課程 1 年生を継続的にフォローすることが大事だろう。

参考文献：

小川和也. (2021). テレワーク環境のためのインフォーマルコミュニケーション支援に関する研究. 北陸先端科学技術大学院大学修士論文  
二瓶哲・田中堅一郎. (2021). 職場交流活動尺度の作成—日本における調査結果に基づく試みとして—. 経営行動科学, 32(3), 91-107.

## コロナ禍における学士課程新入生ガイダンスの対応と役割

—東京工業大学 2021 年度学士課程新入生ガイダンスの取り組みから—

○野崎雅子（東京工業大学）・黄若白（東京工業大学）

コロナ禍で急激に変化した大学の学習環境に学生が適応できず、孤立や離脱を起こすといった事態が顕著に現れている。こうした状況の中、学生同士の連帯感、大学への帰属意識や大学生としてのアイデンティティといった意識・認識の喚起と形成が従来よりもいっそう求められていると考えられる。東京工業大学では、2017 年度より実施している学士課程新入生ガイダンスをコロナ禍の現状に適合してその形態と内容のアレンジを試み、2021 年度は 4 月 7 日から 9 日の 3 日間、オンラインで学士課程新入生全員を対象に「学修コンシェルジュによる学士課程新入生ガイダンス」（以下、「ガイダンス」）を実施した。本発表はその実践報告を行うものである。

### 1. ガイダンスの概要

計 1120 名の新入生を均等に 14 名前後で構成される 80 のユニットに分け、4 つのユニットでクラスを作った。20 のクラスそれぞれに Zoom ミーティングルームを設けたうえで、同時に 2 つか 3 つのクラスを並行して開催した。なおユニットは、初年次の全学共通必修基礎科目受講者を割り振る際に、学院の異なりにかかわらず編成された単位である。このため、同じクラスでガイダンスに参加したメンバーは、初年次科目でも同じクラスで受講することになる。

ガイダンスの目標と方針として、「大学学修へのスムーズな適応」「長期的な視点に立った計画作成」という従来の 2 点に加え、「東工大生としての連帯感とアイデンティティの確立」を、コロナ禍の時代のニーズに応じて新たに設定した。こうした目標のもとで、計 90

分間のガイダンスでは、次の順に実施する 3 部の構成として設計した。

①学長への質問コーナー（10 分）

②卒業生・先輩学生によるプレゼンテーション（50 分）

③ユニット交流会（30 分）

並行する 2 つか 3 つのクラスが同じ Zoom ミーティングルームに集まって①を行ったうえで、②と③はクラス単位で実施した。③では、クラス内の 4 つのユニットそれぞれがブレイクアウトルームで自己紹介と連絡先の交換を行った。

以下では、主に交流機会としての③について紹介したうえで、②の形態とその背景・効果について紹介を行う。

### 2. ユニット交流会の導入

ガイダンスの主催者である学生支援センター未来人材育成部門学修コンシェルジュ（発表者）は学修相談業務を担当しているが、2020 年度の 1 年生からの相談では、複数の初年次必修科目を 1 年にわたってともに受講するユニットメンバー同士にもかかわらず、意見交換や疑問点の相互確認がオンライン授業のためなお困難で、交流の機会を失ったことが原因となり学修上の支障をきたす問題が起きている事態がしばしば見られた。このため、ユニット交流の機会を入学時ガイダンスのうちに提供し、互いに自己紹介を行うとともに、今後の交流のために LINE のグループを作成することで、問題の改善を図ることにした。交流会のファシリテーターは、上記②を務める卒業生と先輩学生が務めた。

ガイダンス参加者向けのアンケートにおけ

る「今日のガイダンスの感想をお書きください」の項目では、「ユニット交流会がよかった」という記述および類似の記述がその回答全体の半数を上回る（計 536 件のうち 274 件があった）<sup>1</sup>。ガイダンスと同時に開催する交流会は、早いうちに仲間とつながりたいという新入生のニーズに合致したものであると考えられる。

一方、学長への質問コーナー（上記①）では、学長に対し多くの新入生が Zoom のチャット機能を用い「ぶっつけ本番」で活発に質問を投げかけていた。それぞれの質問に対し、学長がその場で回答を返した。コロナ禍での入学に対し不安を抱えていた新入生の緊張が解れた様子が見られた。

### 3. ガイダンス講師担当と内容の設計

ガイダンスの講師として、大学の同窓会組織に所属している 6 名の年の離れた卒業生と、所属学院が異なる 8 名の学生アシスタントが大学生活をテーマにプレゼンテーションを行った（上記②）。世代・属性が大きく異なる存在であるが、こうした講師担当の配置により、大学での学修と計画について異なる複数の視点と立場に立つ「東工大の先輩」による説明が可能になった。

一方、こうした講師担当の配置に合わせて、ガイダンスの内容にも多面性・立体性を持たせた。卒業生の先輩による大学の歴史・歩みと実績、および学生への支援窓口・ツールの紹介に加え、身近な先輩学生からは「東工大生の一日のモデル」「大学学修の心得」「大学内外でできる諸課外活動」「1 年次の履修上の注意ポイント」「困ったときの対処方法」などについて実体験に基づいた説明を行った。

年配の卒業生が数十年前当時の回想を交えて歴史を紹介ことで、大学の使命と「東工大生」のもつべき視野とアイデンティティに対

自由研究発表：学士課程教育  
する認識の形成が期待できる。その同時に、ピアとしての先輩学生がリアルな体験をもとにすぐにでも実践・応用可能な提案と助言を行うことで、大学での学修と研究に取り組む方法と理念に対する理解も可能になったと考えられる。研修を受けた先輩学生は、新入生にとって学業面にとどまらない様々な面でロールモデルとしての役割を果たすとされる（Shook and Keup 2012）。今回のガイダンスは、先輩学生と卒業生の両方をロールモデルとしてイメージすることで、大学での学修計画と人生のキャリアプランに対するビジョンにつながる内容になっている。

こうした異なる世代・専門を跨る講師陣の配置と多面に亘る内容の設計が可能になったのは、理工系分野の共通言語、価値観や人生への展望が、理工系大学である東京工業大学の学生・卒業生に共有されているからであると考えられる。理工系を専門とする者に共有される共通の基盤が、今回のガイダンス実施が成り立つ条件になっていると考えられる。

### 4. 課題と展望

身近な同期・先輩や、教職員、卒業生などの交流は、大学での学びに重要かつ必要なものであるが、コロナ禍が長引く中では、交流機会の喪失が大きな問題になっている。新入生が入学後まもない時期のうちに参加するガイダンスで、今後の交流活動に直結するような契機を大学の学修支援担当部署が提供することが、新入生ガイダンスがコロナ禍において果たすべき大きな役割の一つであると考えられる。新入生のニーズに応じた活動の提供、および大学の授業運用方針と各学院の教育特性を考慮したガイダンスの形態・内容の設計と改善の取り組みが今後求められる。

### 参考文献

Shook, J.L. & Keup, J.R. The benefits of peer leader programs: An overview from the literature. *New Directions for Higher Education*, 2012(157), 5-16.

<sup>1</sup> ガイダンスで講師を担当した学生アシスタントがアンケートの集計および分析に協力した。



## コロナ禍における初年次教育と入学前教育の現状について

○京極重智（神戸常盤大学）・高松邦彦（神戸常盤大学）・大城亜水（神戸常盤大学）・伴仲謙欣（神戸常盤大学）・川崎弘也（株式会社ラーニングバリュー）・中田康夫（神戸常盤大学）・光成研一郎（神戸常盤大学）

### 1. はじめに

本学は保健科学部の医療検査学科、看護学科、診療放射線学科(2020 年度開設)、教育学部のこども教育学科、そして短期大学部の口腔保健学科の計 5 学科（通信制課程は除く）から成る、専門職養成の小規模大学である。新入生の数は約 420 名である。

本学では、2017 年度より「まなぶる➤ときわびとⅠ（前期）・Ⅱ（後期）」<sup>1)</sup>という全学必修科目を開講している<sup>2)</sup>。本科目は、高等教育において近年ますますその重要性が指摘されている初年次教育の充実を図るべく、大学改革の一環として開講された。

この初年次教育科目「まなぶる➤ときわびとⅠ（前期）・Ⅱ（後期）」では、将来の「チーム医療」「チーム学校」を担う専門職業人を養成することをねらいとし、上記 5 学科の学生を混合で 5～6 名からなるチームを構成し、協働学修を推進している。本科目の科目責任者が、各学科から担当教員を各学科長と交渉し、約 30 名を選出する。教員は 2 名 1 組となり、6 つのチーム（約 30 名の学生）を担当する。

とくに 2020 年度、新型コロナウイルス（COVID-19）感染拡大を食い止めるべく発令された緊急事態宣言により、4 月から 6 月までの間、急遽想定外の遠隔授業で「まなぶる➤ときわびとⅠ」を実施せざるを得ない状況となった。本発表では、教育方法として協働学習やアクティブ・ラーニングを行う「まなぶる➤ときわびとⅠ」を、どのように遠隔授業として実施したのかについて報告する。

また、数年前より、本学でも入学前教育と初年次教育の接続が課題とされていた。2017 年度（新入生）より対面で実施していたワークショップを、コロナ禍ということで、2021 年度（新入生）よりオンラインではじめて実施した。このワークの目的は入学予定者の学びへのモチベーションアップにある。

この 2021 年度よりオンラインで実施するに至った、プレ「まなぶる➤ときわびとⅠ」についてもあわせて報告したい。

### 2. 2020 年度の「まなぶる➤ときわびとⅠ（前期）」について

2020 年度は、コロナ禍のため、4 月から 6 月までの間、遠隔授業を実施せざるを得ない状況となった。2020 年度に実施したシラバスを以下に示す。（表参照）

表 まなぶる➤ときわびとⅠのシラバス

| 授業回              | 授業内容                  |
|------------------|-----------------------|
| 1・2 (4/20 遠隔授業)  | 大学での学修について知ろう         |
| 3・4 (4/30 遠隔授業)  | 大学での学修について知ろう         |
| 5・6 (5/15 遠隔授業)  | 学修計画を立てよう①            |
| 7・8 (5/22 遠隔授業)  | 文章表現講座①<br>学修計画を立てよう② |
| 9・10 (5/29 遠隔授業) | 文章表現講座②<br>学修計画を立てよう③ |
| 11・12 (6/5 遠隔授業) | 文章表現講座③               |

|                      |                                                            |
|----------------------|------------------------------------------------------------|
| 13・14 (6/12<br>遠隔授業) | 自分の学修計画表と人の学修計画表を比較して考えよう！                                 |
| 15・16 (6/12<br>対面授業) | チームの絆を深めよう①<br>テーマ：共に学ぶ仲間をつくる                              |
| 17・18 (6/19<br>対面授業) | チームの絆を深めよう②<br>テーマ：第一印象                                    |
| 19・20 (6/25<br>対面授業) | チームの絆を深めよう③<br>テーマ：私のコミュニケーション                             |
| 21・22 (7/3 対<br>面授業) | チームの絆を深めよう④<br>テーマ：社会に出て求められる力とは？<br>そのために自分がすべきことは？       |
| 23・24 (7/10<br>対面授業) | ロジカルコミュニケーション<br>①<br>テーマ：ロジカルコミュニケーションのためのシンキング           |
| 25・26 (7/17<br>対面授業) | ロジカルコミュニケーション<br>②<br>テーマ：プレゼンテーション<br>I<br>・プレゼンテーションの準備  |
| 27・28 (7/24<br>対面授業) | ロジカルコミュニケーション<br>③<br>テーマ：プレゼンテーション<br>II<br>・プレゼンテーションの実践 |
| 29・30 (7/31<br>対面授業) | まとめ<br>テーマ：リフレクション<br>・凝縮ポートフォリオの作成<br>・プレゼントカードの作成および交換   |

4 月当初から 6 月 12 日までの間を遠隔授業で行い、6 月 12 日から 7 月末まで、対面授業を行った。6 月 12 日については、遠隔と対面の両方を実施した。また、本学における遠隔授業は、オンデマンド形式で行われている

自由研究発表：学士課程教育

ため、日程は表に示した通りだが、授業開始から 1 週間以内に課題を提出するよう定めた。

### 3. 2021 年度（新入生）の入学前教育について

2017 年度（新入生）にスタートさせた初年次教育へと繋がるチームビルディングを基盤とした入学前教育は、2021 年度（新入生）はコロナ禍のため、当初は中止せざるを得ない状況であった。しかし、コロナ禍であるがゆえに、なんとか別の形で開催をできないか模索し、オンラインワークショップへ変更させることで開催させることを可能とした。オンラインワークショップは、全 2 回で行い、2021 年 3 月 10 日に第 1 回目を、3 月 16 日に第 2 回目を実施した。

実施については、Zoom を活用したチームビルディングプログラムとした。新入生の参加者を募り、161 名が参加した。参加者を 4 つのクラスに分け、クラスごとに Zoom の URL を割り当てた（1 クラス平均 40 名）。

事前に 17 名の Student Assistant (SA) と 6 名の担当教員の研修を 2 日間（2 月 15 日と 2 月 24 日）で行った。事前に、入学生の希望者に対して、Zoom の接続テストも行った。接続テストを実施することで、新入生の Wi-Fi 環境などを把握することができた。

### 文献

- 1) 光成研一郎、ほか. 教育から学習へ：教育のパラダイム転換 ～「まなぶる」ときわびと I」の実践から～. 神戸常盤大学紀要、11：7-16、2018.
- 2) 光成研一郎、ほか. 初年次教育科目における多人数教員によるルーブリック評価結果の解析過程から見出した質保証のための新たな解析方法の提案. 第 13 回初年次教育学会大会自由研究発表、発表集 P.26-27、2020.

## 初年次生の学びのモチベーションをオンラインプログラムで喚起する

### — オンラインチームビルディングプログラムの実践と成果 —

○川崎弘也（株式会社ラーニングバリュー）・本田直也（大手前大学）

#### 1. 取り組みの概要

大手前大学では 2010 年から、新入生オリエンテーション期間を活用して、大学への期待感を高め、学びのモチベーションを喚起するチームビルディングプログラムを実施している<sup>1)</sup>。チームビルディングとは、組織開発（Organization Development）の一手法で、自己理解を深め、チームメンバーとも相互理解を深め、目標を統合していくプロセスを体験的に促進する教育訓練の手法である<sup>2)</sup>。大手前大学では、このチームビルディングプログラムを「キャリアデザイン 0.5」と命名し、入学後の必修の初年次教育科目「キャリアデザイン I」への橋渡しの存在と位置づけるとともに、その運営を学生ファシリテーターに任せている。学生ファシリテーターは「PBL 特別演習」という共通教育科目を受講してこのプログラムのファシリテーションを学ぶ。

さて 2020 年はコロナ禍の元、対面実施していた「キャリアデザイン 0.5」は中止となってしまった。そこで 2021 年はオンライン版の「キャリアデザイン 0.5」を新たに開発し、学生ファシリテーターの養成も対面とオンラインのハイブリッド型で実施した。今回はその取り組みの内容および成果を報告したい。

#### 2. オンラインプログラムの開発

チームビルディングがリモート環境で成立するのか。それを確認するために、オンラインチームビルディングプログラムのプロトタイプを 2020 年 5 月に新たに開発し、大手前大学のキャリアデザイン I にて実験授業を行

った。その時のプログラムを図 1 に示す。

|     | 実施した<br>オンライン実習 | ねらい                          |
|-----|-----------------|------------------------------|
| 1週目 | 記者会見            | グループメンバーの相互理解を深める            |
| 2週目 | 課題解決            | グループメンバーの対人影響力（リーダーシップ）を探究する |
| 3週目 | 私の〇〇            | 自分自身やグループメンバーの価値観を探究する       |

(図 1)

実験授業は、4 つのクラスの 5 回目～7 回目の授業時に、Zoom および LMS を活用して行った<sup>3)</sup>。ちなみに 4 回目まではオンデマンドの講義だったので、受講生には、大学に入って初めてのグループワークとなった。

実験授業の結果、各グループともチームビルディングの進展が見られた<sup>3)</sup>。そこで、その結果をもとに「キャリアデザイン 0.5」のオンライン版を開発した。(図 2)

| キャリアデザイン0.5 オンライン |                                                         |
|-------------------|---------------------------------------------------------|
| 9:00              | ①オリエンテーション<br>②グルーピング<br>③コミュニケーション実習1<br>④コミュニケーション実習2 |
|                   | 昼食                                                      |
| 17:30             | ⑤課題解決実習<br>⑥イメージ交換<br>⑦1日のまとめ                           |

(図 2)

#### 3. ファシリテーター研修プログラムの開発

学生ファシリテーター研修もチームビルディングのプロセスで構造化した。初日にオンラインでの「キャリアデザイン 0.5」を自分たちが体験し、以降はロールプレイとフィード

バックを中心に進める形とした（図3）。

#### ー自己理解を深めてファシリテーションに活かそうー

| 1回目の研修   |                                     |          |                      |
|----------|-------------------------------------|----------|----------------------|
| 3月11日(木) |                                     | 3月12日(金) |                      |
| 9:10     | 第一部<br>『PBL特別演習について』<br>全体オリエンテーション | 9:10     | 第三部<br>『グループ内ロールプレイ』 |
| 18:00    | 第二部<br>『プログラムの体験』<br>本日のまとめ         | 18:00    | ホストレクチャー<br>本日のまとめ   |

| 2回目の研修   |                               |          |                        |
|----------|-------------------------------|----------|------------------------|
| 3月23日(火) |                               | 3月24日(水) |                        |
| 9:10     | 第四部<br>『自己の探求』<br>交流分析        | 9:10     | ロープレ つづき               |
| 18:00    | 第五部<br>『本番想定ロールプレイ』<br>本日のまとめ | 18:00    | 第六部<br>『本番への準備』<br>まとめ |

(図3)

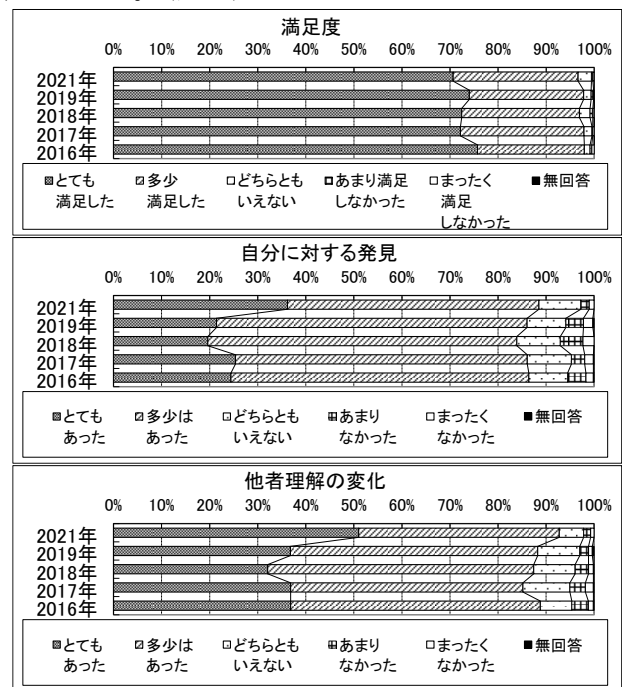
ここで学生ファシリテーター達は、ファシリテーションにとって最も重要な「自己理解」を深め、共にファシリテーションをするチームメンバーと「相互理解」を深め、本番（キャリアデザイン0.5）の成功へと「目標統合」していく。その体験は新生に実施するチームビルディングよりかなり深い。研修での体験を通してプログラムのねらい（＝自己理解、相互理解、目標統合）の意味を深く理解し、そのことがプログラムの扱い方（＝ファシリテーション）に大きな影響を与えるのである。

今回は本番のプログラムがオンラインであったので、各自PCを持ち込んでもらい、Zoom（ロールプレイ用）、Teams（各種連絡用）、LMS（研修ツールの配布用）などのアプリケーションを活用した。

#### 4. 結果と考察

今回の取り組みの効果検証は、毎年行っているプログラム前後の新生アンケートを用いた。その結果、プログラムの満足度にはほとんど差がなく、自己理解や他者理解は、むしろオンラインの方が深まったことがうかがえた（図4）。また、2021年と2019年のアンケート結果の各項目の平均値のt検定をとてみると、「満足度」は若干下がったものの有意差はなく、「自己理解」「他者理解」「授業

自由研究発表：学習意欲・動機／学習成果・効果測定への取り組み姿勢」「今後の学校生活」の各項目は、2021年の方が統計的に有意に大きい結果となった。（図5）



(図4)

|            | 2019年<br>平均 | 2021年<br>平均 | 平均差   | P値       |
|------------|-------------|-------------|-------|----------|
| 満足度        | 4.71        | 4.66        | -0.05 | 0.11955  |
| 自己理解       | 4.00        | 4.21        | 0.21  | 2.81E-07 |
| 他者理解       | 4.22        | 4.41        | 0.19  | 1.19E-06 |
| 授業への取り組み姿勢 | 3.97        | 4.27        | 0.30  | 1.99E-14 |
| 学生生活の変化    | 4.19        | 4.30        | 0.11  | 0.002613 |

(図5)

これらの結果は、学生ファシリテーターの練習量の違いによることがファシリテーターアンケートからうかがえた。2019年は1回も集まらなかったものが約73%であったのに対し、2021年はZoom上で93%以上の学生が複数回集まっていたのである。

#### 【参考文献】

- 1) 川崎弘也 (2017) 「上級生を活用して新生生の大学適応を安定的にはかる」初年次教育学会第10回大会発表要旨集, pp. 174-175
- 2) 北森義昭 (2008) 「組織が活きるチームビルディング」(東洋経済新報社) pp. 5
- 3) 本田直也, 川崎弘也 (2020) 「大学適応を目指すチームビルディングプログラムのオンライン実施」初年次教育学会第13回大会発表要旨集, pp. 52-53

## オンライン新入生オリエンテーションの実施と初年次教育への影響

### ——ビデオ会議によるオンラインチームビルディング研修の実践——

○本田直也（大手前大学）・川崎弘也（株式会社ラーニングバリュー）

#### 1. はじめに

多様な学生が大学へ入学してくる状況において、初年次教育や新入生オリエンテーションの役割は重要である。2020 年度より本格的に始まった全学的なオンライン学習へも対応させるべく、適切なオリエンテーションプログラムを実施する必要がある。

大手前大学では 2021 年度始めに大規模、大人数での対面型研修を開催しづらい状況において、非対面オンラインプログラムを中心とした新入生オリエンテーションを計画した。入学直後の新入生たちがオンラインで研修参加できるよう各自の PC をいち早く設定した。リアルタイムコミュニケーションを中心とするオンラインチームビルディング研修を中核かつ集大成とした。チームビルディング研修をオンラインに切り替えたことによる例年との違いや、一連の新入生オリエンテーション実施後の初年次教育の成果について報告する。

#### 2. 新入生オリエンテーションプログラム

本学では下記の条件が整っていたため、2021 年度にオンラインを中心とした新入生オリエンテーションへと転換できた。

- ・PC 必携化が整い、全新生が入学時に PC を保有していた
  - ・上級生が新入生をサポートする体制を例年構築してきた
  - ・前年度にオンラインチームビルディング研修を試みており、経験を積んでいた<sup>[1]</sup>
  - ・新入生が不自由なくオンライン学習可能とする状況を整える必要性に迫られていた
- 2021 年度に実施した新入生オリエンテー

ションの中でも主要なプログラムを表 1 に示す。学部によって 1 日程度開催日が前後するものもあるが、おおそ同様に展開している。対面形式は教室にて、非対面形式は主に自宅からオンラインにて参加してもらった。

表 1 新入生オリエンテーションプログラム

| 日付   | 内容                            | 形式  |
|------|-------------------------------|-----|
| 3/29 | 英語プレイスメントテスト                  | 対面  |
| 3/29 | PC 設定① (Wi-Fi、LMS、セキュリティ設定など) | 対面  |
| 3/29 | 教務ガイダンス                       | 非対面 |
| 3/31 | 学生証交付・履修相談                    | 対面  |
| 3/31 | 履修登録                          | 非対面 |
| 4/2  | 学生生活ガイダンス                     | 非対面 |
| 4/2  | 大学施設・サービス紹介                   | 非対面 |
| 4/6  | PC 設定② (Zoom、Office、メール設定など)  | 対面  |
| 4/8  | チームビルディング研修                   | 非対面 |

#### 3. オンラインチームビルディング研修

本学では新入生の自己理解と大学適応を目指すチームビルディング研修を 10 年間にわたって対面形式で実施してきた。2020 年度は全学規模での実施を見送り、小規模でオンラインでのチームビルディング研修の実施を試みた<sup>[1]</sup>。オンラインでも十分なコミュニケーションが可能であること、戸惑うことなく研修が遂行できること、対面形式と近い研修効果が得られることなどが確かめられたため、2021 年度には以前と同様に、ほぼ全学規模、全 30 クラス、新入生約 750 人を対象にチームビルディング研修を実施した。

15 クラス×2 回の規模で一斉に研修を行うためには研修進行役のファシリテーターや、それを支えるアシスタントが 40 人規模が必要であり、例年上級生を育成してその役割に充てている。オンラインツールの活用に関しては教職員よりもむしろ学生たちの方が抵抗感なく扱えることや、新入生は上級生に聞きやすく頼りやすい存在であることから、育成も新入生対応もスムーズに実施できた。

オンラインビデオ会議システムとして Zoom を利用し、ファシリテーターの指示のもとで、1 クラス 25 人規模で一斉に展開したり、5 人程度のブレイクアウトルームに分かれたりしながら丸 1 日の研修を進めていった。

本オンラインチームビルディング研修の成果の一部を、例年の対面方式と比較する形で集計し、図 1 に示す。

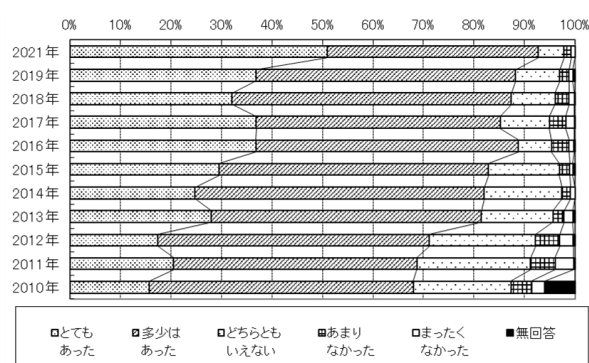


図 1 研修後の他者理解の変化

#### 4. 新入生オリエンテーション後の影響

新入生同士の関係性を構築し、大学適応を促す研修を行ってきたわけだが、全新入生のオンライン学習環境設定とスキルも副次的に獲得できることとなった。大学での学びに慣れていない新入生たちにとって、Zoom ビデオ会議に参加する方法を身に付けていることが、その後のオンライン授業実施において大きな助けとなった。2021 年 4 月下旬に、関西地方の大学においては急遽対面授業からオンライン授業へと切替が行われたが、本学では移行期間も準備期間も置かずに即座に切替が可能

1 年生の Zoom 活用が順調に進んでいる証として、学修サポートセンターの Zoom による学習支援の件数に着目してみる。前年度の 2020 年度は学習に関する支援以前に、Zoom の使い方に関する相談が多く、学習そのものの相談は少ないという状況であった。一方、2021 年度は Zoom の使い方相談は大幅に減り、Zoom 接続による学習支援を受ける件数は大きく増加している。2020 年度秋学期と 2021 年度春学期の月あたりの Zoom による学習支援件数を 1 年生に絞って表 2 にて比較する。なお、学修サポートセンターではいずれの年度も対面学習支援よりも非対面 Zoom による学習支援を強く推奨している。

表 2 Zoom による学習支援の件数（1 年生）

| 2020 年度<br>秋学期 | 件数 | 2021 年度<br>春学期 | 件数  |
|----------------|----|----------------|-----|
| 2020 年 10 月    | 1  | 2021 年 4 月     | 27  |
| 2020 年 11 月    | 8  | 2021 年 5 月     | 104 |
| 2020 年 12 月    | 4  | 2021 年 6 月     | 進行中 |
| 2021 年 1 月     | 10 | 2021 年 7 月     | 進行中 |

#### 5. おわりに

新入生オリエンテーションプログラムをオンライン中心へと転換することで、例年と同じかそれ以上の研修成果が確認できた。新入生のスムーズなオンライン学習の導入と学習支援の様子も確認することができ、本取組の成果が得られていると言える。次年度以降もさらなるオンラインの活用を探っていきたい。

#### 参考文献

- [1] 本田直也, 川崎弘也(2020)「大学適応を目指すチームビルディングプログラムのオンライン実施 ―ビデオ会議システムを用いた非対面リアルタイムコミュニケーション演習―」初年次教育学会第 13 回大会発表要旨集, pp.52-53

## 遠隔授業における学習意欲の課題

——初年次および2年次学生へのアンケート調査を手がかりに——

○梶原健二（福岡女子短期大学）

### 1. はじめに

令和2年度より段階的に実施される「新学習指導要領」においては、「情報活用能力」として各教科におけるコンピュータ等の学習活動の充実が示され、学校現場並びに教師個人にはICTを活用した授業実践の改善や工夫が求められている。さらに、2020年度のコロナ禍により、文部科学省はGIGAスクール構想の実現に向けて、スピード感をもって「教育の情報化」を推進するべく、自治体への補助や学校現場の研修等を展開している。このことは、初等中等教育を踏まえた高等教育においても、高大接続の観点から、学生の学修活動におけるよりさらなる充実したICT活用の実践力が期待されることを意味しよう。

さて、「アンダーコロナ」「ウィズコロナ」の状況下、すべての高等教育機関は、遠隔教育を導入せざるを得ない状況となった。この結果、大学教員のICT活用力やその教育効果の検証が喫緊の課題となってきた。本発表では、短期大学生（1・2年生）のアンケートを手がかりに、遠隔型授業における学習者の授業意欲（教育効果）を検証したうえで、高等教育におけるICTを用いた遠隔教育の課題を明らかにする。

### 2. 調査方法と仮説

短期大学生（1・2年生）に対して、遠隔授業及び対面授業を比較するアンケートを実施した。対象期間は2020年度の前期授業（4月～7月）とし、とくに新1年生は新年度より事前準備なしのオンライン授業を経験した時期となった。

|     |                                                   |
|-----|---------------------------------------------------|
|     | アンケート数(全体 60 名)                                   |
| 対象者 | FT 大学 1 年生 45 名、2 年生 15 名                         |
| 実施日 | 2020 年 8 月 15 日～8 月 19 日<br>校内 e-learning site 使用 |

質問内容は、以下の4点である—<Q1. どちらの授業が受けやすいですか><Q2. どちらの授業がわかりやすかったですか><Q3. 情報機器の操作やアプリケーションソフト（Zoom や YouTube 等）の視聴について（選択回答）><Q4. オンライン型の良い点と悪い点をについて感想を書いてください（自由記述）>—。

検証できる結果（仮説）としては、まず1年生はオンライン授業へのレディネスとしてどのような課題があったのかということ、つぎに2年生は1年次においてすでにICT（e-learning site: Moodle）を活用した授業科目群を履修しており、オンライン授業への移行は1年生よりも支障は少ないことが想定され、よって<Q4>の自由記述への回答が具体的になるということ、さらに3点目は、それらの検証から大学が取り組む初年次導入教育への示唆を得られるのではないかと考えた。

### 3. 検証結果

#### 3-1

授業形式への参加意欲については、1年生の方が、「対面型授業がよい」への指示が高いことがわかった。また、2年生になると、「どちらでもよい派」が増えることから、学習活動への臨機応変な態度がある捉えることができよう。これは大学初年次教育において、情報

教育に関する必修科目があることから、ICT 操作力がついていると考えることができる。

### 3-2

授業の理解度については、1 年生は 7 割以上の学生が、対面型授業を肯定的に捉えていた。また、「オンライン型」を指示する回答は 0%であった。オンライン授業の理解度への不安や教育効果への課題が顕著に表れた。一方、2 年生の場合、「対面型」+「どちらかという」と対面型」を合わせた割合は 46%、「どちらでも構わない」は 40%であった。2 年生は、「対面型」と「構わない派」がほぼ同数の割合であり、授業への理解度については、「対面型」も「オンライン型」もそれほど負担には感じていないようである。とはいえ、オンライン授業を積極的に支持したのは、7%（わずか 1 名）であることから、その質的効用については、オンラインより対面型がはるかに上回ると言えよう。

### 3-3

自由記述からは、オンライン型授業（Zoom や YouTube 等を使用した遠隔教育）については、とりわけ 1 年生は、ICT 操作にストレスを感じていると具体的な回答があった。様々なプラットフォームや学生の ICT 環境を丁寧に調査しながら、教員個人の ICT スキルアップ並びに大学の教育体制のルール作りは、学生の学習成果を積み上げるうえで必要不可欠と言えよう。そして一方、対面型授業については、コロナ感染への不安をあげる以外は、そのデメリットをあげている回答はなかった。とはいえ当然ながら、筆者は ICT による遠隔授業を否定する立場ではない。そう感じたのは学生のコメントにある「資料や声の調子などで大事な部分などがわかり、理解しやすい」「オンラインでも、プラットフォームの説明が入っているものだからよりわかりやすかったです」「(オンライン型でも) スライド+先生の音声付きの場合ならば分かりやすい」が印象に残ったからである。

## 4. まとめと課題

2021 年以降のアフターコロナにおける「個別最適な学び」の実現には、対面型とオンライン型のハイブリット型授業の必要性が求められている。その手がかりとは、PC の画面上からは伝えることが難しい（教員の）声のトーンや雰囲気（表情）というような人間がもつ感性を大切にすることではないだろうか。最後に本稿の到達限界点を示したい。本調査では、学生の自己評価を手がかりに検証をおこなったが、当然ながら、アクティブ・ラーニング型の学びにおいては、教員による学生の総合評価（論述やポートフォリオレポートの作成、グループでの話し合い、作品制作やプレゼンテーション等の多様な活動の評価）を行い、その学習効果を多面的に見なければならない。今後は、ICT を活用した記述レポートや動画等によるプレゼンテーション評価をエビデンスとした学習効果の検証に取り組みたい。

参考文献（Web サイト）

・オンライン日経 BPTOP>新型コロナ休校で「教育格差」6 割、慣れないオンライン授業には戸惑い[文：小槌健太郎\_2020. 06. 25]  
<https://project.nikkeibp.co.jp/pc/atcl/19/06/21/00003/062500095/>

（2021 年 6 月 28 日最終確認）

・文部科学省「「教職課程における教師の ICT 活用指導力充実に向けた取組について」(中央教育審議会初等中等教育分科会教員養成部会) の送付について（通知）」(令和 2 年 10 月 5 日)、2020

<[https://www.mext.go.jp/content/20201201-mxt\\_kyoikujinzai01-000011382-16.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20201201-mxt_kyoikujinzai01-000011382-16.pdf)>

（2021 年 6 月 28 日最終確認）



## 学生が主体的に参加する学修支援を目指して ——SAの活動を中心において——

○鈴江秀一朗（大阪青山大学）・植田一夫（大阪青山大学）

### 1. はじめに

SAは2000年に文科省が出した通称「廣中レポート」がきっかけで設けられた。現状はSAが従事する業務は「雑用」に限定されている場合が多いという指摘がある（立山2013）。しかし、より年齢の近い上級生による支援が有効であるという指摘（井上、林2018）は支援そのものにSAをかかわらせるという点で重要である。支援される側も支援するSAも主体的に取り組める学修支援を目指した。

### 2. 大阪青山大学の現状と課題

本学は1学部3学科1,000人足らずの小規模大学である。健康栄養学科、子ども教育学科、看護学科があり、それぞれの学科で学生は免許や資格に必要な学修については積極的に取り組めるが、幅広い教養にはあまり関心を示さない。免許や資格に必要な学習でも躓くと適切な援助も受けずに単位を落としてしまう層が一定いる。

リテラシーサポートセンター（以下LSC）は2020年度に学習支援室を改組し、より基礎学力の充実とアカデミックスキルを学べる場をめざしている。学修支援に携わる教職員のスタッフは学科所属の運営委員、及び教職経験者の専門支援アドバイザーを配置し、SAが総勢43名いてLSCの活動の中心を担っている。

### 3. LSCの基本方針

—目標とそれに基づく活動—

（1）大学生活の不安を解消し、安心して学修に取り組めるようにする

SAによる4月集中サポート講座／試験前対策／実習前講座／これらの活動で先輩とのつながりを築く

（2）基礎学力の向上をめざす場にする

苦手科目克服（子ども教育学科SAによる割合計算指導・英語相談講座）／履修科目との関係で必然的に学べるものを担当教員と連携してセットする／コロナ禍の不安や不満、要求などを様々な形式で表現する「これだけは言いたいコンクール」／ゲーム的に取り組み賞を与え、伸び率を評価（スタンプラリー・新聞購読とコラム評コンテストなど）

（3）アカデミックスキルを学べる場にする

レポート制作など学生の要求に基づく援助／SAが学問は楽しいと実感できるよう、自主的な学修の場をつくる／SAが得た学びの楽しさを、他の学生とともに学び共有できる場をつくる

（1）から（3）までの活動の参加者を増やすためにLSCの存在を知らせるようにする。

### 4. 昨年度の取り組みから

これらの基本方針のもと昨年度取り組まれたなかで特徴的だった3点を報告する。

#### ①担任と連携しての基礎学力向上めざす

授業担当者が学生の基礎学力不足に気づいても、学生本人が向き合う気にならねば課題は解決しない。しかし担任制度の中で学生へ働きかけ、「数学を、算数レベルから学び直したい

という意欲を作り出すことができた。その学生は担任とともにLSCを訪ね、これが子ども教育学科SAによる割合計算指導へとつながった。対象は健康栄養学科の1年次生であるが、他学科の先輩に教えてもらうことに抵抗はなく、「私の知らない公式がどんどんわかっていくのがとても勉強になったし、とても楽しかった」と感想を述べていた。また教える側のSAも将来小学校の教員をめざしており、「教えるということで、自分自身が理解して

いないといけないうえ、それに向けて必死になれました」と活動を振り返っている。教わる側教える側の相互に影響があるこの指導は学ぶことの楽しさが生まれ、本人の希望により本年度も継続されている。

## ② SA による学修支援

SA の学修支援でレポート指導も①と同様に相互に影響のある活動であった。特に昨年度は大学への入校が制限される時期もあり、レポートの書き方がわからないという 1 年次生が LSC を訪ねた。丁度同じ子ども教育学科の 4 年次生の SA が対応したため、授業の進みや出された課題を聴き取るなどして指導することができた。この指導を、4 年次の SA は「1 年生は初めてのレポート作成なので、あまり自分たちの言葉に染め上げないように気をつけました。1 年生がとても感謝してくれて、明るい表情で帰っていく姿を見てやりがいを感じました」と振り返っている。この指導を受けた 1 年次生が、現在は SA となり後輩へ支援を行っている。先輩後輩としてのつながりは学生の学習動機を高めた。

## ③ 学科と連携した講座

看護学科は他の学科に比べて実習の時間数が多く、それに伴う不安も多い。当時の看護学科所属の運営委員は、「学生のニーズを SA が主体的にすくい上げ、教養ミニ講座として展開してきた」と振り返っている。講義や実習はカリキュラムと関係性が深く、SA が指導するにも学科との連携が不可欠となる。運営委員は学科と LSC の関係性も考慮し、SA が提案する内容の相談に乗りながら学科に持ち帰り調整を図る。このような働きかけにより、既に実習を体験し終えた SA による生の声を実習に臨む前の学生へ伝え、交流することができた。

運営委員は SA と後輩が主体的にかかわることで相互の自信、自己効力感が高まることをねらいとした。講座は学生同士の貴重なつながりを得る場として成功した。

## 5. 成果と課題

### ① 成果

第一にコロナ禍では対面授業が制限された遠隔授業期間にはメールなどで SA とやり取りを続けた。開催できた講座の数は減ったにも関わらず、SA は従来よりも活動にやりがいを覚えた感想を述べている。特に看護学科の SA は昨年度の活動成果について「交流がたくさん増え、たくさんの意見を言ってよい講座が組めた」と答えている。

第二に学修支援を受けた学生が SA になること、割合指導が今年度も継続しているように学生が主体的に参加する場が生まれれば、それは継続・発展していくということが挙げられる。

### ② 課題

第一にコロナ禍の中、学修支援の必要性は増し、支援の手が届かない学生がまだまだいること。これらの学生に LSC の存在を知らせ、学修支援の機会を与えるために、学科や担任との連携を一層深める必要がある。

第二に SA の主体的な活動を増やすため、話し合いの時間を保障し、彼らが自主的に考えた活動をサポートする体制を今後も充実させ LSC を楽しい場にする。

これらを踏まえ、本学独自の学修支援「小規模校ならではの丁寧な教育」をつくる。

## 参考文献

- 文科省高等教育局「大学における学生生活の充実方策について（報告）：学生の立場に立った大学づくりを目指して」2000 年  
立山博邦「大学におけるスチューデント・アシスタント（SA）制度の考察」『社会システム研究』26, 137－150  
井上聡・林紀行「TA との協働による初年次教育プログラムの改善」『環太平洋大学紀要』2018 年, 29

## コロナ禍以前と渦中における 初年次教育科目「SOJO 基礎」の学修成績と到達度について

○藤本元啓（崇城大学）

### 1. はじめに

2019 年度の新カリキュラムにおいて、崇城大学学生の学びの基礎を担う初年次教育科目「SOJO 基礎 I II」（前後期：工学部・情報学部・生物生命学部）、「SOJO 基礎（薬学）」（前期）を新設した。1 クラス 30 名で、シラバス、課題の数量・配点、評価基準はすべて同一で、クラス間の公平性を可能な限り担保している。

この科目の特徴は、第 1 に「SOJO ポートフォリオシステム」を活用した自己管理と社会動向へ関心の向上を図り、第 2 にキャリアデザインのコンテンツを意図的に組み込み、PBL 型授業によって調査・発表・評価・報告書作成を体験することである。

このような科目をコロナ禍の 2020 年度前期は、学生と一度も会うことのない学修環境下での遠隔授業（オンデマンド）にせざるを得なかった。初年次学生は慣れない 90 分の遠隔で始まった大学での授業において、学修の理解、知識やスキルの修得についてどのように思ったのであろうか。

そこで本報告では、19 年度前期の対面授業と 20 年度前期のオンデマンド授業について、教員の成績評定と学生の自己評価である学修到達度とを比較しておきたい。

### 2. 対面授業とオンデマンド授業プログラム

20 年度前期は通信環境の不備や PC 不所持・操作に不慣れな学生に配慮して、手書き用のワークブックを急遽送付した。プログラム全体（図 1）の変更はないが、プレゼンテーションは 19 年度のチーム活動を 20 年度は個人活動に置き換え、口頭発表は見送った。なお薬学部のプログラム概要は 3 学部とほぼ同様だが、コンテンツが異なる。

| 回  | 対面授業 2019年度前期        | 遠隔授業 2020年度前期         |
|----|----------------------|-----------------------|
| 1  | 「SOJO基礎 I」の概要        | 「SOJO基礎 I」の概要         |
| 2  | キャリアデザイン             | キャリアデザイン              |
| 3  |                      | チーム討論の基礎              |
| 4  | プレゼンテーションA(チーム活動)    | プレゼンテーションA(個人活動)      |
| 5  | 「大学HPの探求」の準備         | 「大学HPの探求」の資料調査        |
| 6  | プレゼンテーションA発表会、7分     | プレゼンテーションA(個人活動)      |
| 7  |                      | 「大学HPの探求」の発表資料と原稿作成   |
| 8  | プレゼンテーションB(チーム活動)    | プレゼンテーションB(個人活動)      |
| 9  | 「所属学科研究室調査」の準備       | 「所属学科研究室調査」の資料調査      |
| 10 |                      |                       |
| 11 | プレゼンテーションB発表会(チーム活動) | プレゼンテーションB(個人活動)      |
| 12 | チーム活動報告書の作成(チーム活動)   | 「所属学科研究室調査」の発表資料と原稿作成 |
| 13 |                      | 文章作成の基礎               |
| 14 | 文章作成の基礎              |                       |
| 15 | 課題レポート作成             | 課題レポート作成              |

図 1 「SOJO 基礎 I」プログラム

### 3. 成績評定について

以下の表 1 と 2 に掲げたのが、19、20 年度前期の成績評定の分布である（評定は、S：90～100 点、A：80～89 点、B：70～79 点、C：60～69 点、D：59 点以下、F：出席不良）。

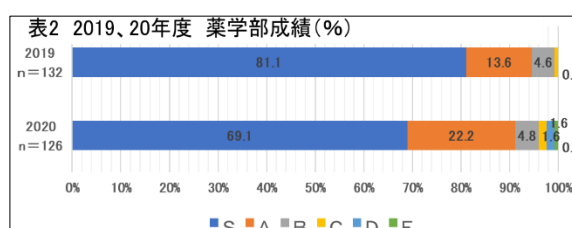
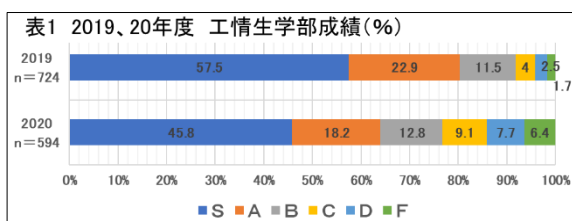
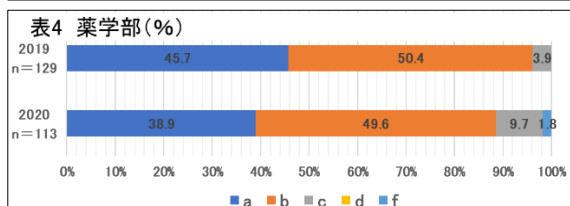
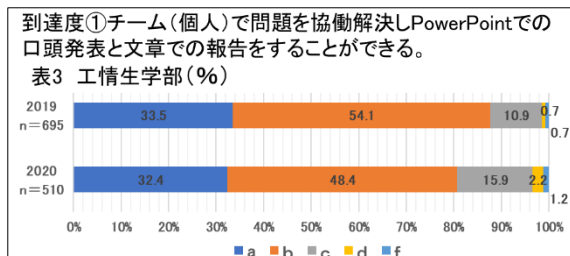


表 1 の工・情・生学部（以下、3 学部）では、S 評価の割合は 57.5%が 45.8%に、A 評価は 22.9%が 18.2%に低下し、C 評価は 4.0%が 9.1%、D 評価は 2.5%が 7.7%、F 評価は 1.7%が 6.4%に増加している。表 2 の薬学部でも、S 評価は 81.1%が 69.1%に下がり、C 評価は 0.8%が 1.6%、D・F 評価は 0%から 1.6%と 0.8%とに増加している。

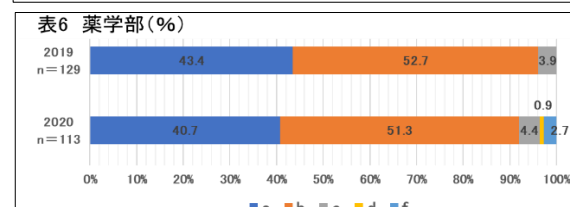
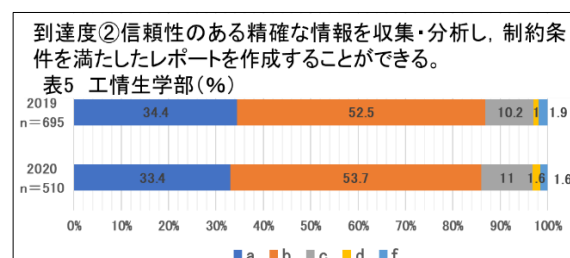
オンデマンドにおける全学部での C・D・F 評価が増加していること、とくに不合格者 D と出席不良者 F が格段に増加している。

#### 4. 学修到達度について

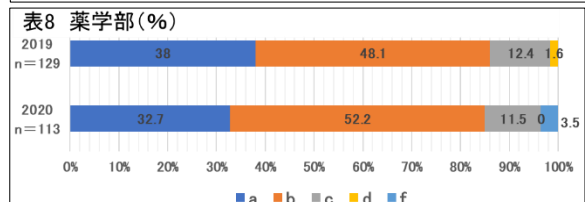
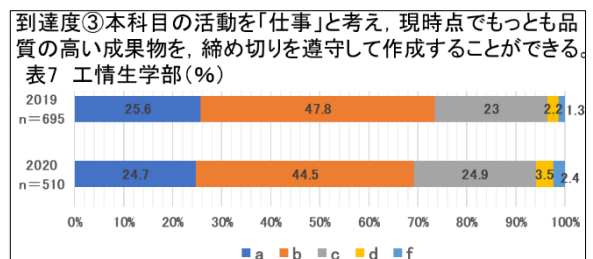
本科目の「学生の到達度目標」は、学期末の「学修到達度レポート」として目標ごとに「aよくできた、bまあできた、cあまりできなかった、dまったくできなかった」の4段階（fは未記入者数）で自己評価し、その理由を200～250文字で言語化作成することになっている。ここでは6項目のうち以下の3項目について到達度の割合を掲げ、19年度と20年度とを比較しておきたい。



20年度の3学部では19年度と比べて、aが1.1%、a+bが6.8%減じている。薬学部ではaが6.8%、a+bは7.6%減少した。



20年度の3学部では19年度と比べて、aは1.0%、a+bは0.2%増の横ばいである。薬学部ではaが2.7%、a+bでは4.1%減じている。



20年度の3学部では19年度と比べて、aは0.9%、a+bは4.2%減じている。薬学部ではaが5.3%、a+bでは1.2%減じている。

#### 5. おわりに

オンデマンド授業では①報告資料と原稿の個人での作成や口頭報告スキル、②レポート作成スキル等の修得に関して、不安視する学生が対面授業よりも多いようである。報告者の担当クラスに限ると、授業ごとの要点整理は大方できていたが、発表資料・原稿とレポートは、作成ルールを理解しているにもかかわらず、ほとんど守られなかった。

一方で大学の「コロナ禍における学修に関するアンケート」(20年度12～2月)によると、英語を除く教養系科目(講義)では半数以上の初年次学生が全授業回で遠隔もしくはブレンド型授業、専門科目(実験・演習)では対面授業が望ましいと回答している。本科目は演習科目の特徴をもつが、それを意識した回答であるかは分からない。

ただ19年度と20年度の各到達度の数値差は、さほど大きいわけではない。それは対面とは異なり、同級生との学び合いがなく、お互いの知識やスキルの確認もできなかったため、到達度はオンデマンド学修環境内での満足度の可能性がある。その反面、成績評価の差は大きい。個人学修での理解と実践は、学生同士や教員との直接的交流がある対面授業でのそれとは異なり、初年次教育に限って言えば、対面授業との格差を痛感させられた。

## 看護学生の初年次教育の成果

### ——アカデミック・スキルズ授業後レポートの分析より——

○久司一葉・本田康二郎（金沢医科大学）

#### 1. はじめに

大学全入時代が声高になると共に、初年次教育が注目され始め、2008年には初年次教育学会が設立され、日本の高等教育における導入が本格化している。文部科学省<sup>1)</sup>の調査では、初年次教育を導入している大学数は年々増加し、2016年には全体の97.1%が実施している。一方で看護系大学に注目すると、271校への調査を実施した結果、回収率35%内で約86%の大学が初年次教育を実施していた<sup>2)</sup>。看護系では、初年次教育を専門分野(看護学)の導入教育と位置付け<sup>3)</sup>、演習として専任教員が実施する傾向にある<sup>4)5)</sup>。金沢医科大学では、2019年度より、看護学部1年生を対象とした、一般教育機構教員(非専任)が担当する「アカデミック・スキルズ(以降AS)」を実施している。2020年度はコロナ禍にありながら終盤2回を除き、対面での授業を実施した。本報告ではAS全授業終了後に学生が記述したレポート内容を分析した結果、初年次教育としての成果の示唆を得たので報告する。

#### 2. 方法

分析対象は、筆者が担当した、2020年度AS授業終了時に提出したレポート67編である。まず授業の全体像を紹介する。1学年69名を14グループとし、2グループに1名の教員をチューターとして配置した。教員の属性は、筆者を含む一般教育機構医療人文学3名、看護学教員4名であった。授業は週1回90分で行った(表1)。評価は12回終了した時点で、レポートを1本提出し、ループリック

に基づき各チューターおよび授業責任者による採点を実施した。レポートのテーマは、「新型コロナウイルス感染予防と生活様式について正負両面から自由に論じなさい」であった。初回の採点で成績が不十分な者は、再提出期間を経てもう一度評価を行った。パワーポイントでの講義の他、実習ではグループ単位で机を寄せて討議を行わせた。レポート課題に寄せた各グループのアウトライン作成が討議のメインテーマであった。討議の結果をプレゼンテーションして互いに評価を行い、全15回を終了した。授業授業後レポートのテーマは、「AS授業を終えて、看護学生としての展望」であった。レポートをデータ化して、フリー版KH Coder 3を用いてテキストマイニング分析を実施した。

#### 3. 結果

##### 1) 単語頻度解析

表 1

| 回  | 区分 | 講義・実習内容                          |
|----|----|----------------------------------|
| 1  | 講義 | ガイダンス / グループ活動                   |
| 2  | 講義 | 情報検索の練習                          |
| 3  | 講義 | 文書の要約                            |
| 4  | 実習 | グループ学習 クリティカル・シンキング1             |
| 5  | 実習 | グループ学習 クリティカル・シンキング2             |
| 6  | 実習 | レポートの書き方 作文と論文の違い                |
| 7  | 講義 | グループ学習 クリティカル・シンキング3             |
| 8  | 実習 | レポート作成 アウトラインの作成1                |
| 9  | 実習 | レポート作成 アウトラインの作成2                |
| 10 | 実習 | レポート作成 アウトラインの作成3                |
| 11 | 実習 | レポートの書き方 引用と参考文献／プレゼンテーションのエッセンス |
| 12 | 実習 | 注の入れ方とプレゼンの技術                    |
| 13 | 実習 | プレゼンテーションの準備                     |
| 14 | 講義 | プレゼンテーション1                       |
| 15 | 講義 | プレゼンテーション2 / 講義のまとめ              |

データ化したレポートを、KH Coder で単純集計を行った結果、総抽出語数は 27,604 語、異なり語数（何種類の語が含まれていたかを示す）は 1,809 語であった。

出現頻度の高かった単語を品詞別でみると、名詞では自分（199）、グループ（162）、情報（89）、サ変名詞では、看護（185）、授業（178）、レポート（134）であった。動詞では、思う（216）、考える（164）、学ぶ（145）、書く（109）、形容動詞では、大切（67）、必要（66）、重要（51）であった。未知語として AS（アカデミック・スキルズ）（153）であった。

## 2) 共起ネットワーク（サブグラフ）

共起ネットワークでは、共に用いられる語や句などの関係を、出現パターンの程度として線で表わす。関係の強さは線の太さで、出現頻度は円の大きさを表している<sup>6)</sup>。分析した結果、8つのサブグラフが得られた（図1）。サブグラフに示された語について KWIC で文脈を確認しながら、AS 授業での学びを示すカテゴリーとして命名を試みた。第1カテゴリー「グループ内では相手を尊重し意見を伝える」、第2カテゴリー「ASでレポートの書き方を学ぶ」、第3カテゴリー「看護大学生は、医療や患者のことを考える」、第4カテゴリー「情報収集や共有できる力を AS で

身につける」、第5カテゴリー「コロナ禍の授業環境」、第6カテゴリー「他者と話す」、第7カテゴリー「明確な主張や反論」、第8カテゴリー「疑問を持ち質問する」の8カテゴリーである。

## 4. 考察

初年次教育が目標とすることの一つには、学生が主体的に学ぶ存在となることがある<sup>7)</sup>。第1～3カテゴリーの主語はいずれも看護学生である学生自身であった。また、第3・5カテゴリーを除くカテゴリーではいずれも、初年次教育内容として列挙される学習スキル内容が表記された<sup>8)</sup>。さらに、初年次教育教育の効果の一つである学びの持続性<sup>9)</sup>では、第3カテゴリー「医療や患者を考える」の表記について、学年進行に伴う専門教育内で ASでの学びの活用が期待されるものである。

## 5. まとめ

看護学生の AS 授業後レポートを分析した結果、AS の授業での一般的なスキル獲得といった学びの他、専門教育内での活用が期待できることが示唆された。

※参考文献は当日提示します。

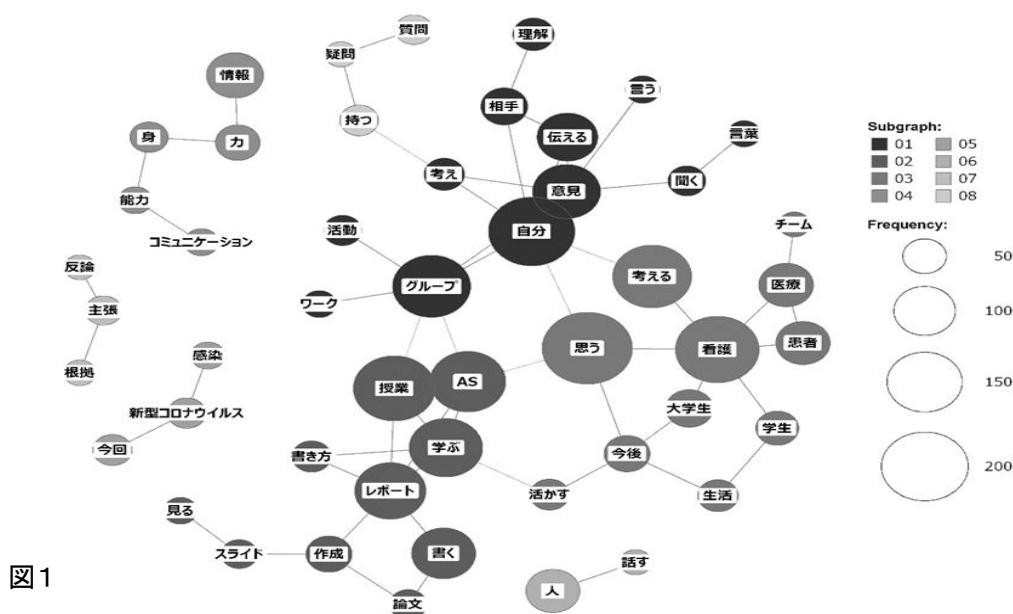


図1

## ジェネリックスキルの習得を目指した初年次教育の新たな実践

### —岡山理科大学「こころ豊かに生きる科目」の導入事例から—

○野間川内一樹（岡山理科大学）・山咲博昭（広島市立大学/岡山理科大学）

#### 1. 「こころ豊かに生きる科目」の導入経緯

「岡山理科大学 3 つの改革」として、「新学部構想」「基盤教育の改革」「入試改革」を掲げ、基盤教育改革の中で「人間形成のための教育」を体系化し、ジェネリックスキルを習得に向けて取り組んでいる。「こころ豊かに生きる」「知性を磨く」「技能を活かす」の 3 つの成長観点のもと、12 の目標を掲げ（表 1－1 参照）、こころ豊かに生きる科目として「セルフ・アウェアネス入門・実践」「ライフ・ビルディング力入門・実践」「アサーティブ・コミュニケーション入門・実践」合計 6 科目を 1 回生対象に、2020 年度春学期より開講した。

#### 2. 「こころ豊かに生きる科目」の特徴

「過去の自分からの気づき」を大切にしたセルフ・アウェアネス、「自分の良さを自分で見つけ、自分なりの幸せを築く」ライフ・ビルディング力、「自分を知り、他者との適切な距離を覚え、自分の気持ちを素直に伝えるコミュニケーション」を身につけて、心健やかに生きる」ためのアサーティブ・コミュニケーション、これら 3 つ科目は、共に過去・現在・未来が結びつき、学生自身が自らの力で未来と幸せを築くことを目的としており、学生自身の振り返りによって更に深い結びつきとなることを狙いとしている。

表 1 岡山理科大学の基盤教育における 3 つの成長の観点と 12 の教育目標

| こころ豊かに生きる<br>Mind                                   | 知性を磨く<br>Intelligence                              | 技能を活かす<br>Skill                                                     |
|-----------------------------------------------------|----------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------|
| <b>M1. 自己の肯定</b><br>ありのままの自分を肯定的に受け入れる              | <b>I1. 学ぶ意義</b><br>好奇心と探究心を保ち続け、将来を見据え、なぜ学ぶのかを理解する | <b>S1. コミュニケーション能力</b><br>「読む・書く・聴く・話す」を通して、相手を理解し、自分を表現する          |
| <b>M2. おもいやり</b><br>相手の気持ちを察し、おもいやりのある態度で接する        | <b>I2. 確かな知識</b><br>学術的・科学的根拠に裏打ちされた生きた知識を身につける    | <b>S2. 情報活用能力</b><br>課題や目的に応じて情報を収集・整理・分析し、効果的に活用する                 |
| <b>M3. 失敗をおそれない勇氣</b><br>自ら考え、主体的に行動し、失敗しても粘り強く取り組む | <b>I3. 賢明な判断</b><br>知識や経験に基づいて、理にかなった適切な判断を行う      | <b>S3. 問題発見・解決力</b><br>問題を発見し、様々な方法を用いて解決策に導く                       |
| <b>M4. 多様性の尊重</b><br>多様性を認め尊重し、仲間とともに力を合せる          | <b>I4. 創造的な思考</b><br>常識にとらわれず、新しいものを生み出すために深く考える   | <b>S4. リーダーシップとマネジメント</b><br>自らの強みを活かして、リーダーシップの発揮やチーム活動のマネジメントができる |

（岡山理科大学ホームページ <https://www.ous.ac.jp/outline/vision/be/>）

自由研究発表：ジェネリックスキル／授業デザイン  
つけ、全体が 100%となるように集計した。

### 3. 授業実施方法と特徴

過去に例のない「こころ豊かに生きる科目」の授業を実施するにあたり、受講する全学生の主体的な授業への参加が不可欠であることから、開発チームでは、授業方法について検討を重ね、以下の方針を踏まえて授業開発並びに授業運営、実施に取り組んだ。

- ・受講する学生が心理的に安心・安全な状態になる環境を整備すること
- ・グループワークを頻繁に取り入れ、受け身の授業参加にならない工夫をすること
- ・2 回生～4 回生の学生で構成されたボランティア学生スタッフがグループワーク時のファシリテーションを行うこと

この様な授業実施方針により、グループワークの際には、受講学生 3 名～5 名のグループにボランティア学生スタッフ 1 名が入り、ファシリテートを行え、先輩と後輩または同学年の学生同士による学びの場を作ることが可能となった。

4. 「こころ豊かに生きる科目」の受講動機  
「セルフ・アウェアネス実践」、「ライフ・ビルディング力実践」、「アサーティブ・コミュニケーション実践」の各授業を行った秋 1 学期と秋 2 学期の最終日に、授業に対するアンケート（質問数 24）を、152 名の学生に実施した。中でも「22.この授業を履修した理由はどれですか。（複数選択）」について以下のような結果が得られた。尚、複数選択の回答でしたが、下記のように回答内容に優先順位を

#### ■回答内容の優先順位

優先順位 1：春 1 学期、春 2 学期、秋 1 学期の授業内容が良かったから

優先順位 2：良い授業だと聞いたから

優先順位 3：講義内容に興味があるから

優先順位 4：友人・知人に「一緒に受講しよう」と誘われたから

優先順位 5：時間割の上で、この授業が好都合だったから

優先順位 6：単位が簡単に取得できるから  
結果は以下の通りとなった。

### 5. 結果と考察

「春 1 学期、春 2 学期、秋 1 学期の授業内容が良かったから」と「良い授業だと聞いたから」の回答の合計が 111 名（73.02%）となったことから、授業内容と授業実施方法から、こころ豊かに生きる科目が、初年次教育の内容としても一定の役割を果たしているものと推察する。

これまで、本学を含めた多くの大学ではアカデミックスキルの修得を主とした初年次教育プログラムを構築はしていたが、高校から大学における移行課題のなかで学生の精神的成長や適応について焦点を当てたプログラムは少なかった。そのため、アカデミックスキルに加えて、学生の内面に着目した本授業の取組みは初年次教育の観点から意義のあるものだといえる。

表 2 「こころ豊かに生きる科目」の受講動機

| 質問内容                             | 回答数（人） | 率（%）  |
|----------------------------------|--------|-------|
| 春 1 学期、春 2 学期、秋 1 学期の授業内容が良かったから | 84     | 55.26 |
| 良い授業だと聞いたから                      | 27     | 17.76 |
| 講義内容に興味があるから                     | 12     | 7.89  |
| 友人・知人に「一緒に受講しよう」と誘われたから          | 23     | 15.13 |
| 時間割の上で、この授業が好都合だったから             | 3      | 1.97  |
| 単位が簡単に取得できるから                    | 3      | 1.97  |



## 大学一年生における「わかったつもり」の心理学的検討 II

### ——レポートの作成時間と得点の予測の正確さは成績によって異なるか？——

○高橋佳史（法政大学大学院）・藤田哲也（法政大学）

#### 1. 問題と目的

大学1年生は、中等教育から高等教育への移行に伴い必要な学習スキルが転換しているにもかかわらず、学習スキルを十分に修得できている、すなわち、「わかったつもり」の状態になりやすい（藤田, 2018）。高橋・藤田(2020)は、学習に対する「わかったつもり」を心理学の知見から捉え、大学一年生のレポート作成に対する「わかったつもり」とメタ認知尺度得点との関連を検討した。結果として、レポート作成時間の予測において、メタ認知的知識得点が高い集団は作成時間を過小に予測し、レポート得点の予測においては、モニタリング得点が高い集団は得点の予測を過大評価することがわかった。

成績が高い集団と低い集団では学習の取組が異なると言われており(Bjork, Dunlosky, & Kornell, 2013), 高橋・藤田(2020)は、成績集団ごとに、レポートの作成時間とレポート得点と予測の差分との関連の強さに違いがあるかを検討していた。しかしながら、そもそも、成績集団によってレポートの作成時間や、予測と得点の実測値の差分に違いがあるかどうかは検討していなかった。成績による学習活動の違いを把握するためにはこれらの分析も不可欠と考える。本研究の目的は、授業成績の評価得点グループによって、レポート作成時間とレポート得点のそれぞれにおいて、予測と実際の得点に違いがあるか比較検討することである。仮説として、授業成績の上位群ほど、作成時間および得点の予想と実際のズレが小さくなるだろうと考えられる(Hacker, Bol, Horgan & Rakow, 2000)。

#### 2. 方法（高橋・藤田, 2020 と同様）

**調査対象者** 対象者は、都内の私立大学の初年次教育科目の基礎ゼミ I を受講していた大学一年生 63 名（男性 21 名、女性 42 名）のうち、レポートを提出した 47 名（男性 15 名、女性 32 名）であった。

**手続き** 調査は 2 回に分けて行われた。1 回目の調査は、レポートの書き方を取り上げ、課題内容を告知した 11 回目の授業内で一斉に行われた。調査日は、レポート提出日の 1 週間前であった。この 1 回目の調査では、メタ認知尺度と自己効力感尺度を実施した。その後、対象者は事前のレポートに対する自己評価として、レポート作成時間を 30 分単位で、レポート得点を 40 点満点で予測し回答した。

2 回目の調査は、レポート提出回に実施。授業で配付されたレポート評価基準を用いて自己評価した結果の得点と、実際のレポート作成時間を 30 分単位で回答するよう求めた。メタ認知尺度と自己効力感尺度は本研究では使用しないため以降は言及しない。

#### 3. 結果と考察

授業成績を集団ごとに分ける指標として、基礎ゼミ I の平常点とレポート得点を反映させた総合評価得点を用いた。データを採取した大学の成績基準を参考に、対象者を五つのグループに分類した(グループ 1 : 90-100 点, グループ 2 : 80-89 点, グループ 3 : 70-79 点, グループ 4 : 60-69 点, グループ 5 : 60 点未満)。それぞれのグループの学生数は、グループ 1 は 15 名、グループ 2 は 31 名、グループ 3 は 8 名、グループ 4 は 4 名、グループ 5 は 5 名であった。

**授業成績グループ間のレポート作成時間の比較** 授業成績集団間で、レポートの作成時間の予測と実際のレポート作成時間それぞれにおいて有意な差はみられなかった(レポート作成時間の予測： $F(4, 42) = 1.03, n.s.$ 、実際のレポート作成時間： $F(4, 42) = 0.65, n.s.$ )。

**授業成績グループ間のレポート得点の比較** 授業成績グループ間で、レポート得点の予測の差は有意傾向であった( $F(4, 42) = 2.21, p = .09$ )。多重比較 (Shaffer 法) の結果、どの成績グループ間でも有意差はみられなかった( $t_{adjusted}(42) < 2.36$ )。実際のレポート得点は、授業成績グループ間で有意な差がみられた( $F(4, 42) = 26.47, p < .01$ )。多重比較の結果、グループ間で有意差がみられた(グループ1≧グループ2>グループ3≧グループ4>グループ5：いずれも  $p < .01$ )。

グループ分けした成績集団ごとのレポート作成時間の予測と実際の作成時間を図 1 に示した。最も成績が高かったグループ1は、作成時間の予測よりも、実際の作成時間の方が短かった。つまり、予測したよりも早くレポートを仕上げることができていた。一方、他のグループは、作成時間予測よりも実際の作成時間の方が長かった(授業成績上位の31パーセントを除いた、69パーセントが予測よりも作成に時間がかかっていた)。すなわち、成績下位の者はレポート作成に必要な所要時間を十分に確保するようスケジューリングできないリスクが相対的に大きいことを意味している。大学一年次の学生にとって、本格的なレポート作成は初めての経験であったため、正確に所要時間を予測できていなかったという意味では成績上位者も同様だが、予測していたよりも実際の作成に必要な時間が長い場合には十分納得できる取り組みにならない可能性がある。これも一種の「わかったつもり」と言えるだろう。

グループ分けした成績集団ごとのレポート得点の予測と実際の得点を図 2 に示した。こ

こから、最も成績の低かったグループ5は、レポート得点の予測よりも実際のレポート得点が下回る、過大評価が見られた。成績下位の者はレポート作成に必要な知識や技能を自分が持ち合わせているかどうかを正しくモニタリングできていないことが示唆される。

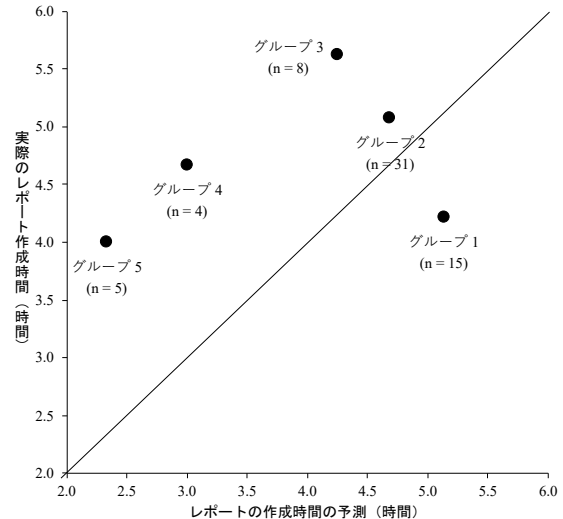


図 1. 授業成績グループ別のレポート作成時間の予測平均 (X) と実際の時間の平均 (Y)

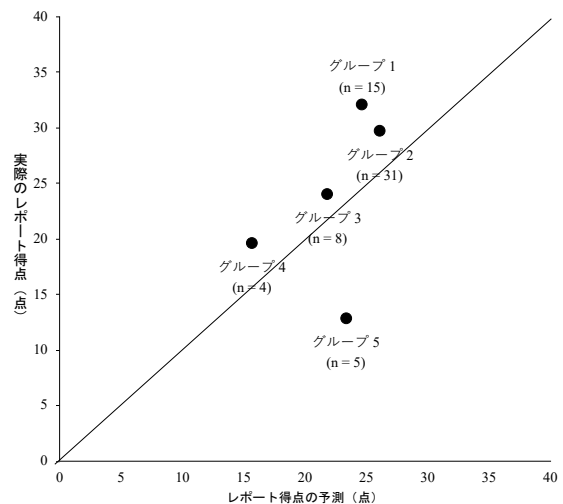


図 2. 授業成績グループ別のレポート得点の予測の平均 (X) と実際の得点の平均 (Y)

#### 4. 引用文献

高橋佳史・藤田哲也 (2020). 大学一年生における「わかったつもり」の心理学的検討—レポートの得点と作成時間の自己評価にメタ認知と自己効力感が及ぼす影響—, 第13回初年次教育学会大会プログラム, 28-29.

## コロナ禍における1年ゼミの対応と評価

### —科目責任者の立場より—

○福井英次郎（明海大学）

#### 1. はじめに

本稿では、コロナ禍での1年ゼミの運営で生じる問題とその対応を、教室内と科目責任者の両面の立場から検討する。報告者は1年ゼミの担当であるとともに、1年ゼミの内容を決定し、他の教員に指針を示す科目責任者である。グループワークなどの制限がかかるといった教室内の対応とともに、遠隔授業の開始により対面授業を前提としたシラバスを変更するといった科目責任者としての対応も担う立場である。コロナ禍での1年ゼミの運営に対して、問題と実際の対応、そして課題を提示したい。

なお報告者の所属している大学では、1年ゼミ科目の正式名称は、「フレッシュパーソンセミナー」だが、本稿では1年ゼミと呼ぶことにする。

#### 2. 1年ゼミの位置づけ見出し

最初に、勤務校での1年ゼミの位置づけを説明する。勤務校は担任制を採用しており、全学生に対して1人の教員が担任になる。1年ゼミの担当教員は、そのクラスの1年生の担任となり、この科目を教育するだけでなく、大学での学び全般や部活・サークル活動に至るまで、大学生活全般の相談や支援を担うことになる。

また勤務校は、議論し熟慮を促すための科目を、必修科目として各学年に1つずつ配置している。1年ゼミはこのための科目として位置づけられている。内容を理解し暗記していくことを中心とした高校までの学びから、自分で問題を発見し、自分で解決法を探して

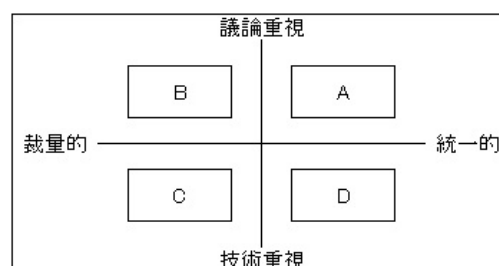
いく大学への学びへ繋ぐための科目である。

このように、勤務校の1年ゼミは、大学で学習を継続することを支援しつつ、高校から大学への学びへと橋渡しをしていくことが求められている科目である

#### 3. 1年ゼミの類型

ここで1年ゼミを類型化し、勤務校の1年ゼミの位置づけを確認する。1年ゼミでは、ワードやエクセル、パワーポイントなどの使い方から教えていく技術重視型と、学生間の議論やそれを踏まえて自分の意見を述べることに重点を置く議論重視型がある。もちろん二者択一ではないが、どちらに重きを置くのかという違いはある。勤務校の場合、技術重視型の基礎科目があることもあり、議論重視型である。

また、複数の教員で担当する場合に、担当教員がどの程度まで授業内容を自由に決めることができるのかという点でも分けることができる。勤務校では、1年ゼミは6クラスあり、それぞれ別の教員が担当している。ただシラバスは統一されており、アカデミック・スキルズに関する教科書、実際に読む課題本は同一である。これらより統一的に運営される科目である。



■図1 1年ゼミの分類

これらより勤務校の1年ゼミは、図1のAに位置しているといえる。

#### 4. コロナ禍での状況の変化

2021年度は、4月上旬は通常通りに授業が開始されたが、4月中旬以降には東京都、次いで千葉県でも、まん延防止等重点措置などが出された(表1)。これを受けて、千葉県にある勤務校では、当初は通常授業であったが、4月後半より対面授業と遠隔授業を隔週で交互に実施する形式となった(表2)。1年ゼミは4月末から6月初めまでの1カ月間は隔週での対面授業であった。しかし大学生活に慣れていない1年生を考慮したこともあり、6月以降は1年ゼミだけは毎週、対面で授業を実施することになった。

■表1 東京都と千葉県のコロナ対策の状況

| 都県名 | 期間          | 措置         |
|-----|-------------|------------|
| 東京都 | 4月12日～4月24日 | まん延防止等重点措置 |
|     | 4月25日～6月20日 | 緊急事態宣言     |
|     | 6月21日～7月11日 | まん延防止等重点措置 |
| 千葉県 | 4月21日～      | まん延防止等重点措置 |

\* 2021年6月28日現在

■表2 大学の授業形式の変化

| 期間         | 授業形式                       |
|------------|----------------------------|
| ～4月24日     | 通常の時間割で全面对面授業              |
| 4月26日～6月5日 | 対面授業と遠隔授業を隔週で実施(1年ゼミも同一)   |
| 6月7日～      | 対面授業と遠隔授業を隔週で実施(1年ゼミは対面授業) |

#### 5. 1年ゼミの対応

コロナ禍の中の授業ということで、密を避けるために、教室内のグループワークは積極的には取り組むことができないなどの影響があった。そのため密には気を付けつつ、教室全体で議論していく方法を模索した。

前述したように、1年ゼミの担当教員には、この科目を教える役割だけでなく、クラス担任として大学生活を支援していく役割もある。実際に、コロナ禍では、慣れない遠隔授業への対応の方法などの相談が増加した。これら

自由研究発表：ジェネリックスキル／授業デザインはシラバス作成時には想定されていないが、授業内でも支援していく必要がある。問題を抱えている学生の数や抱えている問題の範囲はクラスによって異なっていたため、担当教員には、学生対応を第一とし、それを踏まえて授業を進めるようお願いした。また内容を終わらせることを優先するのではなく、教室内での議論を大事にしてもらうようにしてもらった。これらより、クラス状況に即した形で進めていくことになった反面、授業進度はクラスごとに異なることになった。

#### 6. 評価と課題

このように、当初は図1のAを予定していたが、全体の枠組は変更していないものの、B側と移行することになった。現実的に即して柔軟に対応したという点では積極的に評価できるだろう。対応できた理由として、次の点が指摘できる。第1に、優先順位を明確化したことである。1年ゼミでは、きめ細かく対応をして、学びを継続することを最重要視した。その結果、対面で予定されていた内容を全て終わらせることだけを優先するのではなく、内容を精査して、議論の時間を確保する

ようにした。第2に、担当教員間での連絡が密であったことである。頻繁に連絡しあうことで、科目責任者と担当教員の間のギャップが最小限に抑えられた。その結果、クラスごとに対応したとしても、目標自体はぶれずに維持することができた。

一方で、学年で統一的に対応していくという当初の予定からは揺らいだという評価もできる。この点については、特に2021年度の後期での対応が、今後、重要になってくると思われる。

## オンライン授業で培ったノウハウを用いた対面授業についての実践報告

### ——一年生向け統計学の授業を題材に——

○寺島哲平（常磐大学）

#### 1. はじめに

2020 年度は新型コロナウイルスの感染拡大を防止するため、各大学はオンライン授業を実施した。筆者の所属する常磐大学も同様である。それに対して 2021 年度は、新型コロナウイルスの感染拡大を防止するため、密にならないような座席配置のうえで、従来の対面授業へと戻った。しかし、オンライン授業から対面授業へと戻ったとはいえ、オンライン授業を実施したことで得た経験を、対面授業にも応用したほうが、より良い授業を実施することができるだろう。そこで本報告においては次の三つの事例について報告する。

- Google Classroom を用いた出欠や課題提出状況の管理
- データ分析を MS-Excel で行うためのオンデマンド教材の作成
- データ分析を説明する YouTube チャンネルへのリンク

#### 2. オンライン授業についての評価

吉田・上田[1]は、スタディ・スキル科目をオンライン(オンデマンド型)で実施した。そのうえでオンデマンド型授業の成果や課題を整理・検討した。

オンデマンド型授業のメリットとして「動画であると、聴き逃しがなかったため、自分のペースで学ぶことができた」や「いつもよりさらに配布資料の説明も細かく書かれていて分かりやすかった」といった学生からのコメントを紹介している。

一方、デメリットとして「リアルタイム性がないことに起因する問題が浮き彫りになっ

た」と述べている。具体的には、その場で質問がしづらいことや、教室や Web ミーティングルームのように集うことができる共有の場所もないことから学生が不安を感じたと述べている。

吉田・上田[1]が挙げているデメリットの「リアルタイム性がないことに起因する問題」については、(一部の科目は除き)2021 年度において対面授業を実施するため、特に工夫をしなくても解決できるだろうと考えた。また吉田・上田[1]が紹介したメリットについては賛成である。そこで 2020 年度のオンライン授業で培ったノウハウを、2021 年度の対面授業でも実施することにした。

#### 3. オンライン授業のノウハウを対面授業へと応用した事例

新型コロナウイルス以前の 2019 年度において、筆者の所属する常磐大学において ICT 環境は貧弱だったといえる。

- パソコンを購入するように学生へ周知しなかった
- 一部の教室でしか Wi-Fi へ接続できなかった

しかし、2021 年度からは対面授業だが、一部の科目は引き続きオンライン授業として実施する。そのため ICT 環境は次のように変化した。

- 2021 年度新入生からノートパソコンを購入するように促した。
- 主な教室には Wi-Fi 環境を整備して、インターネットへ接続できるようになった。

この結果、一年生向け科目と限定的ではあるが、ノートパソコンを持参して LMS (Learning Management System) である Google Classroom を対面授業においても利用可能となった(図 1)。この Google Classroom 上で「授業資料の掲載」や「出欠管理」、「課題提出」などを行っている。



図 1. Google Classroom の画面

今回、報告する授業は一年生対象の必修科目「統計の基礎」である。この「統計の基礎」は、統計学を教える授業というより MS-Excel を用いたデータの分析方法について学ぶ授業である。高校のときに MS-Excel の操作経験はあるだろうと考えていたが、学生から「MS-Excel を使ったことがないので、ゆっくりと説明して欲しい」というコメントがあった。

「統計の基礎」は 200 人以上収容できる教室で行っているため、プロジェクターに映し出された操作画面を、後方の座席から視聴できるか不安である。

そこで MS-Excel の操作方法を撮影し、Google Classroom 上で視聴できるようにした(図 2)。



図 2. オンデマンド型の解説動画

最後に授業内容について説明する。高校までに慣れ親しんできた記述統計については、

自由研究発表：ジェネリックスキル／授業デザイン

既に専門用語や概念などを理解している学生が多いため、MS-Excel による操作方法を中心に教えれば良かった。

一方、推測統計については多くの学生にとっては未知の分野である。そのため「帰無仮説」や「対立仮説」、他にも  $t$  値や  $p$  値、有意水準などの専門用語や概念などを理解している学生は少ない。これらの専門用語や概念を理解できるような授業資料を作成できれば良いが、時間的余裕はなかった。そこで、推測統計に関する専門用語や概念をアニメーションで説明する YouTube チャンネルへのリンクを掲載した[2]。また MS-Excel の基本操作(絶対参照など)についても YouTube チャンネルを紹介した。



図 3. YouTube による解説動画

#### 4. さいごに

このように大学の ICT 環境が改善されたため、オンライン授業で培ったノウハウを応用した対面授業が実施可能となった。しかし学生からの評価が分からない。そこで授業最終週にアンケート調査を実施する。

#### 参考資料

[1]吉田由似, 上田一紀, 『オンライン(オンデマンド型) 授業の実践とその課題に関する一考察：初年次教育、及び情報教育におけるスタディ・スキル科目を題材に』, 12 巻, pp.71-85, 関西大学高等教育研究(2021)

[2]スタビジ by ウマたん, 『【8 分で簡単に解説】ビジネスで使える統計的検定の基礎!』, <https://www.youtube.com/watch?v=x8H1vVhGVZA>, 取得日：2021 年 6 月 28 日

## 全学必修初年次科目「基礎コンピュータⅠ/Ⅱ」におけるコロナ禍の対応について

### ——知識・理解の確認としての全クラス共通試験の実施を中心に——

○笹金光徳・成合智子・中澤陽平（高千穂大学）

#### 1. はじめに

全学必修初年次科目として設定されている情報教育基礎科目「基礎コンピュータⅠ/Ⅱ」に関し、コロナ禍における運用上の実情と工夫について、特に知識・理解の確認としての全クラス共通試験の実施を中心に発表する。

#### 2. 当科目の変遷と位置付け

大学における一般教養としての情報教育の必要性が叫ばれる中、当初選択科目としてスタートした「情報科学」が、「基礎コンピュータ」という名称で全学必修通年科目に格上げされたのは、本学がまだ1学部2学科制で高千穂商科大学という大学名であった1994年度である。登壇者は1991年度年からこの流れに非常勤講師として参加し、2001年度から専任教員として担当し、現在に至っている。一方、科目の方は、2005年度のセメスター化に伴い、現在は春学期が「基礎コンピュータⅠ」、秋学期が「基礎コンピュータⅡ」という半期必修科目になっている。

これまでの数回のカリキュラム変更に伴い当該科目のカリキュラム上の位置付けは微妙に変化しており、さらに具体的な授業内容も時代とともに変化しているが、「大学教育全体における基礎科目として4年間のアカデミックトレーニングを円滑かつ効率的に行えるための情報リテラシーの習得」という本科目の基本な授業目的は変わっていないと考える。

現在、各学期の実習を伴う講義として、春学期の「基礎コンピュータⅠ」では「基礎の基礎」として、PCの基本操作、WWWとメール、ワープロ(Word)と表計算(Excel)の基礎を教えている。一方、秋学期の「基礎コンピュータⅡ」では、「基礎の応用」として、プレ

ゼンテーションツール(PowerPoint)の活用、情報検索の基本的スキル、Word、Excelの少し発展的な応用、各ツール間の連携について教えている。

さらに、両学期の両科目において、情報倫理についての知識・理解を深める時間を設け、情報スキルと共に情報モラルも習得するということを目標にしている。

#### 3. 全クラス共通試験実施の経緯

必修科目「基礎コンピュータ」が設置されてから10年以上は、建前上共通のシラバスは存在するものの、各学期末の定期試験の有無及び内容、評価基準は各担当教員に一任されていた。しかしながら、教育内容の共通化、成績評価の適正化、クラスごとの不公平感の解消等の理由から、全クラス共通の試験を行うべきだという大学内の方針が発せられ、2007年度より全クラス共通テストを、各学期の定期試験期間中に「統一テスト」と称して一斉に実施することになった。

「統一テスト」の対象は「基礎コンピュータⅠ/Ⅱ」ではなかったもので、多くの共通科目で数年間行われたが、その後形骸化し、最近でも統一テストが行われるのは、登壇者の担当する情報発展科目も含めごくわずかな科目だけである。

「統一テスト」の実施には賛否があると想像するが、登壇者自身は、各担当者が科目全体の方針から教育内容を逸脱させないための歯止めとしても機能すると考える。ただし、成績評価の基準まで統一テストの点数で明確に決定してしまうのは、かえって不公平感を招くという認識を持っている。

このような状況から、コロナ禍にあつて、

一斉の「統一試験」が不可でも何らかの工夫をしながら、「共通試験」を実施したいと考えた次第である。ただし、いきなりそう考えたわけではなく、その伏線として、当初から、2020年度はオリンピック開催の影響で、夏季休業開始を早めるため定期試験期間を設定しないことが、2019年度のうちに決定されていたので、何らかの方法で共通試験の実施を実現したいと考えていたということがある。

#### 4. コロナ禍における当科目の対応

昨年度、当科目は、常勤である発表者の3名のほかに非常勤講師3名が担当しており、19クラスに及ぶが、そのうち2クラスは半年ずれている再履修専用クラスのため、17クラスが今回の研究発表の対象である。

昨年度は、「基礎コンピュータⅠ/Ⅱ」全クラスで全面的にオンライン授業を行うよう大学側から指示された。ただし、実施形態を、リアルタイム同期型、オンデマンド型のいずれにするかは、担当者に委ねられた。

その結果、登壇者の担当する2クラスだけが同期型(Meet+録画配信)で、残りの15クラスはオンデマンド型を主体に実施された。

なお、本学では残念なことにLMSが実質上導入がなされておらず、コロナ禍が進行する中で、Googleクラスルーム以外の選択肢がなかったため、オンライン授業の主要部分はGoogleクラスルームで行い、担当者によっては、別途、法人契約したZoomを同期型で利用するという形態がとられた。さらに、Microsoft 365のライセンス取得も教職員と学生になされたので、Teamsの利用も可能となったが、学内での使用率は高くない。

#### 5. 共通試験の実現に向けたポイント

これまで述べた状況から、一斉にテストを行うことが不可能な状況の中で、共通テストを行うための方法を模索した。

結論としては、Google フォームの潜在機能

を活用することで何とか実現できた。そのポイントは、以下の3点である。

- (1) Google フォームを連結することで、他のアドインを併用せずに試験実施時間を厳格に計測することができたので、時間オーバーした場合には減点することを事前に伝えられた。
- (2) Google フォームが保持している「質問の出題順をランダムに変える機能」と「選択肢の順序をランダムに変える機能」を併用して、他の受験者と打ち合わせながら解答することを困難にした。
- (3) 試験時間を短くし、問題量を多くすることによって、情報検索しながら数多く解答することを困難にした。

もちろん、厳密にいえばこれによってすべての不正を防止できるわけではないが、学生との信頼関係および、施設・設備の現状からこれ以上の防止策は行わなかった。

#### 6. 共通試験実施結果の一部報告

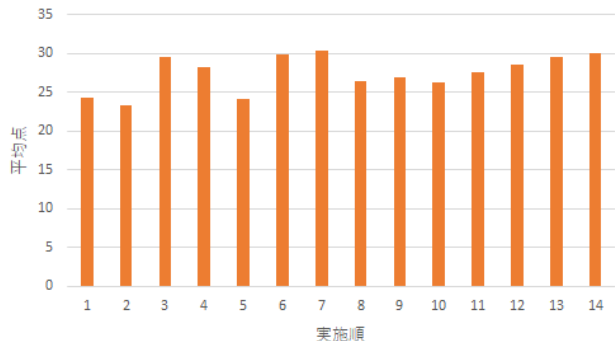


図1 2020 年春学期共通テスト平均点の実施順ごとの変化

図1は、2020年度春学期の17クラスで実施した共通試験(42点満点)の平均点の違いを実施順に表示したものである。なお、実施順が14までしかないのは、3クラスの時限が重なっているためである。

詳細は省略するが、試験問題が漏洩し、実施順が後ろになるほど平均点が上昇するという望ましくない傾向は出ていない。

発表では、さらに多くの情報を2021年度春学期に至るまで報告する予定である。



## 学生相談室相談員によるアフターコロナの適応支援教育

○佐藤枝里（中部大学）

### 1. はじめに

学生相談室の初年次学生支援では、相談活動の主軸となる個別面接に加え、①学科必須科目1単元「社会生活の基礎・大学生の対人関係」の出前授業、②UPIを含む質問紙の実施とハイリスク学生の呼出面接、③相談員の研修を受けた上級生サポーターによる一人暮らし学生対象の心理教育グループが実施されてきた（佐藤, 2020）。コロナ禍で、質問紙の実施と心理教育グループの運営は最新鋭技術が物理的距離を超えて対人間のコンタクトを繋ぐこととなった。

2020年度は、「友達ができない」「尊敬できる人との出会いがない」といった1年生からの対人関係構築上の訴えが聞かれ、例年ほぼ均等であった利用者数の学年比率は、1年生の利用率が他学年を大きく上回る結果となった（渡邊・佐藤, 2021）。

ワクチン接種が進みつつありアフターコロナ時代の到来が予測されるなか、2022年度に向け初年次教育科目参考テキストの改訂が計画された。2011年度の初版から2021年度版までの11年間のテキストの推移を授業内容と共に3期に分けて振り返り、第4期となる2022年度版の改訂点を考察した。

### 2. 第1期

学長から新入生にテキストを贈呈するというスタイルは初版からの伝統である。テキストは職員によるスケッチが表紙に用いられた2色刷B5版で、著者17名のうち5名が国際交流やキャリア、大学事務局、学生部といった学生対応部署の事務職員であった。全14章、全145頁構成で、相談員による執筆は第

12章「大学生の対人関係」（10頁）、第13章「1年生特有のストレスと心理的特徴」（10頁）、14章「おわりに」（4頁）であった。全編を通じてコラムが掲載され、第13章には「先輩からのメッセージ」として先輩から新入生に向けてのアドバイスが記されていた。イラストは漫画研究会の学生による1つのみであった。

相談員が担当する出前授業では、新入生に必要な適応支援に関する知識を共感が得やすい形で伝え、個々人の受け取り方の「多様性」と新入生の心配事の「共通性」の理解を示すことでの不安軽減促進が目指された（佐藤, 2019）。加えてコミュニケーションの基盤となる傾聴実習を体験してもらうことと援助要請の重要性が示されてきた。

### 3. 第2期

2014年度版から初年次教育科による大幅なテキスト改訂が行われた。プロデザイナーによる統一感のあるイラストが多用された多色刷A4版となった。これまで本編に組まれていた「安心安全な学生生活を送るために（以下、安心安全、と記す）」の部分に加筆修正されたものが巻末に資料として移された。相談室員が出前授業で担当する内容も、第14章「大学生の対人関係（社会生活の基礎）」17頁に集約された。

毎年実施される教員アンケート結果から、「安心安全」部分の扱いが大きく変わった。コンパクト化が重要視された時にはテキストは全67頁となり「安心安全」部分は別刷となった。現在のテキストは合本化により全90頁構成である。「安心安全」部分には

相談室で受けた相談案件も盛り込まれ注意喚起に繋がった。「失敗することを恐れずに挑戦して欲しい」というテキスト本文から派生して出前授業で「失敗できる権利」

(沖, 2014) を取り上げるなど、テキスト内容を基盤に今日的なトピックスや1年生に必要な視点を盛り込み、在学中に限らず社会人になってからも生かせる心理臨床の知見の発信を図っていた(佐藤, 2019)。

#### 4. 第3期

初年次教育科が多様性に配慮し2017年度版から「ライフプランとキャリアデザイン」の章に記された結婚関連イラストの一部が差し替えられた。相談活動で得られた知見の全1年生への還元が求められ、学生達の困り感をもとにプログラムが編まれた。また学生のユニバーサル化やハラスメント防止を意図したコメントシートの作成が行われた(図1)。2020年度のパンデミック発生によりテキストに記載されたWHOの「ライフスキル」が焦点化され学生達が抱えるストレスへのコーピング、リラクセーション・スキルを通しての心理的支援が授業の主目的となった。

#### 5. まとめ

コロナ禍により、直接性や接触が有していた価値、対面することの豊かさといった価値は封印され、オンデマンド授業により学修する場所という座標は意味を失いかけた。身体移動に伴う距離や時間は無化され、それは「今・ここ」という時空間の制約からの解放を意味したかのように見えた。今回計画されている改訂では、①インフォグラフィックやイラストといった視覚情報の効果的な取入れに加え、②ハラスメント防止、③LGBTQ+といった多様性の問題を扱い、④遠隔や対面といった授業形式の並存・切替えバランスの支援、⑤デジタル化が進む中での身体性や共在性の意味についての知見が必要となると考えた。

スタートアップセミナー「社会生活の基礎・大学生の対人関係」コメントシート (回収します)

(1) 気持ちのスターティング：自分の気持ちを客観的にみる練習「不安や緊張などネガティブな気持ちを最大10とする？あてはまる数字を○で囲もう」

初めて大学に来た日の気持ち 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10  
今 (授業開始時) の気持ち 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

(2) コミュニケーションスタイル：それぞれの項目を読み、あてはまる項目の右の○にチェック。○の数合計を記入してください。  
①から④までで○が多かったものを「自分のタイプ」として□にチェックを入れてください。  
「苦手な相手のタイプ」を選択し、□にチェックを入れてください。

|    |                        |    |                        |
|----|------------------------|----|------------------------|
| ①  | 1 エネルギーに満ち溢れている(野心的)   | 2  | 1 人に話しかけるのが好き          |
| 2  | 2 自信がある                | 3  | 2 計画を立て、その通りに行動するのが好き  |
| 3  | 3 向上心がある               | 4  | 3 細きこと、些細なことに言われる      |
| 4  | 4 人間関係より仕事を優先したい       | 5  | 4 断れないで済むようにしたい        |
| 5  | 5 正義感や情熱               | 6  | 5 意見を言われるのを嫌う(拒絶)      |
| 6  | 6 知識、情報、スキルを重視する       | 7  | 6 新しい世界や未知の世界が好き       |
| 7  | 7 仲間や友達と遊ぶのが好き         | 8  | 7 場や状況の雰囲気が好き(好む)      |
| 8  | 8 人からコントロールされるのが嫌い(拒絶) | 9  | 8 断りやすくて断る理由を思いつくのが好き  |
| 9  | 9 リーディングや読書の好き         | 10 | 9 断りやすくて断る理由を思いつくのが好き  |
| 10 | 10 結果や成績を重視する          | 11 | 10 断りやすくて断る理由を思いつくのが好き |
| 11 | 11 他人に自分の価値を認められたい     | 12 | 11 断りやすくて断る理由を思いつくのが好き |
| 12 | 12 人に優しくしたい            | 13 | 12 断りやすくて断る理由を思いつくのが好き |
| 13 | 13 人の気持ちを理解するのが好き      | 14 | 13 断りやすくて断る理由を思いつくのが好き |
| 14 | 14 断りやすくて断る理由を思いつくのが好き | 15 | 14 断りやすくて断る理由を思いつくのが好き |
| 15 | 15 断りやすくて断る理由を思いつくのが好き | 16 | 15 断りやすくて断る理由を思いつくのが好き |
| 合計 |                        | 合計 |                        |

|    |                        |    |                        |
|----|------------------------|----|------------------------|
| ③  | 1 人を助けるのが好き            | 2  | 1 断りやすくて断る理由を思いつくのが好き  |
| 2  | 2 しつこく頼むのが嫌い(拒絶)       | 3  | 2 断りやすくて断る理由を思いつくのが好き  |
| 3  | 3 断りやすくて断る理由を思いつくのが好き  | 4  | 3 断りやすくて断る理由を思いつくのが好き  |
| 4  | 4 断りやすくて断る理由を思いつくのが好き  | 5  | 4 断りやすくて断る理由を思いつくのが好き  |
| 5  | 5 断りやすくて断る理由を思いつくのが好き  | 6  | 5 断りやすくて断る理由を思いつくのが好き  |
| 6  | 6 断りやすくて断る理由を思いつくのが好き  | 7  | 6 断りやすくて断る理由を思いつくのが好き  |
| 7  | 7 断りやすくて断る理由を思いつくのが好き  | 8  | 7 断りやすくて断る理由を思いつくのが好き  |
| 8  | 8 断りやすくて断る理由を思いつくのが好き  | 9  | 8 断りやすくて断る理由を思いつくのが好き  |
| 9  | 9 断りやすくて断る理由を思いつくのが好き  | 10 | 9 断りやすくて断る理由を思いつくのが好き  |
| 10 | 10 断りやすくて断る理由を思いつくのが好き | 11 | 10 断りやすくて断る理由を思いつくのが好き |
| 11 | 11 断りやすくて断る理由を思いつくのが好き | 12 | 11 断りやすくて断る理由を思いつくのが好き |
| 12 | 12 断りやすくて断る理由を思いつくのが好き | 13 | 12 断りやすくて断る理由を思いつくのが好き |
| 13 | 13 断りやすくて断る理由を思いつくのが好き | 14 | 13 断りやすくて断る理由を思いつくのが好き |
| 14 | 14 断りやすくて断る理由を思いつくのが好き | 15 | 14 断りやすくて断る理由を思いつくのが好き |
| 15 | 15 断りやすくて断る理由を思いつくのが好き | 16 | 15 断りやすくて断る理由を思いつくのが好き |
| 合計 |                        | 合計 |                        |

自分のタイプ □ ①現実重視 Driving □ ②感覚重視 Expressive □ ③協調重視 Amiable □ ④思考重視 Analytical

苦手な相手のタイプ □ ①現実重視 Driving □ ②感覚重視 Expressive □ ③協調重視 Amiable □ ④思考重視 Analytical

(3) 気持ちのスターティング：自分の気持ちを客観的にみる練習「不安や緊張などネガティブな気持ちを最大10とする？あてはまる数字を○で囲もう」

今 (授業終了時) の気持ち 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

(4) 本日の授業の感想を記入してください(例えば、印象的だったこと、もっと知りたかったこと、気づいたこと、楽しかったことなど)。

学号番号 \_\_\_\_\_ 氏名 \_\_\_\_\_

図1 2021年度コメントシート

#### 【参考文献】

- 中部大学人間力創生総合教育センター初年次教育プログラム編 2014 社会生活の基礎(大学生の対人関係). スタートアップセミナー参考テキスト, 49-65.
- 中部大学初年次教育科目ワーキンググループ編 2011 大学で学ぶ スタートアップセミナー参考テキスト 2011.
- 沖 大幹 2014 東大教授. 新潮新書.
- 佐藤枝里 2019 新入生支援授業に学生相談室の知見を活かす. 初年次教育学会第12回大会発表要旨集, 98-99.
- 佐藤枝里 2020 学生相談室に置ける遠隔授業による新入生支援. 初年次教育学会第13回大会発表要旨集, 42-43. 第13回大会発表要旨集, 42-43.
- 渡邊素子・佐藤枝里 2021 2020年度(令和2)年度学生相談室利用状況. 中部大学学生相談室活動報告書第4号(印刷中).

## 「読み合う」ことで文章はどう変化するか

### —非対面式ピア・レスポンスの試みから—

○中林律子（愛知淑徳大学）

#### 1. はじめに

互いの文章を読み合い意見や情報を交換するピア・レスポンスについては、その効果が多く の 先行研究で指摘されている。非対面でのピア・レスポンスにはどのような効果があるのだろうか。本稿では非対面で他者の文章を読みコメントをし、自身へのコメントを参考に推敲を行うという活動を通し、初年次生が他者の文章のどのような点に着目し、どのように推敲を行うのかを分析する。

#### 2. 先行研究

ピア・レスポンスは学生同士が互いに書いた文章を読み合い、話し合いながら検討を行う活動であるが、書いたコメントを伝えるという活動方法もある（池田・舘岡 2007）。石元・末利（2018）では対面で意見交換を行うことが難しい実態を踏まえ、ふせんにコメントを付す形で意見交換を行った。その結果、大半の学生がこの活動の意義を実感できたと回答したという。さらに、対面での活動では褒め合う傾向が強くなる傾向があるが、この活動では「改善すべき点」についても記述させたこともあり、褒めるだけといった表面的なやりとりで終わることはなかったと報告している。このことから、非対面であっても効果的なピア・レスポンスは可能だと考えた。

#### 3. 方法

初年次生 18 名を対象とした初年次教育科目内で「ポイントを絞って自己紹介を書く」という活動を行った。『これなら書ける！文章表現の基礎の基礎』（山本他，2018）を用い、以下の①～④の手順で自己紹介文を作成させた。その後、学生を 6 人ごとのグループに分

け、非対面のピア・レスポンスを行った（⑤、⑥）。コメントは相手の推敲に役立つように書くことを心がけるよう指示した。③以降はすべて Microsoft Teams を使ったオンデマンド方式で実施した。

- ① アイディアを出す。
- ② アイディアの中から取り上げたいトピックを決め、必要な情報を足す。
- ③ アウトラインを考える。
- ④ アウトラインに沿って第 1 稿を書く。
- ⑤ 互いの文章を読み、「書いた人への質問」「書いた人はどのような人だと感じたか」「よかったところ」「改善すべきところ」の 4 点についてコメントする。
- ⑥ 自身へのコメントをもとに推敲を行う。

以下では⑤で収集したコメントのうち「よかったところ」「改善すべきところ」についてどのような項目への言及が多かったのかを見たのち、推敲に見られた傾向を報告する。また、コメントがなされたにもかかわらず改善が見られにくかった項目についても述べる。

#### 4. 結果と考察

##### 4-1 他者へのコメントの傾向

表 1 は「よかったところ」、表 2 は「改善すべきところ」として 1/3 以上の学生がコメントをした項目を示す。「全体的にわかりやすかった」など、何について言及しているのか不明なコメントは除外した。

「よかったところ」については「文・表現の上手さ」以外はすべて内容面へのコメントである一方、「改善すべきところ」については文や表記の不適切さといった形式面へのコメントが目立つ。「よかったところ」として多く

の学生が「内容の詳しさ」に関するコメントをしているが、「改善すべきところ」としても多くの学生が「説明が不十分」というコメントをしていることから、具体性の高さに着目した学生が多いと言える。構成に関するコメントをした学生も多いが、これは文章を書く際に上記①～③の手順を踏んだことが大きいと思われる。ただし、実際に構成に大きな問題のある文章はなかったが、「改善すべきこと」として挙げられた問題点のほとんどは段落の長さのバランスに関するものであった。

表1 「よかったところ」として挙げられた項目

| 項目             | 人数 |
|----------------|----|
| 内容の詳しさ         | 16 |
| 構成のわかりやすさ      | 15 |
| 文・表現の上手さ       | 10 |
| 伝えたいことの明確さ     | 8  |
| 導入部の工夫（内容の予告等） | 7  |
| 心情描写の豊かさ       | 7  |
| タイトルの面白さ       | 7  |

表2 「改善すべきところ」として挙げられた項目

| 項目                  | 人数 |
|---------------------|----|
| 文法・表現等が不適切（ねじれ文を含む） | 16 |
| 説明が不十分              | 14 |
| 構成（各段落のバランスが悪い等）    | 11 |
| 表記のゆれ・不適切さ          | 8  |
| 読点が多すぎる・少なすぎる       | 8  |
| 1文が長すぎる             | 8  |
| 形式の誤り（「」の不適切な使用等）   | 7  |

#### 4-2 推敲の傾向

表3は何名の学生がその項目に関する修正を行ったのかを示している。多くの学生が「より効果的な語・表現・文への修正」、「具体性を高める内容の追加」を行ったが、この他にも「最終段落でのまとめの内容の変更（4名）」、「トピックの変更・追加（3名）」など、より内容面を充実させるための修正が多く見られた。内容面については「よかったこと」としてのコメントが多かったことから、多くの学

自由研究発表：協同学習・グループワーク生が他者の文章を読みコメントをするという活動を通して、他者の文章の良いと感じたところを自身の推敲に生かそうとしていたと言えるだろう。

表3 1/3以上の学生が修正を行った項目

| 項目                 | 人数 |
|--------------------|----|
| より効果的な語・表現・文への修正   | 17 |
| 具体性を高める内容の追加（文レベル） | 15 |
| 語・表現等の削除           | 13 |
| 不適切な語・表現・文の修正      | 13 |
| 読点の挿入・削除           | 12 |
| 語・表現等の追加           | 11 |
| 表記の修正              | 10 |
| 内容の削除（文レベル）        | 9  |

#### 4-3 十分な改善が見られなかった項目

「改善すべきところ」では形式面に関するコメントが多く見られ、表3からも学生が形式面にも十分注意を払って推敲を行ったことが窺える。しかし「ねじれ文」や「読点が少ない」「一文が長い」といった問題については、コメントで指摘されても効果的な修正となっていないケースが散見された。

#### 5. おわりに

非対面であっても、学生は他者の良いところを積極的に取り入れ、コメントを推敲に生かしていることがわかった。⑤で行った他の質問についても推敲にどう影響しているのか今後検討したい。

#### 参考文献

- 池田玲子・舘岡洋子(2007)『ピア・ラーニング入門 創造的な学びのデザインのために』ひつじ書房
- 石元みさと・末利容子(2018)「非対面式ピア・レスポンスを取り入れた大学生への小論文指導—他者へのふせんを用いたコメントと個の文章の変化を中心に—」『東京学芸大学国語教育学会研究紀要』14、pp.12-22.
- 山本裕子・本間妙・中林律子(2018)『これなら書ける！文章表現の基礎の基礎』ココ出版

## 大学の第3の使命「社会貢献」を実感できる初年次教育

### ——地域連携商品開発グループワークの実践——

○和田重雄・田端健治・西尾信一・井上祐一・齋藤博・安田高明（日本薬科大学）

#### 1. はじめに

大学など高等教育機関に入学する学生は、大変多様であり、その基礎学力や学習に対する意欲や動機づけ、物事への取り組みなどに個人差が大きい。そのような学生に対して、速やかに大学での生活に移行できるように行われているのが初年次教育である。その目的や方法も多様であり、補習教育型、スキル・方法論型、オリエンテーション型など各大学で工夫を凝らして実施されている(藤田、2002)。

本学では次の6項目を指標とし、主に通年1単位のフレッシュマンセミナーという科目で初年次教育を行っている。

- ①「惻隠の心」の涵養
- ② 人間関係の醸成(絆の構築)
- ③ 医療人としての意識の涵養
- ④ 科学リテラシーの向上
- ⑤ 基礎学力の定着
- ⑥ 自律的・自立的大学生活の確立

この中で、特に②の人間関係の醸成を主眼として、例年2泊3日の宿泊型のフレッシュマン研修を行ってきたが、COVID-19の感染拡大により、2020、2021年度は実施できていない。

19世紀に示された「フンボルト的大学観」は、少数エリートに対する教育を想定した研究と教育を重視する考えである。1963年クラーク・カーは、現代の大学を、教育・研究・社会サービスの多機能を持ったものという考えを提示した。大学観も時代や社会状況に応じて変貌していくべきものと考えられる。日本の中央教育審議会は、2005年(平成17年)に「大学は教育と研究を本来的使命としているが、同時に、大学に期待される役割も変化しつつあり、…略…、近年では、

国際協力、公開講座や産学官連携等を通じた、より直接的な貢献も求められるようになっており、こうした社会貢献の役割を、言わば大学の「第三の使命」としてとらえていくべき時代となっているものと考えられる。」と答申しており、さらに、2012年(平成24年)には、「地域社会や企業等と大学は、プログラムとしての学士課程教育の質的向上のための、地域・企業参画型の新たな連携・協力に取り組むことが重要である。」と答申しており、地域との連携も含めた大学として社会貢献活動の推進をさらに提示している。すなわち、社会貢献の要素を学生への教育としてどのように取り組むか検討する必要がある。

本学は、多くの近隣市区町村や企業、教育機関等と連携を結んでおり、様々な社会貢献活動を行っている。その中で、各自治体や企業の特色を活かした飲食物やハンドクリームなどの衛生商品を開発してきた。その多くの例で、学生が携わっている。

この商品開発にスポットをあてて、今年度の宿泊型の研修の代替行事として、地域に根ざした商品を開発することをテーマとしたグループワーク(以下GW)を行うこととした。本稿では、この取り組みについて報告する。

#### 2. グループワーク(GW)の実施方法

4月の第3週(フレッシュマン研修実施予定日)に商品開発のGWを実施した。緊急事態宣言が発令されたため、すべてオンラインでの開催となった。実施概要を次に示す。

- 1) 4月14日:GWの内容(テーマ)を提示
- 2) 4月21日 1限:地域連携、GWの実施方法の説明

3)4月21日2限:班ごとに分かれ、名産品の調査と商品開発の検討。発表準備

4)4月22日1限:商品開発検討、発表準備

5)4月22日2限:発表会、ピア評価

各班は5~6名とし、班活動はMicrosoft社 Teamsの会議で実施した。

2)では、本学地域連携室の職員により大学の3つの使命の話、地域連携とそこで開発された商品などについて説明が行われた。つづいて、具体的なGWの進め方の説明を行った。GWの進め方は、次の通りである。連携している市町村の中からいくつかを選び、その地域の名産品を調査した後、名産品を利用した商品案を検討し、それを発表し、学生どうして評価する。

3)では、メンバー全員が無理なく参加して討論が進められるような工夫を加えた。すなわち、対象とする自治体や商品種別を班の中で分担し、メンバー全員が少なくとも1つは開発商品の案を提示・説明できるようにし、それらをお互い比較検討して絞り込む、あるいは組み合わせる班としての新商品を提示するという方法をとった。

5)では、4つの会場に分かれ、1班5分以内で発表を行った。評価はMicrosoft社のFormsに入力させて評価し、その集計結果も伝えた。

### 3. グループワークの実施結果・考察

GWは概ねスムーズに進行していた。学生の提示例として、キウイと紅花が名産となる自治体との連携商品として、両者を混ぜて作ったジャム(美魔女ジャムと命名)や、山間部の自治体の場合は、地域の特産品をちりばめた弁当を、地元の木材で作成した弁当箱に詰め、名産の絹織物の風呂敷で包むというような名産品を複数組み合わせたものなどの案が出てきた。食品系の商品では、食品成分の効能をアピールするなど薬学部生らしい一面も垣間見ることができた。

本取り組みの実施後のみであるが、アンケート調査を行った。その中で、大学の使命に関して、やや興味深い結果を得た。

「大学の使命として、“教育”、“研究”、“社会貢

自由研究発表：協同学習・グループワーク献”が挙げられます。これらの3つの重要度について、回答してください。」という設問に対し、0(全く重要でない)~10(とても重要)の11段階で評価させ、その評価値を集計したところ次の結果を得た(平均値±標準誤差)。

|       |           |
|-------|-----------|
| 教育    | 8.72±0.14 |
| 研究    | 8.54±0.14 |
| 社会貢献  | 7.78±0.14 |
| 貢献_前* | 6.61±0.20 |

大学の使命として社会貢献は、教育、研究に比べ重要度が高くないと認識されていた( $p < 10^{-5}$ )。また、貢献\_前\*は、GWに参加していなかったとしたら社会貢献をどれくらい重要と思うかという趣旨の質問であるが、GWによって重要性の意識が大きく上昇すると解釈できる( $p < 10^{-10}$ )。

また、このGW終了後、本学が新規に連携予定の自治体との連携商品開発案の公募を行ったところ、1年生の応募が他学年の3倍以上あった。また、地域創生研究同好会が創設され、地域に根ざした社会貢献を活性化させたいという学生が参加している。

このように、初年次教育の一企画として、地域貢献など大学の社会貢献をテーマとした取り組みを実施することにより、その後、種々の社会活動を始めやすくなり、限られた学生時代に様々な経験を積むことが可能になると考えられる。また、型にはまった学問を学習するのではなく、定まった正解がないような課題を主体的に解決できる能力も効果的に育めるような学士課程教育に結びつくことも期待される。

### 4. 謝辞

本取り組みは、本学教養・基礎薬学部門の教員の協力のもと実施した。感謝申し上げます。

### 5. 参考文献

A) 我が国の高等教育の将来像、中央教育審議会答申(2005)

B) 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて、中央教育審議会答申(2012)

## リビジョンマップによる協働レポートの作成プロセスの検討

### —フリーライダーのいるレポートに着目して—

○仙石昌也・宮本淳・橋本貴宏・久留友紀子・山森孝彦・山下敏史（愛知医科大学）

#### 1. はじめに

協働学習の技法の1つとして、協働ライティングがある。協働ライティングによるレポートの作成は、Google ドキュメントなど、クラウド上で利用可能な文書編集ソフトを用いることで、より効果的に行うことができる。筆者らは、これまでGoogle ドキュメントで作成された協働レポートを利用して、作成プロセスにおける協働に関する情報を取得し分析方法の検討を行ってきた。

前年度の報告（仙石ら 2020）では、リビジョンマップ（V. Southavilay ら 2013）を改良し、編集内容に着目してセクション別に配置したリビジョンマップと編集者別に配置したリビジョンマップの2つを作成して、レポートの作成プロセスの可視化を試みた。本報告では、協働レポートを基に作成した2つのリビジョンマップの活用例として「フリーライダー」のいるレポートの作成プロセスについて報告する。

#### 2. リビジョンマップから得られる情報

改良したリビジョンマップは、Google ドキュメントの変更履歴に記録された次の情報を基にして作成する。①入力時刻、②入力した編集者、③履歴間の入力および削除内容。レポートを構成するセクションや編集者を縦軸に、編集時刻を時系列に横軸に並べてマス目の表を作成し、編集内容の違いにより色分けをした。

図1、図2にセクション別と編集者別に配置したリビジョンマップの例を示す。このレポートは3名の編集者（学生A、B、C）が、6

個のセクション（S1～S6）を作成している。編集内容は、「入力」（1文以上の追加、削除、修正）、「校正」（1文末満の追加、削除、修正）、「入力なし」（文字修正以外の修正含む）で色分けされている。時系列は変更履歴の間隔が、ある一定時間以内のものがまとめてある。よって時系列の数の多さは、総作業時間の長さではなく、完成までに時間を分けて複数の時間帯で編集していることを示している。

これら2種類のリビジョンマップからは、レポート作成プロセスに関して次の4つの情報が得られる。

- 1 どのセクションを誰がどの程度編集していたか（協働の把握）
- 2 レポートの各セクションがどの順番でどの時期に作成または完成されたか（作成時期や作成順の把握）
- 3 レポートの各セクションがどの程度の頻度で編集されたか（編集頻度の把握）
- 4 各編集者が編集したセクション数と、作成時期（レポート全体に対する貢献度）

#### 3. リビジョンマップの活用例 - 「フリーライダー」のいるレポートの調査 -

協働作業における大きな問題の一つにフリーライダーの存在がある。フリーライダーとは協働学習において最小限の労力で済ませようとするメンバーのことである。変更履歴において入力時間帯（変更履歴が記録された時間間隔）がごく短く、記録された変更履歴数が他者と比べて大幅に少なく、完成したレポートに対する貢献度が低い編集者がそれに該当すると考えることができる。今回の報告

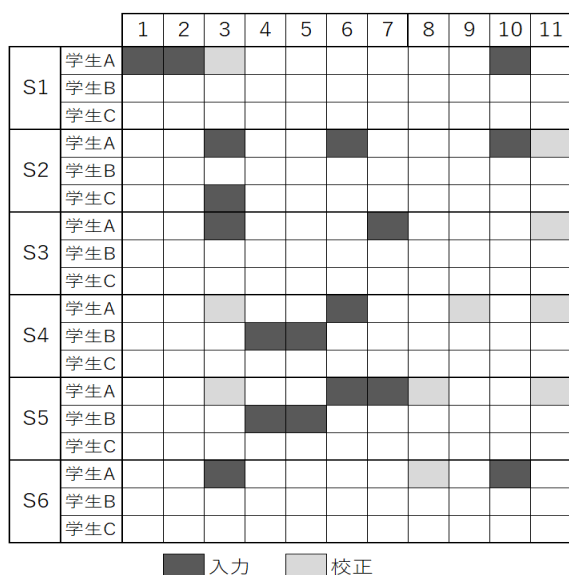


図1 セクション別に配置したリビジョンマップ

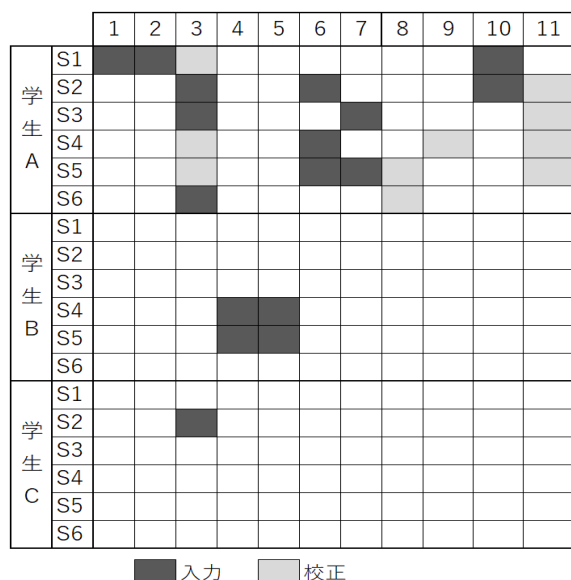


図2 編集者別に配置したリビジョンマップ

ではリビジョンマップ活用の一例としてこのような特徴がある編集者のいるレポートを抽出し、リビジョンマップに現れた作成プロセスの特徴を調査した。

対象としたレポートは2016年度1年生に実施した協働ライティングの3名×31編のレポート(作成期間3週間)であり、上記の条件に合致するレポートのうち、編集内容を直接確認した上で4編のレポートをフリーライダーがいるレポートとした。図1、2はその中の1編である。

自由研究発表：協同学習・グループワーク  
これらのレポートのフリーライダーの編集者に関する共通点として、①マップに記録(色づけ)された回数、時期が少ない、②編集したセクション数が少ない、③入力開始時期が他者に比較して遅い、④フリーライダーが編集したセクションを他の編集者がフォローしているなどの特徴が挙げられる。また、これらのレポートには過度の負担がかかった(ほとんどすべてのセクションに関わっている)編集者が存在するが、必ずしも成績評価に結びついていないことが明らかになった。

#### 4. まとめと今後の展望

リビジョンマップにより、従来確認が困難であったレポート作成プロセスの情報が得られる。今回の調査例ではフリーライダーに着目したが、リビジョンマップは他の調査手段と組み合わせることによりその有効性がさらに高まると考えられる。今後は、その調査手段についても検討していきたい。

#### 謝辞

本研究は、JSPS 科研費 19K03016 の助成を受けたものです。

#### 参考文献

仙石昌也、宮本淳、橋本貴宏、久留友紀子、山森孝彦、山下敏史 (2020) クラウド履歴の編集内容に着目したリビジョンマップの作成—協働ライティングプロセスの可視化— 初年次教育学会第 13 回大会発表要旨集 pp. 54-55

Vilaythong Southavilay, Kalina Yacef, Peter Reimann, Rafael A. Calvo (2013), Analysis of collaborative writing processes using revision maps and probabilistic topic models. Proceedings of the Third International Conference on Learning Analytics and Knowledge, 38-47



## 短時間交流活動の普及（実践報告） —知識・経験がなくてもできる、心理的に安全な場づくり—

○関智子（玉川大学）

### 1. 背景

2020 年度は大学も新型コロナウイルス感染症に翻弄されることになった。文部科学省が、今年 3 月に大学生を対象に学生生活への影響についてウェブで調査を行っている（文部科学省, 2021）。悩みについても尋ねたところ、学内の友人関係の悩みがある割合は他の学年では 20%代後半だが、一年生は 46%以上で、その理由には友人が思うように作れないためが一番多くなっている。

それ以前に、濱谷（2004）によって指摘されたように、関係性の構築は大学への適応感を持つためには重要であるし、この心理的な安全性は学生だけの話ではなく、生産性をあげ、組織を活性化する上で欠かせないコンセプトとして最近注目されている（Edmondson, A. C., 2021）。

初年次教育プログラムでは、グループでの活動が多く採用されている。そのプロセスを通して、学生は自分の置かれた環境を知り、場合によっては友人を作る機会にもなっている。それらが、心理的な安全や大学適応感の向上につながり、学業への適応にもつながるという報告もある（中山留美子・中西良文・長濱文与・中島誠, 2015）。

しかし、時に、グループメンバーの緊張感が高くグループ活動がうまくいかず、授業の展開に苦勞することがある。初年次生向けのグループワークでは、グループの心理的な安全性の状況の見極めと、どのような活動をいつどれくらいやれば良いのかという活動の匙加減が難しいということである。

### 2. 短時間交流活動プログラム開発

#### （1）目的：

この実践研究は、学生と教員にとって心理的に安全な学びの場を作る、交流体験活動の普及を目的にしている。

#### （2）方法：

第一段階として、関係性を作ることに特化した短時間（15 分）の活動を集め教員向けの体験会（60 分）を実施した。体験会では、筆者が作成した活動集兼指導マニュアルを使用した。その後、体験会の内容や参加教員からのコメントを反映させて、冊子をオンライン用、ゼミなどの少人数用なども追加して作成した。

#### （3）結果

初年次や 2 年次学生向け授業を担当する教員向けの体験会を実施した。実際に体験して自分で指導できそうかを実感を伴って考えることができた。教員同士の交流ができ楽しいひとときとなった。体験によって、合理的な配慮が必要な学生への対処について考えるきっかけともなった。冊子については、スクールカウンセラーとして活躍する臨床心理士などにも助言を求め、改訂した。

#### （4）今後の展開

引き続き体験会を展開し、冊子も改訂する予定である。要配慮学生のいるグループでの展開など、身体的または心理的に安全な交流活動に関連する情報を充実させ、活動展開のコツをより充実させていく。体験会などの場を通して、活動の普及を図る。体験会後のアンケートによって、教員のニーズをくみ上げていく。

#### 引用文献

Edmondson, A. C., （野津智子訳）（2021）, 恐れのない組織：「心理的安全性」が学

習・イノベーション・成長をもたらす、  
英二出版。

濱名 篤(2004).初年次教育の日本的課題 拡大する FYE の解釈(下)— アルカディア学報(教育学術新聞掲載コラム)No.155 日本私立大学協会 2004 年 4 月 7 日〈<https://www.shidaikyo.or.jp/riihe/research/arcadia/0155.html>〉(2014 年 4 月 7 日)

文部科学省(2021), 新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の 学生生活に関する調査 [https://www.mext.go.jp/content/20210525-mxt\\_kouhou01-000004520\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210525-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf) (2021 年 6 月 27 日)

中山留美子・中西良文・長濱文与・中島誠 (2015), 初年次前期の授業での対人関係への動機づけが大学適応に及ぼす影響, 心理学研究 , 86 (2), pp. 170–176.

## 大学間連携による地域課題解決型授業プログラムの構築と実践

### ——初年次協働開発科目「大分の地域ブランド創造体験」——

○吉村充功（日本文理大学）

#### 1. はじめに

『大学等による「おおいた創生」推進協議会』（大分大学を代表校に本学を含む大分県内すべての大学・短大・高専，自治体，主要経済団体・企業等 57 機関で構成）では，文部科学省「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」において，「地域と企業の心に響く若者育成プログラムと大分豊じょう化プラン」の事業推進を行った。本事業では，地域で活躍できる人材を育成する教育プログラムを関係者が協働で開発する科目の1つとして，「大分の地域ブランド創造体験」を立案し，平成 29，30 年度にパイロットケースとして実施した。令和元年度は新型コロナの影響で中止となったが，補助期間終了後の令和 2 年度は他地域に展開するとともにプログラムの高度化を行った。

本研究では，令和 2 年度に実施した初年次協働開発科目「大分の地域ブランド創造体験」について，その概要と実践結果を報告する。

#### 2. 開発科目の概要

##### （1）基本様式の構築

協働開発科目とは，大分 COC+における「大分を創る人材を育成する」教育カリキュラムのコア科目（単位互換科目）として，県内大学教職員が連携して新規開発した科目を指す。

この基本様式の開発にあたっては，平成 29 年 3 月 9 日～10 日の 1 泊 2 日で 6 大学 14 名の教職員がワークショップ形式でプログラムの検討を行った。この際に開発したものが初年次協働開発科目「初年次地域キャリアデザインワークショップ」（1 年前期・2 単位），「大

分の地域ブランド創造体験」（1 年後期・2 単位）で，いずれも集中授業として構築した。

本研究ではこのうち後者の科目をベースに発展させた内容の詳細を取り扱っている。

##### （2）本科目のねらい

本授業は，地方創生を担い支える人材を育成するための地域ブランドを掘り起こすための力と企画力の育成を目的とするもので，県内の行政機関や企業等から提示されたテーマに対して異校種，異なる学部学生から構成されるグループで，地域のデータやフィールド調査の情報などの事実を整理分析し，地域の魅力と地域が抱えている課題を指摘し，魅力を活かした課題解決方法を探るとともに，その方策を提案することをねらいとしている。よって以下の 3 点を基本としている。

1）協働開発・実施科目の受講生を主な対象者とし，その学びを基礎に地域の活性化を担う人材育成を目指した実践型授業とする。

2）特定の地域をモデルにして，地域の魅力を掘り起こすとともに，その魅力を活かし融合した地域活性化の新しいビジネスモデルや製品の開発提案を行う。

3）活動は大学連携によるグループ活動（1 チーム 4 人程度）とし，域学連携による体験活動を通じて，6 次産業人材の育成に向けた足掛かりとする。

##### （3）令和 2 年度の授業概要

中津市役所，中津市歴史博物館（なかはく）等と連携し，中津市での 2 回の宿泊体験型活動（令和 3 年 2 月 25 日～26 日，3 月 4 日～5 日）を通じて，中津市の歴史文化等について学生視点での魅力発掘を行い，①なかはくの

誘客につながるブランド製品の提案，②なかはくの体験学習メニューの提案，③なかはくと日本遺産に認定された「やばけい遊覧」との連携強化・情報発信策等をテーマとした。

また，地域で活躍できる人材として課題や特徴を発見し，解決策を企画・提案できる能力を身に付けた者を認証する「おおいた共創士」認証科目とし，県内企業に協力いただくステークホルダー評価を導入した。

単位互換科目として受講者を募った結果，日本文理大学，大分大学の学生 14 名が受講した（4 チームを編成）。大学，学部（理工学系，経営経済系），学年（1，2 年），性別の受講バランスがよく，学校や分野を横断して学生が学ぶ環境を整えることができた。

授業の詳細スケジュール，授業手法等は表 1，表 2 の通りである。

### 3. 開発科目の実施成果

本授業の主な成果は以下の通りである。

1) 多様な学生のチーム編成で実践授業を展開した結果，4 日間の短期プログラムにもかかわらず，地域を含む関係者の想定をはるかに超える地域の魅力発掘，具体的な企画提案がなされた。図 1 は作成したループリックの 4 つの観点（地域情報の収集力，協働力と発信力，地域企業の課題発見力と企画力，地域課題発見力と創造力）の学生による自己評価の平均値の推移であり，いずれの観点も事前と事後で 1% 有意の差が認められた。

2) 受入自治体側の担当窓口を介して，訪問先や関係者を紹介，調整していただいた結果，効果的なプログラムが立案でき，スムーズにプログラムを実施することができた。

3) ステークホルダー評価として，COC+推進コーディネーターと主担当教員が協力して，協力企業を調整した結果，評価のみならず，随所に企業目線のアドバイスを学生にいただくことができ，学生の成長や提案内容のブラッシュアップにつながった。

表 1 合宿第 1 回目の授業スケジュール

| 時限                         | 授業内容                                             | 手法                      | 場所       |
|----------------------------|--------------------------------------------------|-------------------------|----------|
| 2/25(木)<br>10:00<br>～12:00 | オリエンテーション<br>＜ねらい，中津市の概略，グループづくり等＞               | ・講義<br>・アイスブレーク         | 集会室      |
| 13:00<br>～15:00            | 地域交流活動(1)<br>館内観覧，WS体験等                          | ・FW<br>・WS              | なかはく     |
| 15:10<br>～17:00            | 地域交流活動(2)<br>観光ガイドによる散策                          | ・FW<br>(ガイド有)           | 城下町      |
| 17:15<br>～18:30            | ワークショップ(1)<br>＜初日気付きまとめ，ストーリーの1回目検討＞             | ・グループ討議<br>・KJ法         | 集会室      |
| 2/26(金)<br>9:15<br>～10:00  | 地域体験活動(3)<br>①青の洞門・耶馬溪橋・競秀峰(遠景)                  | ・FW<br>(ガイド有)<br>(バス移動) | 青の洞門     |
| 10:10<br>～10:40            | 地域体験活動(4)<br>②古羅漢(歴史を知る)                         |                         | 古羅漢      |
| 10:50<br>～11:50            | 地域体験活動(5)<br>③耶馬溪風物館<br>④耶馬トピア(地元産品・道の駅の役割を知る)   | ・グループ討議<br>・KJ法         | 道の駅耶馬トピア |
| 13:30<br>～14:50            | ワークショップ(2)<br>＜なかはくを中心とした地域の魅力・課題をまとめ，ストーリー提案作成＞ |                         | 集会室      |
| 15:00<br>～15:50            | 中間発表(1) ＜Miroでまとめたものを使用＞                         | ・プレゼン                   | 集会室      |
| 16:00<br>～16:45            | ステークホルダーフィードバック<br>／2回目に向けたガイダンス／宿題(個人で新企画等を構想)  | ・WS<br>・個人ワーク           |          |

表 2 合宿第 2 回目の授業スケジュール

| 時限                       | 授業内容                                            | 手法                  | 場所  |
|--------------------------|-------------------------------------------------|---------------------|-----|
| 3/4(木)<br>10:00          | オリエンテーション                                       |                     | 集会室 |
| 10:20<br>～11:00          | ワークショップ(3)<br>＜宿題内容をグループ内発表／批評＞                 | ・個人発表               | 集会室 |
| 11:00<br>～11:20          | 全体講評と最終提案に向けたアドバイス                              |                     |     |
| 11:20<br>～12:30          | 統合プランの検討(1)<br>＜総合プランをMiroに整理／中間発表＞             | ・グループ討議<br>・プレゼン    |     |
| 13:30<br>～14:45          | 統合プランの検討(2)<br>深掘り                              | ・グループ討議             |     |
| 15:00<br>～16:30          | 地域体験活動(6)<br>＜企画素案についてなかはくとの意見交換＞               | ・プレゼン               | 集会室 |
| 16:45<br>～18:30          | 発表資料作成(1)＜意見交換を踏まえ，提案再検討。パワポ作成＞                 | ・グループ討議             |     |
| 3/5(金)<br>9:00<br>～12:15 | 発表資料作成(2)＜前日のつづき＞                               | ・グループ討議             | 集会室 |
| 13:30<br>～14:45          | 最終成果発表と講評<br>＜PC使用。企画案等の提案。協力者講評＞               | ・プレゼン               | 集会室 |
| 14:50<br>～16:30          | ステークホルダーフィードバック／振り返り<br>①個人レポート作成<br>②自己チェックシート | ・個人レポート<br>・チェックシート |     |

※FW：フィールドワーク，WS：ワークショップ

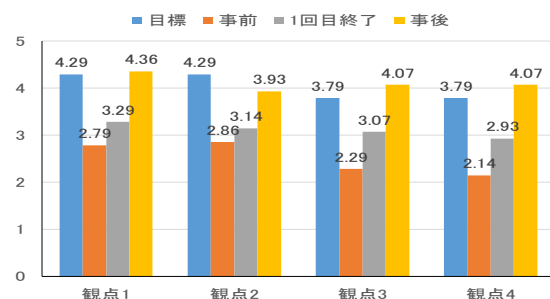


図 1 ループリックの自己評価の平均値の推移

## 文章表現基礎講座のオンライン授業の実践

○東寺祐亮（日本文理大学）

### 1. 研究の背景と目的

大学生にとって、文章で物事を説明できることや自己を表現できることは、4年間の大学生生活だけでなく社会人生活のためにも重要である。それら文章を作成するために伸ばしておきたい能力としては、「資料と主張を結びつける思考力」や「構成や表現を選択する文章力」などが挙げられる。このような力を養うにあたって、ジグソー学習法をはじめとした学生同士の交流を利用する実践がなされている。たとえば、永田・長瀬（2018）は、英語のライティング指導のために、ジグソー学習法を導入して英語資料の読解を行い、英語作文へとつなげている。その結果、英語作文の文量の増加、内容の具体性の向上が見られたことを報告している。

このような学生同士の交流を利用した学習は、これまで対面を中心に行われてきた。しかし、感染症の流行などさまざまな理由で対面が困難な場合もある。そこで、本研究では、オンラインでの学生同士の交流を取り入れた文章表現授業について記述し、その効果が得られるかを検討する。

### 2. 実践の概要

#### 2. 1 実施クラスの状況

実践科目は日本文理大学経営経済学部の2020年度後期に開講された「文章表現基礎講座」である。対象は大学1年生34名である。対象学生は、高等学校までに文章作成の経験はあるが、文章作成をすることができるという自信を持っている学生は少ない。授業開始前にアンケート調査を行ったところ、意見文や説明文が書けると回答しているのは20%

程度にすぎない。このような学生にとっては、文章作成に必要な知識のみならず、「文章を書ける」という自信を付けることが、文章を作成するという行動に結びつけるためにも重要である。そのため、本科目では400字以上の短い意見文を書ききることで、文章作成知識を習得し、文章作成への自信を付けることを目指した。

#### 2. 2 授業の概要

本授業は、日本語の学習と文章作成法の学習で構成されている。本研究では文章作成法の学習にあたる表1の第11-15回に焦点を当てる。文章作成法の指導は文章作成の知識（レポートの文体・表現・引用・論拠・構成）に関するオンデマンド授業と、ジグソー学習法などを用いたデータ読み取りや構成の検討を行うライブ授業がある。

第11-15回の文章テーマは「遠隔授業に賛成か反対か」である。このテーマに沿って、第12,13回は資料に関する説明文を課題にした。第14,15回は資料を基にした意見文を課題にした。資料は、大学の遠隔授業に関する文章資料と、受講学生に対して行ったアンケート調査で得られたデータである。アンケート調査では「オンライン授業で学力が身についた実感はありますか。」など遠隔授業に関する10項目の質問を行い、この調査で得ら

表1 授業構成

| 回     | 授業内容                              |
|-------|-----------------------------------|
| 1-10  | テキストによる日本語語彙・文法・文章・敬語の学習(オンデマンド)  |
| 11-12 | 文章作成に必要な書き言葉等の知識の学習(オンデマンド)       |
| 13-14 | ジグソー学習法などを用いた資料読み取り・意見文構成案作成(ライブ) |
| 15    | 意見文推敲・提出(オンデマンド)                  |

れたデータを意見文の論拠として検討できるようグラフ・表にして学生に提示した。学生自身の現状をデータとして用いることでテーマの「自分事化」を狙った（坂井ら 2020）。

### 2. 3 調査方法

本研究では、文章作成力と文章作成への自信について調査を行った。前者については事前と事後に文章作成を課してループリックで採点を行った。採点結果にはウィルコクソンの符号付順位和検定を行った。後者については事前と事後にアンケート調査を行った。なお、データ使用の同意が得られなかった学生のデータは除外している。

### 3. 結果と考察

実施の結果、文章作成力に関して、レポートの文体・表現・引用・論拠・構成で得点が上昇し、有意差が見られた（表 2）。文体・表現点の上昇から、オンデマンドで作成に関する知識を十分に学習して文章作成に活かすことができたことがうかがえる。また、引用・論拠・構成点の上昇からは、ライブ授業のジグソー学習法で十分に資料を読み込み、構成の話し合いで資料と主張を結びつけることで引用や論拠について考えられたことがうかがえる。授業後の自由記述アンケートでは「他の人の意見を聞くことで自分の考えにないものを気づかせてもらえて良い学習になりました。」というコメントが見られた。

文章作成に対する自信に関しても改善が見

自由研究発表：文章表現／高大接続／キャリア教育  
られた（表 3）。感想文については同程度の割合だったのに対して、授業で取り組んだ説明文については 23%から 61%に、意見文については 19%から 57%に増加した。また、書くことができないという回答は 16%から 4%に減少した。課題の文字数は少ないが、文体・表現・引用・論拠・構成といった文章作成の学習を活かして文章を書ききったことが、説明文や意見文に対する自信の向上につながったと考えられる。授業後の自由記述アンケートでは、「自分はもともと文章を作るのがあまり得意ではなく、人に説明するのも下手です。でも、この授業を通して人への伝え方をわかることができた。」という自信がついたことがうかがえるコメントが見られた。

以上、オンラインでの交流を含む文章表現授業において、文章作成力と文章作成に対する自信について一定の効果が得られた。一方、本実践では、オンラインでスムーズに交流を行うための参加ルールなどの工夫が不足していたこと、各グループでの活動の評価が困難であることなどの課題もみられた。

#### 参考文献

永田真一郎・長瀬慶来（2018）「高等学校における知識構成型ジグソー法を用いたライティング指導」『教育実践学研究：山梨大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』, 23, 295-304.

坂井美穂・渕上千香子・東寺祐亮・赤星哲也・安田幸夫・太田清子・郡弘文・吉村充功（2020）「工学部・文章表現基礎講座の事例報告」『日本文理大学紀要』, 48, 77-80.

表 2 文章作成力

| 項目      | 前後 | 平均   | Z    | 有意確率  |
|---------|----|------|------|-------|
| レポートの文体 | 事前 | 3.23 | 2.80 | .01** |
|         | 事後 | 4.62 |      |       |
| レポートの表現 | 事前 | 2.85 | 2.41 | .02*  |
|         | 事後 | 3.77 |      |       |
| 資料の引用   | 事前 | 1.00 | 4.29 | .00** |
|         | 事後 | 4.31 |      |       |
| 論拠      | 事前 | 2.69 | 3.52 | .00** |
|         | 事後 | 4.15 |      |       |
| レポートの構成 | 事前 | 4.38 | 2.07 | .04*  |
|         | 事後 | 4.92 |      |       |

$n=26$ , \*  $p<.05$ , \*\*  $p<.01$

表 3 文章作成に対する自信

| 項目                    | 実施前<br>( $n=31$ ) | 実施後<br>( $n=28$ ) |
|-----------------------|-------------------|-------------------|
| 感想文(500 字以上)を書くことができる | 68%               | 71%               |
| 説明文(500 字以上)を書くことができる | 23%               | 61%               |
| 意見文(500 字以上)を書くことができる | 19%               | 57%               |
| 500 字以上の文章は書くことができない  | 16%               | 4%                |

## 初年次文章表現教育における意見文作成指導に関する一考察

### ——テーマ設定と論展開の関わりについて——

○近藤裕子（山梨学院大学）・春日美穂（大正大学）・由井恭子（大正大学）・吉田俊弘（大正大学）

#### 1. はじめに

初年次教育の一環として行われる文章作成指導の多くは、レポートや卒業論文に必要な文章表現スキル習得と同時に、論理的に考え、文章で表現することを目指している。しかし、初年次生にとってそれらは容易なことではなく、特に、「問い立て」については、困難だと感じている学生も多い。また、実際に学生の作成した意見文やレポートの中での問いが論展開の中で適切に機能していないケースも少なくない。これらの課題を解消するために、大正大学ではレポート作成に必要なスキルの指導のあとに、論理的に考え、表現する方法を身につけるための意見文作成、さらに、専門科目で課されるレポート作成につなぐための調査報告型や論証型レポート作成の実践を行った。その中でも、意見文作成では、さまざまなタイプの資料読解後に「論理的思考」や「問い立て」に重点を置いて指導を行っている。そして、これらの意見文を共通の評価項目を用い、評価・分析したところ、テーマによって学生の書く意見文に、「テーマの背景説明」「問いの立て方」「根拠提示」「考察」などに一定の共通した課題や傾向が現れ、テーマとその理解度、思考の深まりの兼ね合いが関連していることが示唆された。

本発表では、学生の書いた意見文とそのテーマの関連性に焦点を当て、初年次生の文章表現教育において意見文を指導する際の効果的なテーマ設定について考察したい。

#### 2. 意見文作成のためのテーマ設定

先述のとおり、「知の加工術3」（2020年度秋学期、1コマ100分、14回授業実施）では、

資料をもとに、意見文作成を4回行った。その流れは、資料を読解し、補足資料などを収集し情報を整理する。さらにディスカッションやマッピングで思考の整理を行った後、アウトライン作成を経て、意見文を作成、ピアレビューを行う、というものであった。ここでは、2クラスを取り上げ、4回分の意見文の評価・分析結果とテーマとの関連についてみていく。扱ったテーマは以下のとおりである。

第1回：「ブルーインパルスはなぜ都心を飛んだ？『政治利用』『迷惑』の声も」『東京新聞』2020年6月3日

第2回：「（上京物語）遺骨を郵送、供養は都心で『縁ないけど肩の荷下りた』墓じまいも／東京都」『朝日新聞』2020年1月6日朝刊

第3回：「（2030 SDGs で変える）海の豊かさ守れ、社食から挑戦」『朝日新聞』2020年1月29日朝刊

第4回：「死刑制度」（ミニ講義を受講）

第1回の「ブルーインパルス」は、旬の話題として学生もニュースに触れた可能性が高く、意見・感想を抱きやすいテーマであった。第2回の「墓じまい」は仏教系の大学であることに加え、少子高齢化の問題として多くの学生がイメージしやすいテーマである。第4回「死刑制度」は、専門的な講義を行い、より深い思考を学生に促す内容としたが、「死刑制度」そのものについては、既に知識や感覚的な意見を持っていることの多いテーマであった。一方で、第3回「サステナブルシーフード」は、多くの学生が初めて耳にしたという馴染みのないものであった。

このように、旬な話題、自分と関わりのあるテーマ、既に知識や感覚的な意見を持っているテーマ、全く知識のないテーマとさまざまなタイプ扱ったが、これらの中で、意見文に多くの課題を残したのが、授業で扱う以前にはテーマについての知識のなかった第3回「サステイナブルシーフード」であった。次に、その意見文に現れた課題を見ていく。

### 3. 馴染みのないテーマで書く意見文の傾向

それでは、馴染みのないテーマで意見文を書いた際に、どのような課題があるのか。

#### ①構成のアンバランス

構成のアンバランス、特に、序論の「背景説明」の分量が大きく、意見文全体のバランスを損ねている傾向が見てとれた。これは、情報を盛り込みすぎていることに起因するが、「サステイナブルシーフード」を説明するために、SDGsの概略に字数を割くなど、問題の焦点化ができていないことの影響も大きい。さらに、資料にある説明をそのまま引用する傾向もあることから、情報の取捨選択ができていないことにも原因があると言える。また、得た知識をすべて書こうとするあまり、もはや意見文ではなく資料の内容をまとめた調査報告型レポートの形態をとるものもあった。

これらのように、序論に書くべき「問題の背景」に情報を詰め込み、また、問題が焦点化されないことによって本論へつながりが弱く、一貫性のない論展開になる傾向が窺えた。これは学生がテーマを理解しきれていないために説明に偏ったものと考えられる。

#### ②「問い」の曖昧さ

賛否型の意見文の問いは比較的容易に立てることができる。例えば、「死刑制度」に対する賛否については、その主張の根拠の説得性が重視される。しかし、「サステイナブルシーフード」は自らがその問題背景から問いを立てる必要がある。テーマそのものについての理解に深まりがなければ、問いは表層的なものに留まる。つまり、意見を持つに足る知識

を持っていないことが自分ごととして問題を捉えることができず、具体性に欠く問いとなったと言えよう。当然ながら、曖昧な問いに対する答えも具体性がなく、的を射ない。

このように、テーマに対する理解が浅いことによって、問題の焦点化や具体的な問いが立てられないという傾向を確認した。

### 4. 考察と今後の課題

本研究では、理解に深まりのないテーマを扱った意見文には、身近なテーマや旬な話題を扱ったものと比べ、構成面や問いの立て方、論展開などに課題が残ることが分かった。一方で、初年次生の意見文の問題点として、自分の経験や見聞きした事柄を根拠として提示する傾向があることが指摘されている<sup>1)</sup>が、今回取り上げた「サステイナブルシーフード」においては、そういった類の問題は見られなかった。このことから、模擬的な専門科目の課題に近いテーマとして捉えることもできるのではないか。つまり、馴染みのないテーマを扱うことで、既にある知識や経験を土台として文章を作成するのではなく、新たな知識を得、それらの問題整理を行い、理解を深めるといったプロセスを経たうえで、論理的に表現するトレーニングとなると期待できる。まさに、大学の専門教育への接続を意識した指導が可能となるのではないか。一方、旬な話題や身近なテーマで書く場合は、テーマ理解や意見形成などは比較的容易であるため、スキル習得、特にパラグラフライティングなどの新たな学びに適している。また、既存の知識や先入観を問い直し、論理性・説得性などに重点を置いた指導も可能となるであろう。初年次生を対象とした文章表現教育では、目的に応じたテーマ設定が有効だと考える。

#### 引用文献

1) 春日美穂・近藤裕子ほか(2021)『あらためて、ライティングの高大接続』ひつじ書房 付記：本発表は、JSPS 科研費 JP19K02896の助成を受けたものである。



## 主体性・多様性・協働性を有した学生育成のための高大接続プログラム開発

### ーカリフォルニア州立大学サンマルコス校との連携を通じたコロナ禍での試みー

○九内悠水子・佐々木淳（比治山大学）

#### 1. 本研究の動機目的

高等教育機関においては、今後ますます、多様な学生を受け入れていくことになるであろうが、私たちが「多様性」の問題を考える時に意識されるのは、教育する側の我々からの、学生の「多様性」への対応であることが多い。しかし学生の側もまた、社会には多様な人々がいることを理解し、皆と協働することの大切さを学ばねばならないのである。このような問題意識のもと、発表者らは 2019 年より、日・台・韓・米にある提携校に協力を仰ぎながら、各国各校における初年次教育の取り組みを調査し、主体性・多様性・協働性を有した学生育成のための高大接続プログラム開発を目指してきた。

なかでも、発表者らの所属大学の提携校カリフォルニア州立大学サンマルコス校（以下、CSUSM）は多様なバックグラウンドを持った学生が多く、特に First-Generation への高大接続が課題となっている。日本においても「大学の大衆化」や高等教育の無償化に伴い今後より一層その傾向が顕著になることは必至であるが、それらに配慮した初年次教育をすでに数多く実践している CSUSM の取り組みには示唆を得るところが多い。本発表は、「主体性・多様性・協働性を有した学生育成のための高大接続プログラム開発」を目的に計画・実施した（CSUSM との連携を通じた）「初年次セミナーⅠ・Ⅱ」（以下「初年次Ⅰ・Ⅱ」）についての実践報告である。

#### 2. 研究計画と方法

2020 年度は、まず「初年次Ⅰ」で CSUSM の

テキストを使い、内容に関する意見発表を重ねながら「傾聴・受信力」を磨き、自身の回りの「多様性」に気づいていく、すなわち「他者を理解し広い視野をもって生きる力」を育んでいくことを目指した。また「初年次Ⅱ」では CSUSM のバーチャルプログラムを利用し、世界における「多様性」についての理解を深め、さらにはレポート作成等の共同作業を通じ「コミュニケーション」力を高めることで自らもまた、1 人の人間として個性を発揮していくことのできる「イノベーション」力を育んでいくことを目指した。

しかしながらコロナ禍により、発表者らの所属大学では入学式含めわずか 3 日の対面オリエンテーションののち、約 1 か月余りの授業延期、以後は遠隔での授業実施となった。教員と学生はおろか、学生同士の横の繋がりも希薄な中で、「多様性」とどう向き合えばいいのかという新たな課題がいきなり降りかかってきたわけであるが、これについては、以前より発表者らが授業への導入を進めていた Google Workspace for Education（以下 GWE）や SNS をフル活用することで解決に努めた。また、ライティングやプレゼンテーション等の「アカデミックスキル」獲得をメインに据えていた授業内容を、大学生活における「ライフスキル」獲得をメインに据えるべく一部変更した。これは、コロナ禍における初年次教育において、何が一番学生に必要なかを考えた末の決断であった。

#### 3. 授業の概要

2020 年度「初年次Ⅰ・Ⅱ」は、2 グループ合

同（受講者 38 名）で運営、まず「初年次Ⅰ」では、「Organization and Time Management」「Information Literacy and Communication」ほか計 5 つのテーマを選択し、英文教材の提示とその読解⇒日本語要旨の作成⇒解説動画の視聴⇒テーマに関する意見発表⇒レポート作成という流れで授業を行った。

遠隔授業に用いたツールは本学の LMS, LINE（授業用に開設）、GWE である。学生の通信環境の差を考慮し、リアルタイム配信によるオンライン授業ではなく、オンデマンド型の授業を選択し、授業日の授業開始時に資料・課題を配信、概ね 1 週間内に課題提出をさせた。意見発表については LINE のトーク機能を用いた chat 形式を採用、レポートの構成には Jamborad を利用した。これは電子ホワイトボード機能を持つクラウドアプリであり、ペンで図を描く、付箋を貼る、画像を貼り付けるといったことができる。今回は、1 つのファイルに受講者ごとのページを設定することで、他の受講者の構成メモを閲覧できるようにした。また、レポートについては、書き方（見本）を提示し、「大学生活で大事なこと」というテーマで授業全体の内容を踏まえ、各個人で作成するよう指示、Forms より提出させた。

次に「初年次Ⅱ」では、CSUSM のプログラムをベースに、事前調査学習⇒バーチャルプログラム資料（Slides）の読解⇒発表者らによる資料解説⇒質問事項の検討と練習⇒バーチャルプログラムの受講⇒レポート作成という流れで授業を行った。

対面ならびに遠隔授業に用いたツールは GWE のうち Classroom・Meet・Forms と LINE, Zoom である。後期は幾分コロナが収まっていた時期であったので、事前の予習やプログラムの受講・レポート作成等は、PC ルームを利用して対面授業で行った。バーチャルプログラムは CSUSM の Department of Global Studies より Nick Morales 氏を講師に迎え、「San Diego's Historic Old Town」

自由研究発表：文章表現／高大接続／キャリア教育  
「California History」「California

Immigration and the Border」の 3 つの内容についてアメリカと日本を Zoom で結び、60 分×3 回で実施した。講師ならびに CSUSM のスタッフには事前に受講生の語学レベルを伝え、授業内容の工夫と、授業約 2 週間前の資料送付をお願いし、事前フォローを行うことで内容が十分理解できるよう配慮した。また、プログラム終了毎に、学生のコメントを講師や現地コーディネータにフィードバックすることで、より効果的な授業運営を図った。レポートは、ラティーノ文化をテーマに、グループで共同作成させ、Classroom に提出するよう指示した。なお、コロナの影響もあり、授業外でのレポート作成が不可避であったため、学内外から自由に共同編集ができるよう Classroom にグループごとの Document を設けた。

#### 4. 研究の総括と今後の課題

「初年次Ⅰ」では、教材読解や意見発表・レポート作成を通じて、各受講者が、大学という「多様性」に満ちた場において、自分はいかにどのような学生生活を送るべきかという問題について考えることができたというのが成果であった。

一方、「初年次Ⅱ」では、自分たちにとっては未知の、ラティーノ文化についての知識を得るというところに留まってしまい、世界の多様な文化を担う人々と「協働」していくことの意義を見出し、「多様性」の中で生きる力を育むという本来の目的にまで到達できなかった。しかし皮肉なことに、コロナ禍での、グループによる遠隔レポート共同作成を通じて、学生たちは、「多様」な人々と「協働」することの困難さを感じ取ったようである。

2021 年度は台湾との交流を通じ、引き続き、「主体性・多様性・協働性」を有した学生の育成に取り組む予定だが、今年度の課題と反省を踏まえ、プログラムをブラッシュアップすべく、研究を進めていきたいと考えている。

## 学力補完型から目標設定型へシフトした入学前教育の効果

### —文化芸術・スポーツ特別選抜入試合格者を対象として—

○木原宏子・岸岡奈津子・細川千絵（立命館大学）

#### 1. はじめに：背景と目的

近年、日本では各種入試形態の広がり背景に、早期に入学が決定した入学者に対する学習意欲の維持や基礎学力の向上などを目的として入学前教育が各大学で展開されている。また現在では、入学前教育を展開するにあたって、単に意欲維持や基礎学力向上だけでなく、学力水準を一定程度まで引き上げる必要性のある入学者や不本意入学者への対応も企図したプログラム設計も求められている。

また、それらの実施形態についても、短期留学や合宿といった数週間～数日間で宿泊を伴うものから、1日集合して行うもの、郵送あるいはオンラインで課題のやりとりのみするものなどさまざまである。

立命館大学では、各学部による入学前教育とは別に、「スポーツ能力に優れた者の特別選抜入学試験」と「文化・芸術活動に優れた者の特別選抜入学試験」合格者（以下、文スポ合格者）を対象に、学生部独自の入学前教育を実施している。これは、合格が決定する秋から入学までの期間を有効に活用し、近年では、①大学での学びへの動機付けや目標設定、学生生活の不安解消を図ること、②学びへの関心・意欲や学習能力などの個々の学生の特徴をアセスメントし、個々の状況に応じた入学後の支援に繋げること、③「学業ガイドライン」(クラブ活動にあたっての単位修得基準)や「立命館大学 学生アスリートの誓い」等に基づき、正課と課外の両立の重要性への理解を促すこと、④入学後の学生生活で両立に励む際の助けとなる仲間づくりをすることを主な目的として実施しているものである。

本発表では立命館大学学生部で実施している文スポ合格者への入学前教育を対象として、入学前教育受講直後である1年次春学期の単位修得数とGPAの経年変化に着目し、学生部入学前教育が学力補完型から目標設定型への変遷する中で、どのような効果があったのかを明らかにすることを目的とする。

#### 2. 立命館大学学生部入学前教育の変遷

学生部で実施する文スポ合格者に対する入学前教育は2007年頃から整備が始まった。それまでも各学部主体の入学前教育を実施していたが、文スポ合格者には入学後、課外活動だけでなく、正課との両立が求められるため、オプション的な取組を実施することとなった。当初は大学入学後のイメージを持たせることや意欲維持のためのオリエンテーションと、学問分野別の通信講座が主とした内容で、基礎的な学力の補完と学習習慣の定着を目的としていた。

その後、2015年度までは内容を少しずつ変えながらオリエンテーション・通信講座（国語・英語）を軸とした入学前教育を実施していたが、各学部実施の入学前教育と課題が重なり、合格者にとって過度な負担となっていたことから2016年度からはよりキャリアや学生生活のプランニング、仲間づくりを目的とした合宿形式による入学前教育を開始した。また、2017年度には正課と課外の両立を含む、全ての学生のStudent Successを促すプログラムであるStudent Success Program（以下、SSP）が開設され、SSPが内容の設計と実施を担うこととなった。2016年度以降は、学力

水準の引き上げよりも中長期的な目標設定と学習スタイルや生活管理能力などに関するアセスメントに基づいた行動計画を考えることに軸をシフトしている。その後、コロナ禍の影響を受け、2019年度では一部オンライン化、2020年度ではLMSやZoomを活用したフルオンラインのプログラムとなっている（図1）。

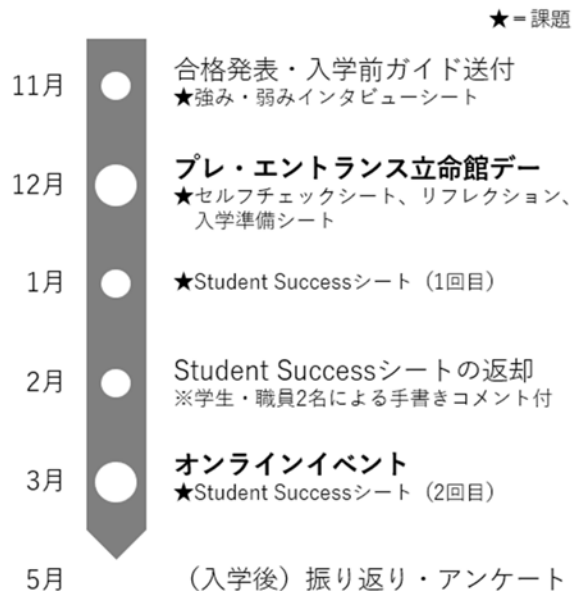


図1 2020年度実施のプログラム

### 3. 結果：1年次春学期の成績から

2007年度以降2015年度（2016年度入学）までの時期を通信講座期、2016年度（2017年度入学）から2018年度（2019年度入学）を合宿期、2019年度（2020年度入学）・2020年度（2021年度入学）をオンライン期としたとき、1年次春学期の修得単位数とセメスタGPAの経年変化は表1の通りである。

表1 修得単位数とセメスタGPAの経年変化

| 形態の変遷          | 学期     | 修得単位数 | セメスタGPA |
|----------------|--------|-------|---------|
| 通信講座期          | 2015 春 | 0     | 0       |
| (学力補完型)        | 2016 春 | -0.56 | -0.08   |
| 合宿期<br>(目標設定型) | 2017 春 | 0.15  | 0.04    |
|                | 2018 春 | 0.38  | 0.04    |
|                | 2019 春 | 1.16  | 0.13    |
| オンライン期         | 2020 春 | 2.56  | 0.54    |
| (目標設定型)        | 2021 春 | -     | -       |

※2015年度春学期を0（基準）としたときの変化量

### 4. 考察

表1から合宿期以降、修得単位数とGPAともに徐々に上昇しており、学力補完型から目標設定型へシフトした入学前教育は一定の成果があったと考えられる。合宿期以降では目標設定のみならず、目標達成のために何が必要なのかをコーチング的に明確化させている。以降、年度を経るごとに明確化・具体化のプロセスを強調し、一人一人に対するフィードバックを重視する方向で実施してきた。そのことが、成績を徐々に押し上げてきた要因と考えられる。

文スポ合格者はその入試の意義から課外活動での活躍が期待されており、ほとんどの場合、課外活動に多くの時間を割いている。その中で正課と両立するためには、正課と課外の両方の視点から見通しを持って主体的・計画的に大学生活を送ることが必要である。入学前に、将来から逆算して大学生活を思い描く機会は、動機付けだけでなく、正課と課外をつなげて考える視点・意識が持てる意味でも意義が大きい。

2019年度実施（2020年度入学）においては、コロナ禍により春学期に課外活動を相当期間制限されていたことが影響していると考えられる。実際に、課外活動がほとんどない分、正課に専念した学生も少なくない。このことから、文スポ合格者は学力補完が必要なのではなく両立を実現するためのプランニングやタイムマネジメント、それらの起点となるアセスメントや目標設定を入学前から意識させることが有効であると考えられる。

### 5. おわりに

入学後の成績の経年変化から、目標設定型の入学前教育は、学力補完型と比較して入学後の成績を向上させる効果があることが明らかとなった。合宿形式とオンライン形式による効果の差については引き続き調査・検討を進めたい。

## 学内における統一的な公務員指導について

### ——（全学に向けての公務員受験指導）——

○伊藤圭一（豊橋創造大学短期大学部）

#### 1. はじめに

2019年度より本学（豊橋創造大学短期大学部）に公務員別科が誕生した。これと同時に公務員試験支援センターも設置された。公務員支援センターは単なる公務員受験バックアップの機能だけではない。この支援センターの設立の企画書には「公務員試験の主要範囲である高校時代の学習の学びなおし」を柱として学習支援の取り組みをすることが目的として挙げられている。公務員試験対策は高校時代の学びなおしでもあり、本学では、成績の振るわない学生向けに学習サポートセンターが設置されている。そこに行くほどでも無い学生への学びなおしの機会の提供も担っている。各学科において初年次教育として基礎ゼミナールが行われている。その各学科の基礎ゼミナールを広範にサポートする役割も公務員試験支援センターと公務員試験支援センターの実施する講座は担っている。そのため学生からの参加ニーズも強くより参加しやすい環境設定が求められてきた。

単なる公務員受験指導に留まらず、公務員として社会に貢献したい若者と、優秀な地元の人材が欲しいという団体との懸け橋となるべく教育を実施している。受験指導に留まらず、即戦力として活躍できるように、また、その期待に応えられるように、地域の将来を見た教育を行っている。地元で学ぶことを最大限に活かして、学びを進めて行けるのが公務員別科である。意欲のある若者に地元で貢献してほしいという願いを込めて開設した。したがって、男女の別は問わない。加えて学びの負担を軽くするために学費も抑えている。

#### 2. 公務員受験指導の現状

「公務員試験は倍率も高い激戦の試験に違いない」というイメージを持つ人も少なくはない。しかし、実際にデータを見ると意外な事実が浮かび上がってくる。受験人数が最も多く、圧倒的な人気を誇る特別区であっても5.8倍の競争倍率であるが、これをさらに細かく見ると、1次合格者は4,219名で1次競争倍率は3.0倍である。そのうち最終合格者数は2,176名であるから、1次合格者は1.9人にひとりが最終合格しているという驚くべき倍率が浮かび上がる。自治体によって倍率に差はあるものの、こうしたデータを見ることで、少なくともイメージだけで公務員試験の厳しさを決めつけるべきではないと言える。難関と思われる筆記試験の倍率自体も実はそれほど高くはないことがわかる。公務員試験の実態は「知る人ぞ知る」状態である。この実態を知らずイメージだけで惑わされる多くの若者は公務員になることを諦めている。

#### 3. 本学の公務員指導

##### 3-1 公務員試験支援センターの設置

公務員になりたくなったら質問に行くことができる場所があることがまず、重要と考えて組織を設置することを働きかけ実現した。大学・短大では専門的な学びを中心に勉強する。この組織は、そこから外れてしまう教養分野の対策を中心に行うことを業務としている。加えて、多く採り入れられるようになってきているSPI試験についても対策している。常勤教員2名から組織されている。

支援内容は以下の通りである。

<公務員の仕事を知る>

### 【インターンシップ】

市役所系のインターンシップに参加する前の  
アドバイスなども行っている  
<希望者に基本的な学びの機会を提供>

### 【対策講座の実施】

春休みなどにSPI対策講座と公務員試験対策  
講座などの集中講座を行う  
<個人に合わせた指導>

### 【受験勉強の相談】

どのテキストを使うのか、受験対策の方法な  
どの相談を受け付けている

### 【問題に対する質問】

わからない問題の質問を受け付けている  
<筆記試験に限らず>

### 【出願から面接まで】

出願書類の整え方から筆記試験・面接指導  
を通じて公務員内定まで指導している。学習  
指導はもちろんであるが、目玉は、インター  
ンシップである。なぜなら、官公庁のインター  
ンシップは大学短大のみ受け入れの状況で  
あるからである。そのことに早く学生が気付  
いてインターンシップに出かけることにつ  
いての後押しをしている。つなり職業について  
学ぶ橋渡しを行っている。インターンシップ  
先にも積極的にでかけて、求められる人物像  
についての情報を集めている。このことを通  
じて指導する側としても学び、学生に指導す  
るときの参考にしている。大学や短大は普段  
の講義や行事、サークル活動などを通じて人  
間形成はなされている。そこで身につけてい  
る力を最大限、面接で発揮できるようにする  
指導を行っている。

### 3-2 全学統一公務員講座の実施

最初にも述べたように、公務員試験支援セ  
ンター実施の公務員講座は、各学科の初年次  
教育のサポートの役割も担っている。そのた  
め、これまでは、各学科に合わせて公務員講  
座を実施してきた。本学は健康医療学部に見  
護学科・理学療法学科、経営学部に見護学  
科、短期大学部に幼児教育保育科、キャリアプ

ランニング科、公務員別科が存在する。公務員  
受験に特化した正課の授業が存在するのは、  
キャリアプランニング科公務員コースと公務  
員別科のみである。それ以外の学生は学内の  
公務員講座のみが公務員試験と高校時代の学  
びなおしの場所になる。昨年までは、この6  
科(成果を実施する2科も含む)に向けて別々  
の公務員講座を展開してきた。しかし、授業  
が全くないコマ(○限目)がなく、各科の空  
き時間に別々に対応をせざるを得ない状況で  
あった。

本年度より、各科の理解と教務課の協力を  
得て、水曜日の5限目が公務員講座のみの時  
間となった。画期的なことである。公務員試  
験を受験する学生を全学的に応援する環境が  
整ったのである。講座への参加者も増え効率  
よく効果的な指導を行うことができるよう  
になった。

1年間を通して必ず水曜日の5限目は公務  
員講座になっている。公務員試験は出題範囲  
の基礎になるのは高校時代の学びである。な  
るべく早い時期での公務員講座受講が高校時  
代の学びなおしにもつながる。公務員受験者  
のみならず、高校時代の学びなおしにも役立  
つ講座として、高い価値のある講座としてこ  
れから飛躍をして行きたいと考えている。

### 【申し込み状況】

| 学部・学科                    | 1<br>年 | 2<br>年 | 3<br>年 | 4<br>年 | 合<br>計 |
|--------------------------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 短大 キャリプ<br>ラ             | 11     | 3      |        |        | 14     |
| 短大 幼・保                   | 8      | 7      |        |        | 15     |
| 専攻科・別科<br>公務員別科          | 2      |        |        |        | 2      |
| 豊橋創造大学<br>経営学部 経営<br>学科  | 3      | 2      | 3      |        | 8      |
| 豊橋創造大学<br>保健医療学部<br>看護   |        |        | 4      | 2      | 6      |
| 豊橋創造大学<br>保健医療学部<br>理学療法 | 9      | 17     | 11     |        | 37     |
| 合計                       | 33     | 29     | 18     | 2      | 82     |

## 賛助会員広告一覧 (申込受付順)

日本データパシフィック 株式会社

株式会社 世界思想社教学社

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

ラインズ 株式会社

株式会社 **KEI** アドバンス

実教出版株式会社

株式会社 くろしお出版

株式会社 東信堂

株式会社 朝日新聞社

# e-Learning System WebClass

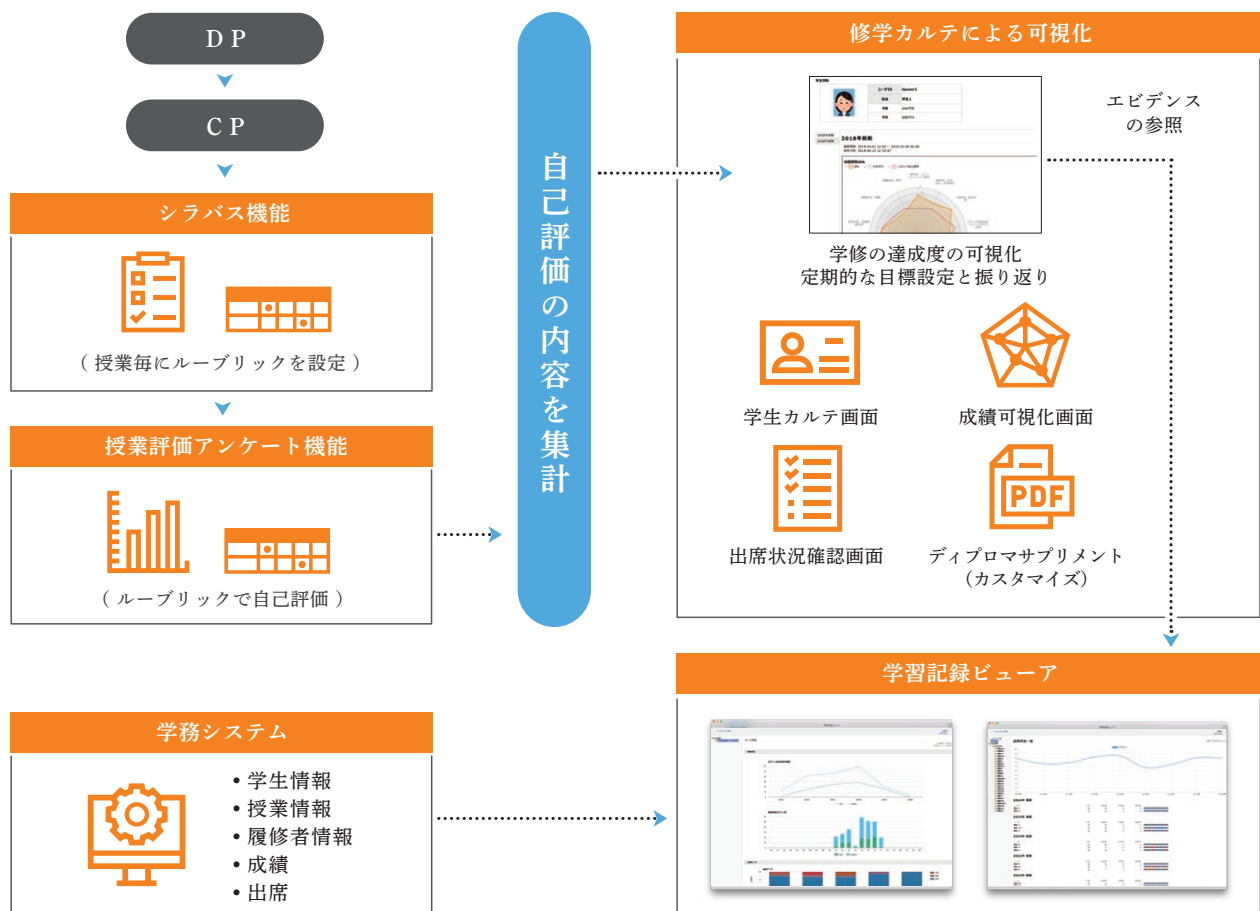
## 学修成果可視化機能

WebClassの基本機能に

「シラバス」+「授業評価アンケート」+「修学カルテ」プラグインを組み合わせる事で、より効果的に学習の達成度を可視化する事が可能です。

### 教員・管理者等の役割

|  システム管理者 |  シラバス管理者 |  授業担当教員 |  学 生 |
|-------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------|
| シラバス管理者の割り当て                                                                              | 大学共通ルーブリックの登録<br>学部、学科共通ルーブリックの登録                                                         | 科目ルーブリックの登録<br>各授業での調整                                                                   | ルーブリックによる自己評価                                                                           |



ラーニング・カンパニーでありたい。  
日本データパシフィック株式会社

〒186-0002 東京都国立市東1-4-15 国立KTビル  
TEL: 042-573-6721 FAX: 042-573-6728  
www.datapacific.co.jp





# 大学生 学びのハンドブック

5訂版

## 人気の初年次教育テキスト、最新版

ノートのとり方、レポートの書き方、ゼミ発表の仕方など、大学生に必要なスタディ・スキルを、イラストで具体例を示してわかりやすく解説。

定価1,320円(10%税込) A5判/128ページ/2色刷 ISBN 978-4-7907-1707-2



改訂で、さらに読みやすく、使いやすくなりました!

- メールと SNS の違いや注意点についてのページ新設
- 読解のヒントや文の流れがわかりやすく示された「テキストの読み方」
- 大学生による取組例で、イメージしやすい「レポートの書き方」
- 最新版の画面キャプチャーで、操作法がすぐわかる Word、Excel

### 違いがわかりやすい表

#### メールを活用しよう

##### コミュニケーションの方法を使い分ける

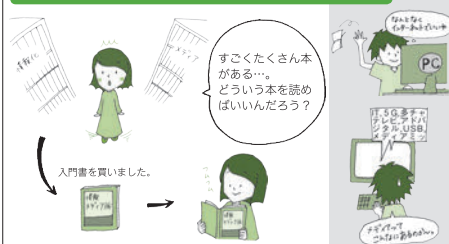
高校までは、自分をよく知る人とのコミュニケーションが中心ですが、大学生になると、人間関係が広がります。また、高校までの先生と異なり、大学の先生は、数百人の学生を相手に複数の授業を担当することもあります。連絡をするときは、相手の状況や相手との関係性を考慮し、丁寧に伝えることを心がけましょう。文面とともにツールの使い分けも重要です。

##### SNS (チャット機能) とメールの違い

| SNS (チャット機能)      | 件名                   | メール       |
|-------------------|----------------------|-----------|
| なし。               |                      | 用件を一言で示す。 |
| いきなり用件を書く。        | 宛名と自分の所属・名前をはしめに書く。  |           |
| 短文のやりとりが多い。会話に近い。 | ひとまとまりの文章を書ける。手紙に近い。 |           |
| カジュアルで、気軽なやりとり。   | フォーマルで、丁寧なやりとり。      |           |

### 取組例がわかるイラストと吹き出し

#### ①本を読んで情報を集める



#### ②疑問や発見から「問い」をたてる

疑問に思ったところや発見したことをメモしながら読み、そこから自分なりの「問い」を設定しましょう。「問い」はあなたの問題意識であり、レポートの核になります。

スマホなどのメディア機器を介したコミュニケーションでは確かな情報

### 操作法がわかる画面キャプチャー

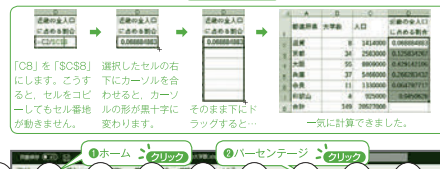
#### ✓割合を計算して、パーセントで表示する

近畿二府四県の人口比を計算してみましょう。割合は個々の数字を全体の数字(合計)で割って求めます。



「=C2/C8」は「C2の値をC8の値で割りなさい」という意味です。セルの最初を「=」にすると、そのセルは値ではなく、計算式として扱われます。

- ①「=」を入力
- ②C2をクリック
- ③「/」を入力
- ④C8をクリック
- ⑤Enterで入力できます。



## 貴学専用の「入学前／初年次教育テキスト」をお作りします



低コスト 短期間 省手間

履修案内 施設紹介  
危機管理 大学用語

カスタマイズ

加えて



献本申込受付中

サンプル公開中



文部科学省後援事業

# 日本語検定

社会人として必要な日本語力が身に付きます！

日本語検定は敬語、文法、語彙、言葉の意味、表記、漢字の6領域と読解問題で日本語の総合的な知識と運用能力を測ります。全国約200の大学・短大で、初年次教育、キャリア教育等で活用されています。100以上の企業が採用にあたって日本語検定合格者を優遇しており、就職までに一定レベルの日本語力が求められています。

【Q】のような場面で、それぞれの( )部分はどのような言い方をすればよいでしょうか。最も適切なものを選んで、番号で答えてください。(2020年度第2回日本語検定 3級 敬語)

【大学の演劇サークルの公演で、受付係が招待客に】

本日はご来場ありがとうございます。お席には係の者が( )。

1 ご案内になります

2 ご案内します

3 案内して差し上げます

公式キャラクター  
にほごん



A 正答 2

ステップアップ  
日本語講座

初級 4・5級対応

定価 660円(本体600円) ISBN 978-4-487-60705-1



ステップアップ  
日本語講座

中級 3・4級対応

定価 660円(本体600円) ISBN 978-4-487-60706-8



ステップアップ  
日本語講座

上級 2・3級対応

定価 770円(本体700円) ISBN 978-4-487-60709-9



## 教師用指導書

指導のポイントと問題の解説を詳細に記した、教師用指導書を用意しています。(原則として、テキストを20冊以上ご購入いただくと、指導書が1冊付きます)



## シラバス

「通年用」と「前期後期用」のシラバスを用意しております。詳細は日本語検定委員会事務局(下記)までお問い合わせください。



## オンデマンド版

学校名を入れたオリジナルデザインのテキストの作成も可能です。(原則として、50冊以上から承ります)ご注文は、東京書籍(株)の各支社及び検定事業部(03-5390-7495)にご連絡下さい。



2021(令和3)年度 第2回(通算第30回)

申込期間 8/2(月) ~ 10/15(金) 10/16(土) 消印有効

一般会場 11/13(土) : 準会場 11/12(金)・13(土)

※団体受検の場合のみ、学校や企業を検定会場(＝準会場)として受検できます。 ※2022年度は6月中旬、11月中旬を予定しています。

特定非営利活動法人

日本語検定委員会

お問い合わせ 〒114-8524 東京都北区堀船 2-17-1

☎ 0120-55-2858

●午前9:30～午後5:00  
(土・日・祝日を除く)



【特別協賛】読売新聞社 【協賛】時事通信社/東京書籍

【後援】文部科学省/日本商工会議所/経団連事業サービス/全国連合小学校長会/全日本中学校長会/全国高等学校長協会/全国工業高等学校長協会/全国商業高等学校長協会/全国高等学校国語教育研究連合会/日本PTA全国協議会/全国高等学校PTA連合会/日本青少年育成協会 他

基礎を学び直せる教材ないかなあ。  
SPI対策にもつなげられないかなあ…。



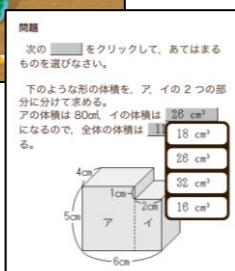
そのお悩み、**ラインズ**が解決します！

## ラインズドリル リメディアル教育用eラーニング



▲PC画面

スマホ画面▶



### ✓スマートフォンでできる！

スマホに対応しているため、ログイン率の高さにつながります。

### ✓効率よく学習できる！

テストで理解度を判定し、苦手な分野を中心に学習できます。

### ✓学習状況を一目で把握できる！

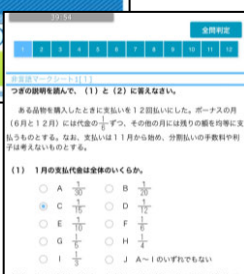
管理画面から学生の状況をリアルタイムで把握できます。

## ラインズSPI 基礎から学べるSPI対策eラーニング



▲PC画面

スマホ画面▶



### ✓実践的にできる！

本番同様の画面で、実践的に模擬試験が受けられます。

### ✓演習問題は2000問以上！

豊富な問題量で力をつけられます。

### ✓初年次教育でも活用できる！

初年次の基礎教育として、ラインズSPIを取り入れている大学もあります。

## ■お問い合わせはこちらから

ラインズ株式会社 リメディアル教育グループ  
<https://www.education.jp/education02/jafye2021>



体験サイトも  
ご利用いただけます！

# ジェネリックスキル育成・評価プログラム

プ ロ グ

## 「PROGテスト」のご案内

昨今の高大接続改革の中で、学力の3要素をバランス良く育成する事が求められる中で、「思考力・判断力・表現力」はリテラシーの力として、「主体性や協働性」はコンピテンシーの力として「PROG（プログ）テスト」が貴学で学ぶ学生の現状把握、更に新たな課題発見やプラン作成のきっかけになればと考えております。汎用的能力の測定・育成について是非ご検討いただきますようお願い致します。

### リテラシー

新しい問題や、これまでの経験のない問題に対して知識を活用して課題を解決する力

＊習得した知識を現実問題に活用する事で育成

知識を学ぶ

知的コンピテンス

学び続ける力の  
要素

### コンピテンシー

周囲の状況に上手に対応するために身に付けた決意決定・行動指針などの特性

＊経験を振り返りモデルを意識して行動する事で育成

経験を積む

社会的コミュニケーション  
コンピテンス

どんな仕事にも転  
移可能な力の要素

### リテラシーテスト

### コンピテンシーテスト

| 実施形態 | 紙またはWeb受験                                                                        |                     |
|------|----------------------------------------------------------------------------------|---------------------|
| 問題数  | 30問                                                                              | 159問                |
| 実施時間 | 45分                                                                              | 40分                 |
| 測定領域 | (1)問題解決力<br>(情報収集力、情報分析力、課題発見力、構想力)<br>(2)言語処理、非言語処理能力                           | 対人基礎力、對自己基礎力、対課題基礎力 |
| 結果納品 | ①個人向け結果報告書、②教職員向け報告書（要約版）、③PROGの強化書、④全体傾向報告書（有料オプション）：①学生向け解説会、②他の教学データとの組み合わせ分析 |                     |

### 実施の流れ

#### ①お申込み

・テスト実施予定日の最低14日前迄にご連絡下さい

#### ②テスト実施

・実施時間85分（リテラシー＋コンピテンシー）  
・運営マニュアルを準備しています

#### ③結果納品（答案返送後、約2週間）

・受験者向け→結果報告書、活用テキスト（強化書）  
・学校様向け→成績一覧、個人結果要約版、全体集計

#### ④結果分析報告（受験者向け・学校様向け）

・全体傾向の説明／能力育成のアドバイス

### 実施条件

#### ①料金（リテラシー、コンピテンシー両方）

@3,300円（税込／受験者数1-299名まで）

※実受験者数毎に団体割引がございます。

※PROGテストはリテラシーもしくはコンピテンシーの片方のみ受験も可能です。

#### ②受験対象

高等教育機関の学生

### お問い合わせ先

河合塾グループ  
株式会社 **KEIアドバンス**

TEL : 03-5276-2731（代表）

受付時間：9:00～18:00（土日・祝日除く）

URL : <http://www.52school.co.jp/>



好評新刊

# オンライン授業のためのZoomレッスン

簡単にできるアクティブラーニングのコツ

- ★ Zoomの操作を基礎から身につけられる入門書
- ★ 7章と8章は教育現場での活用を想定



## 目次

- 0章 Zoomの前に
- 1章 Zoomのサービスとは
- 2章 Zoomのセットアップ
- 3章 Zoomの操作〈基礎1〉
- 4章 Zoomの操作〈基礎2〉
- 5章 Zoomミーティングのホストと共同ホスト
- 6章 ブレイクアウトルーム
- 7章 授業に役立つZoomプラス
- 8章 教室内の活性化のためのグループ活動について

岸田典子・鈴木有香 著

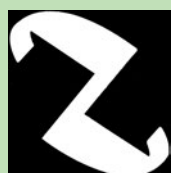
B5判/112頁

定価 1,320円 (本体1,200円+税)

ISBN 978-4-407-35250-4

・ご注文は書店様を通してお願いいたします。

○ 本文抜粋見本がごございます。お問合せは下記へ。



実教出版株式会社  
企画開発部

〒102-8377 東京都千代田区五番町5番地  
TEL 03-3238-7765 FAX 03-3238-7770  
<https://www.jikkyo.co.jp/>

# くろしお出版

## 確かな英語の力を育てる 英語教育のエッセンシャルズ

■田中茂範/阿部一[著]／A5判／本体1,800円＋税

近年、国際化に伴い英語教育改革の必要性が叫ばれている。改革のために何が必要か。それは教師が変わること！ 語彙・文法・慣用表現を中心に指導のこれまでのあり方を再考し、新しい方向性を示す。生徒の真の英語力を育むために。



## 個に応じた英語指導をめざして

ユニバーサルデザインの授業づくり

■村上加代子[著]／A5判／本体2,200円＋税

子どもの視点から英語の読み書き習得の難しさを理解し、実態に応じた指導ができるようになることをめざす。英語教育に携わる小・中学校、特別支援などの先生を対象に、ユニバーサルデザインの配慮を施した授業づくりを提案する。



## 留学生のための 考えを伝え合うプレゼンテーション

■仁科浩美[著]／B5判／本体1,800円＋税

プレゼンテーションに関する基本的な構成や具体的に豊富な日本語表現を、タスクを通して学ぶ。質疑応答も丁寧に触れ、相手に配慮する態度を重んじコミュニケーション能力も高める。文理対応で発表例動画あり。日本語学習者中級後半～上級向け。



## 読む力 初中級

■奥田純子[監修] 竹田悦子/久次優子/丸山友子/矢田まり子/内田さつき[編著]／B5判／本体1,800円＋税

大好評『読む力』の初中級編。書き下ろしから生の文章まで多様な読み物に触れ、ことばを理解する「言語タスク」と、筆者の考えなどを読み取る「認知タスク」を通して、アカデミックで深い読みを身につける。日本語能力試験 N3 から。



## 知へのステップ 第5版 大学生からのスタディ・スキルズ

■学習技術研究会[編著]／B5判／本体1,800円＋税

「大学での勉強の仕方がわかる」と支持を受け続ける、大学1年生の必携書籍。「聴く・読む・書く・調べる・整理する・まとめる・表現する・伝える・考える」力を段階的に身に付けられるよう構成。Windows 10、Microsoft Office 2016 に対応改訂。ダウンロードデータ有。



## 知的な論文・レポートのための リサーチ入門

■竹田茂生/藤木清[著]／A5判／本体1,800円＋税

アンケートやインタビュー等で多くのデータを集めて分析する「調査」は、ビジネスプレゼン・研究論文に不可欠。「調査」の基礎を社会調査とマーケティングリサーチ双方の視点からやさしく解説。切り離して提出できるワークシート付。



## ゼロからの統計学 使えるシーンが見える

■竹田茂生/藤木清[著]／A5判／本体1,800円＋税

数字の情報やグラフがメディアに氾濫する今、統計学の知識は文系学生にも論文作成や就活に必須。難しい数式を極力減らし、身近なテーマのシナリオで、苦手な人も学びやすく工夫した。基本から学び直したい大人の読者にもお勧め。



# 高校生の学びと成長に 向けた「大学選び」

— 偏差値もうまく利用する —

溝上慎一著

新書・並製・一八四頁・九九〇円

③ 社会に生きる個性 — 自己と他者 拡張パーソナリティ・エージェンシー  
四六判・並製・二〇八頁・二六五〇円

② 学習とパーソナリティ — 「あの子はおとなしいけど成績はいいんですよね」をどう見るか  
四六判・並製・二四八頁・一七六〇円

① アクティブラーニング型授業の基本形と生徒の身体性  
四六判・並製・一八四頁・一一〇〇円  
溝上慎一著

① アクティブラーニングの技法・授業デザイン  
A5・並製・一五二頁・一七六〇円  
安永悟・関田一彦・水野正朗編

② アクティブラーニングとしてのPBLと探究的な学習  
A5・並製・一七六頁・一九八〇円  
溝上慎一・成田秀夫編

③ アクティブラーニングの評価  
A5・並製・一六〇頁・一七六〇円  
松下佳代・石井英真編

アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換  
A5・並製・二〇八頁・二四〇〇円  
溝上慎一著

大学におけるライティング支援 — どのように「書く力」を伸ばすか  
関西大学ライティングラボ・津田塾大学ライティングセンター編  
A5・並製・二四〇頁・二六四〇円

文字を手書きさせる教育 — 「書く」に何ができるのか  
A5・並製・二六四頁・二六四〇円  
鈴木慶子著

視写の教育 — へからだに読み書きさせる  
A5・上製・二四〇頁・二六四〇円  
池田久美子著

大学における書く力 考える力 — 認知心理学の知見をもとに  
A5・上製・二八〇頁・三二二〇円  
井下千以子著

「書く」ことによる学生の自己形成 — 文章表現・パーソナル・ライティングの実践を通じて  
A5・上製・一八四頁・二六四〇円  
谷美奈著

才能教育・2E教育概論 — ギフテッドの発達多様性を活かす  
A5・上製・三六〇頁・三九六〇円  
松村暢隆著

日本の大学経営 — 自律的・協働的改革をめざして  
A5・上製・四二四頁・四二九〇円  
両角亜希子著

教職協働による大学改革の軌跡  
A5・上製・二五八頁・二六四〇円  
村上雅人著

教学マネジメントと内部質保証の実質化  
A5・上製・二四四頁・三二二〇円  
大学基準協会監修 永田恭介・山崎光悦編著

カナダの「開かれた」学校づくりと教育行政  
A5・上製・三六〇頁・四一八〇円  
平田淳著

女性の大学進学拡大と機会格差  
A5・上製・三〇四頁・三九六〇円  
日下田岳史著

現代アメリカ貧困地域の市民性教育改革 — 教室・学校・地域の連関の創造  
A5・上製・二二二頁・四六二〇円  
古田雄一著

米国における協働的な学習の理論的・実践的系譜  
A5・上製・三六〇頁・三九六〇円  
福岡祐貴著

台湾における高等教育多様化の論理  
A5・上製・二四〇頁・三二二〇円  
廖于晴著

現代ロシアの教育改革 — 伝統と革新の「光」を求めて  
A5・上製・四三二頁・三九六〇円  
ロシアソビエト教育研究会 嶺井岩崎・澤野タス・スタンベコ編著

湾岸アラブ諸国における外国大学分校の質保証  
A5・上製・二七二頁・四一八〇円  
中島悠介著

国際教育開発への挑戦 — これからの教育・社会・理論  
A5・並製・二五八頁・三〇八〇円  
荻原崇世・橋本憲幸・川口純編著

東信堂ブックレット  
② 教育学って何だろう — 受け身を捨てて自律する  
A5・並製・八八頁・一一〇〇円  
福田誠治著

③ 北欧の学校教育とWell-being — PISAが語る子どもたちの幸せ感  
A5・並製・七二頁・一一〇〇円  
福田誠治著

④ CEFR(セファール)って何だ — インクルーシブな語学教育  
A5・並製・六四頁・九九〇円  
福田誠治著

旧制東京高等師範学校及び東京文理科大学八〇年のあゆみ — 大学の未来と理想の人間像を求めた人々  
A5・上製・一〇七二頁・一五四〇〇円  
山田宣夫著

東信堂

※ 博論書籍化、教科書・研究書出版のご相談は代表メールまで！

〒113-0023 東京都文京区向丘 1-20-6  
HP <http://www.toshindo-pub.com>  
☎ 03-3818-5521 ☎ 03-3818-5514  
✉ [toshindo\\_onlineorder1985@gmail.com](mailto:toshindo_onlineorder1985@gmail.com)  
✉ [tk203444@fsinet.or.jp](mailto:tk203444@fsinet.or.jp) (代表)

honto  
(丸善  
ジュンク堂  
文芸堂)

楽天  
ブックス

アマゾン

東信堂  
直接注文  
お問い合わせ



毎週ネット配信！ プリント教材

# 朝日新聞 時事ワークシート

大学・専門学校向け  
朝日新聞を  
素材とした教材

## 訪日客 地価上昇の原動力

京都・北海道の観光地で顕著



### 訪日客 地価上昇の原動力

2018年の基準地価は訪日外国人客が多い観光地や駅前などで上昇幅が大きい半面、地方では下落が続く。多くの観光客でにぎわう京都市東山区の祇園周辺。八坂神社そばの商業地の地価は1平方メートルあたり217万円と、前年比29.2%も上昇し、商業地で全国2位の上昇率だった。京都市の17年の外国人の宿泊客数は過去最高の353万人にのぼった。市内では外資系高級ホテルの進出が相次ぎ、京町家を簡易宿所に転用するケースも続出する。訪日客の好影響が及ぶのは北海道も同じだ。札幌市の繁華街・ススキノの市街地。近くの地価は前年比24.4%上がり、地方圏の商業地では2番目に上昇率が高かった。長期滞在型ホテル「東急ステイ」は18年4月、北海道に初進出した。11月にも2店舗目を開業する。「外国人観光客が増え、街が活況が、再開発の促進に影響している」。北海道不動産鑑定士協会の斎藤武也氏は「訪日客が数多く足を運ぶ地域は地方でも地価が上がり、平均を押し上げている。二極化というよりズボット化している」と話す。

※基準地価は毎年、各都道府県が7月1日時点の基準地の地価を調べて、公表したもの。基準地は全国で約2万カ所。地点ごとの地価のほか、都道府県の平均などが公表されている。

問題1 「都道府県別の地価変動率」の図を見て、商業地の地価変動率の上位3位の都道府県名を書きなさい。

1位( ) 2位( ) 3位( )

問題2 京都府や北海道の商業地で、地価の上昇が著しいのはなぜですか。簡単に説明しなさい。

( )

問題3 本文中の下線部の「ズボット化」とは、どのような現象ですか。図も参考に、説明しなさい。

( )

2018年9月16日掲載 [経済・生活] © 朝日新聞社2018

### 訪日客 地価上昇の原動力



問題1 「都道府県別の地価変動率」の図を見て、商業地の地価変動率の上位3位の都道府県名を書きなさい。

1位( ) 2位( ) 3位( )

問題2 京都府や北海道の商業地で、地価の上昇が著しいのはなぜですか。簡単に説明しなさい。

( )

問題3 本文中の下線部の「ズボット化」とは、どのような現象ですか。図も参考に、説明しなさい。

( )

2018年9月16日掲載 [経済・生活] © 朝日新聞社2018

社会への  
関心を高め  
考える力を  
育てる

新聞掲載から3週間前後で教材に

<http://manabu.asahi.com/worksheet/>

時事ワークシート

朝日新聞



## 大会運営委員会メンバー

### 【初年次教育学会会長・大会運営委員長】

藤田 哲也 (法政大学)

### 【大会運営委員・理事】

清水 栄子 (追手門学院大学)

西村 秀雄 (金沢工業大学)

藤波 潔 (沖縄国際大学)

藤本 元啓 (崇城大学)

### 【大会運営委員・理事以外】

加藤 みずき (多摩大学)

関田 一彦 (創価大学)

表紙ロゴデザイン 山田 慧美

初年次教育学会 第14回大会 発表要旨集

発行日：2021年9月10日

発行者：初年次教育学会大会運営委員会

初年次教育学会第14回大会事務局

(国際文献社 初年次教育学会大会ヘルプデスク)

〒162-0801 東京都新宿区山吹町358-5 アカデミーセンター

E-mail : [jafye-desk@bunken.co.jp](mailto:jafye-desk@bunken.co.jp)

第14回大会 HP : <http://www.jafye.org/conf/conf2021/>